
仮面ライダー × 仮面ライダー X & W - Double Stranges -

エレメントブレイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー X&W - Double St
ranges -

【Nコード】

N05930

【作者名】

エレメントブレイド

【あらすじ】

風都に突如としてメモリブレイクされない「GOD」と名乗る怪人軍団が現れた。

左翔太郎とフィリップは風都を守るべく怪人に立ち向かっていく最中謎の記憶喪失の女性と出会った。

同じころ別世界では謎のメモリを使い、人間が突如怪人になるといふ怪事件が起きていた。

神敬介はGODの送りこんだ神話怪人・ケンタウロウスと戦いながら事件調査へと向かった。

2つの世界で未知なものが交差していき、出会わないはずの2人の仮面ライダーが出会った。

仮面ライダーXと仮面ライダーWの昭和×平成の作品です。

コラボとなっていましたでしたがこれからは1人で書いていきたいと思えます。

相変わらずの文章ですがどうかよろしく願います。

第1話 謎のAノ事件の始まり(前書き)

こんにちはエレメントブレイドです。
それでは最初はW編です。

第1話 謎のA / 事件の始まり

深夜

強い雨が降る中、紫色のドレスに黒い帽子を被った女性が傘も差さずに走っていた。

何故こんな雨の中を女性が走っているのか？

それにはある訳があった。

女性はふいに立ち止まり、後ろから誰も追ってこないことを確認すると、安心から「はあ。」と息を吐いた。

「思い出さなきゃいけない事ある筈なのに…。」

頭に手を当て必死に思いだそうとするが、何も思い出せなかった。

そう、彼女は記憶を失っていたのであった。

唯一覚えていることは自分の名前と、彼とした約束だけであった。

彼とは誰の事なのかは思い出せないが、大切な約束という事だけは覚えていた。

約束の内容を呟やこうとすると、後ろから足音が聞こえてきた。

「また来た…。」

彼女は記憶を失った状態で目を覚ましたてから、ずっと追われていた。

何故自分は逃げているのか？

何故自分は追われているのか？

それさえもわからないまま、彼女は再び走り出した。

風都

街の至る所で風車が回り、様々な場所から風が吹く事から通称 風の街 と呼ばれていた。

シンボルである風都タワーやマスコットキャラであるふうとくんは街中の人から愛されていた。

その街の風都警病院を後にする2人の人影があった。彼らは鳴海探偵事務所を拠点に探偵業する人物であった。

「雪絵さん…、記憶思い出せるかな…。」

そう呟くのは自称鳴海探偵事務所所長 鳴海亜樹子 であった。

隣でソフト帽を被った完熟^{ハートボイルド}ではなく半熟探偵^{ハーフボイルド}である 左翔太郎 は「さあな…。」と呟いた。

「でも案外思い出さないほうがいい記憶なのかもしれねえな。」

彼らは昨日・ドーパントでありガイアメモリの後遺症により記憶を失ってしまった須藤雪絵を病院に送り届けたところであった。

復讐とはいえ殺人を起こしてしまった雪絵は本来なら警察に届けるところだが、翔太郎「こいつは悪くね、悪いのは…この街を掬う悪魔^{モリ}だ。」と言い彼女を病院へと届けた。

風都警察にいる男も渋々「記憶を思い出すまでは、待ってやる。」
と言いつつ逮捕をまっけてくれた。

翔太郎はソフト帽を深く被りなおした。

「悲しい事件だったな…。」

空を見ながら小さく呟いた。

その直後「何しんみりしとんねん!!」と書かれた緑色のスリッパが翔太郎の頭に繰り出された。
翔太郎はスリッパを持つ犯人に叫んだ。

「なにすんだ亜樹子オ!! 今のは別に叩かれるような場面じゃなかっただろうが!!」

右手にスリッパを持つ亜樹子は特に気にした様子もなく「へへへ。」と笑いながら答えた。

「いや、ハーフボイルドの翔太郎君にはそんな言葉似合わないと思っ…っいね。」

「っいね…じゃ、ね…だろ!!」

亜樹子を捕まえようと腕を伸ばすが「ヒラリ」かわされてしまった。翔太郎は「待て!!」と言いながら亜樹子を追い掛けた。

「待てと言われて待つ人はいないよ。」

2人が追いかけてこを始め後少して翔太郎が追い付きそうになった。

「待てえええい!!」

これは翔太郎の声ではなかった、無論亜樹子の声でもなかった。翔太郎と亜樹子は声のした方を振り向いた。
見ると1人の女性が追われていた。

しかも追っている方は人間ではなかった。

ギリシア神話に出てくる戦士のような鎧を纏い足にローラーが付い

ている、濃い赤色をした怪人であった。

女性と怪人の距離から見て追いつかれるのも時間の問題であった。亜樹子はそれを見て「ガクガク」と震えながら叫んだ。

「翔太郎くん、早くしないと彼女が！！」

「ああ、わかつてる…。」

そう言いながらポケットから黒い携帯電話 スタッグフォン を取り出した。

翔太郎はそれを耳に当て、事務所にいる相棒に連絡をかけた。

1 コールで電話の相手が出てきた。

『やあ、翔太郎。どうしたんだい？ 雪絵さんを病院に届けるんじやなかったのかい？』

電話の主は翔太郎の相棒 フィリップ であった。お気楽なフィリップに翔太郎は焦りながら話した。

「ドーパントが現れた、女性が襲われてる。」

『成程、わかった…、僕はいつでもOKさ。』

「止し行くぜフィリップ。」

そう言うと翔太郎は怪人に向かって走り出した。

その頃怪人は対に女性を追い詰めていた。

後ろは壁であり逃げられそうにもなかった。

女性は恐怖に震えながら怪人に話し始めた

「あなたは…何故私を追うんです？」

その言葉に「グアアア。」と怪人は笑いながら答えた。

「何を言っている、キサマは我らの裏切り者だからではないか。」
「裏切り者…?」

「裏切り者。」と言われても、彼女には何を言っているのかわからなかった。

裏切り者と言われても何を裏切ったのか?

そもそも自分も目の前にいる怪人の仲間なのか?

考えて見ようにも記憶を失っている彼女は何も思い出せなかった。
女性はもう1度怪人に尋ねた。

「裏切ったって…何をですか?」

怪人は眉を顰めた。

「なにを言う、それは偉大なるゴ…。」

言いかけた瞬間、翔太郎のキックが怪人の頭に炸裂した。

怪人は目の前の壁に激突した。

翔太郎はずれたソフト帽を被りなおしながら、女性の元へと向かっていった

「大丈夫かい、お嬢さん。」

翔太郎が手を差しのべると、女性は小さく「はい。」と答えた。
後ろにいる亜樹子に「この女性を頼む。」と言つと、亜樹子は「任せといて。」と答えて女性を連れて何処かへ身を隠した。
怪人はゆっくりと立ち上がった。

「ただの人間ごときが、よくもこのアキレスを邪魔してくれたな。」

翔太郎を指さしながら怪人 マツハ・アキレス は叫んだ。

「ほおう…。」と言いながら翔太郎はアキレスを睨んだ。

「アキレス・ドーパントって言うのか、何の理由かはしらねえが追われる女性を助けない男はいねえだろ。」

「それに…。」と言いながら胸ポケットからWに象られた赤いベルト ダブルドライバー を取り出した。

ダブルドライバーを迷わず腰に装着する、翔太郎が装着すると同時に事務所にいるフィリップの腰にもダブルドライバーが出現した。

翔太郎は右手に切り札の記憶を宿した黒いガイアメモリ ジョーカーメモリ を、フィリップは左手に風の記憶を宿した緑の サイクロンメモリ を握った。

そして2人同時に叫んだ。

CYCLONE

JOKER

「『変身』」

先にフィリップがサイクロンメモリをダブルドライバーの右側に装着した、するとフィリップの意識は翔太郎の体へと移された。

翔太郎は残された左側にジョーカーメモリ差し込みダブルドライバーを展開させた。

CYCLONE / JOKER

電子音が鳴り響くと旋風が翔太郎の体を包みその姿を変えた。

Wの形をした触角に赤い瞳、中央の銀色のラインを境に左側は黒に右側は緑の色を体に、背中にはマフラーが靡いていた。

翔太郎の魂が宿る左側の指を「パチン」と鳴らすと、アキレスを指さした。

「ただの人間じゃねえ、俺は…いや、俺たちは仮面ライダーだ。」

風都を守る風の切り札 仮面ライダーW・サイクロンジョーカーは高らかにそう宣言した。

Wを見たアキレスは「なにっ!？」と驚いたように声を上げた。

「仮面ライダーだど!! キサマも仮面ライダーだと言うのか!!」

「キサマも…? ああ照井のことか。」

アキレスが話す仮面ライダーの事を、照井竜が変身する 仮面ライダーアクセル と勝手に結論付けると、「行くぜ。」という言葉と共にアキレスに向かっていった。

アキレスは背中に装着された短剣を引き抜き向かってくるWに素早く振りかざした。

素手で戦おうとしていたWは武器を使った攻撃に「うお!？」と驚いたように後ろへと退いた。

アキレスは素早い動きでさらにWへと迫ってきた、それを次々と避けていたWであったが遂に一撃が体に入った。斬られた箇所からは煙が出ていた。

左側の手で斬り口を抑えていると右側の瞳が赤く発光した。

「翔太郎、メモリチェンジだ。」

「OKフィリップ。」

Wの左半身は銀色の闘士の記憶を宿した　メタルメモリ　を取り出すとジョーカーメモリを抜き、メタルメモリを差しこんだ。

METAL

CYCLONE/METAL

左半身の銀色に変え風の闘士　サイクロンメタル　へとハーフチェンジした。

サイクロンメタルになった途端背中に棒状の専用武器　メタルシャフト　が装着されていた。

Wはメタルシャフトを抜き取り「ブンブン」と力強く何度も回した。

「おらっ！！」

メタルシャフトと短剣が「カキン」と火花を鳴らしぶつかり合った。先程までと変わらず素早い剣さばきを見せるアキレスであったが、風のように速いメタルシャフトの動きに徐々に劣勢になっていった。アキレスは舌打ちを鳴らすと何かを呼ぶように指を鳴らした。

その直後周りから、黒の船乗りのセーラー服を身に纏い、胸やベルトに「GOD」と刻まれた集団が現れた。

「コッコジイー、ジイー」「」「」

「何だ…こいつらは？」

突如現れた黒い集団は皆足にローラースケートがはめられており、華麗に滑りながらWを囲んだ。

アキレスはWや黒い集団から一歩引くように後ろへと下がった。

「後は頼んだぞ戦闘工作員共！！！」

そう言い残すと、足に装着されたローラーを使い時速60キロの車
さえ追い越すほどのスピードで逃げていった。

「待て!!」と叫んだWであったが、叫んだときには既にアキレス
は見えなかった。

残されたWは周りにいる戦闘作業員と呼ばれる集団に目を向けた。
高速で回る彼らを見ているだけで思わず意識が失いそうになっ
てしまった、これが「アキレス戦闘作業員死の舞い」であった。

Wは思わず立ちくらみをしてしまった。

「こうなつたら…ルナメタルだ。」

「わかつたよ。」

LUNA

LUNA/METAL

W右半身は黄色の幻想の記憶を宿したガイアメモリをサイクロンメ
モリの代わりに差し込んだ。

右半身が光り輝くと幻想の闘士 ルナメタル へとハーフチェンジ
をした。

Wはメタルシャフトを戦闘作業員に向かって振り回した。

すると鋼鉄のメタルシャフトが鞭のように曲がった、これがルナメ
モリの効力であった。

「『おりゃあああ!!』」

「『ジーン!!』」

メタルシャフトを鞭のように扱い戦闘作業員を一網打尽にした。

「ジー。」と声を上げて戦闘作業員は次々と液状に溶けていった。
戦闘作業員を倒すと逃げたアキレスのほうを向いた。

普通に追い掛けたら今からでは追いつきそうにもなかった。

『翔太郎、リボルギャリーを呼んどいたよ。』

そう言うと同時に後方から黒い高速移送装甲車　リボルギャリー
が走ってきた。

これは事務所の地下ガレージにあるがスタグフォンの遠隔操作を
使って呼び寄せたのであった。

Wがジャンプするとリボルギャリーの中央部分が展開し、黒色の車
体部分と緑色の車体後部のW専用バイクハードボイルダーが現れた。
見事それに跨ると後ろの換装ユニットの1つであるダッシュブース
トユニットを車体後車に装着した。

エンジンを回すと爆発的なスピードで走り始めた。

「さあ、追いつくぜ。」

『わかってるよ。』

そう会話しながらサイクロンメモリとジョーカーメモリを取り出し
ダブルドライバーに差し込んだ。

CYCLONE / JOKER

ルナメタルから基本フォームであるサイクロンジョーカーへと戻っ
た。

ハードボイルダー・スタートダッシュモードは一気に加速させた。
一般車など比べ物にならないスピードで走り、瞬く間に前を走るア
キレスに追いついた。

Wはアキレスの隣へとバイクを走らせた。

「よおう、また会ったな。」

「な……！！　このマツハアキレスに追いついただと。」

自分に追いつけるものがあることにアキレスは驚いた。

「以前はこの素早さで仮面ライダーをも倒した事がある、そんな自分に追いつける者などいない。」と考えていたのであった。

アキレスはローラーを加速させ、Wを引き離すべく更に速くは走り始めた。

「おっと、もう逃がさないぜ。」

Wはハードボイルダーの座席にバランスよく立ち、ジョーカーメモリをダブルドライバーから外した。

『さあメモリブレイクだ。』

「ああ、決めるぜ。」

手に持つジョーカーメモリを右腰に装着されたマキシмумスロットに差し込んだ。

するとWの周りを竜巻が包んだ、それと同時に右腕でマキシмумスロットを叩いた。

JOKER: MAXIMUMDRIVE

電子音が響くと竜巻によってWの体は空中へと上昇していった。

上昇が一定の高さで止まるとマッハアキレスに向かって急降下していった。

「ジョーカーエクストリイイイム!!!」

必殺技名を叫ぶと同時にWの体は右半身と左半身が中央で分割し2人同時にキツクの体勢に入った。
アキレスが後ろを振り向いたときには既に眼と鼻の距離であり避けることは出来なかった。
ジョーカーエクストリームがアキレスに炸裂した。
見事直撃を喰らったアキレスは後方に吹き飛んだ。
必殺技を喰らい瀕死状態のアキレスンは最後の力を振り絞って立ち上がった。

「GODに栄光あれええ!!!」

そう叫ぶとアキレスは爆発していった。

Wはそれを見届けた。

これで一件落着かと思われたが、右半身のフィリップがあることに気付いた。

「可らしい…メモリブレイクされないなんて…」

Wにメモリブレイクされたドーパントは必ずガイアメモリ使用者と砕けたガイアメモリが残る筈だった。

しかし今倒したアキレスは何も残さずに爆発していった。

「おい、まさか死んじまつたんじゃねえだろうな？」

「いや…それはありえない、後遺症は残る場合はあるがメモリブレイクされて死ぬ人間はいないはず…」

今思い返してみると戦闘作業員と呼ばれた集団も液状に溶けただけでメモリや人間は残っていなかった。

戸惑う翔太郎にフィリップはある考えを話し始めた。

「もしかして…彼らはドーパントではなかったんじゃないかな？」
「ドーパント以外の怪人だと…？」

アキレスが残していったGODという言葉に突如現れたドーパント以外の怪人…。
何かがこの街で起きていると感じた。

『取りあえず一旦事務所に戻って来たほうがいい、検索はその後だね。』

「ああ、わかった。じゃあ変身を解くぞ…。」

ダブルドライバーを閉めると変身とは逆の風が起こり変身が解除された。

亜樹子たちの元へとも戻ろうとするとりボルギャリーが翔太郎に突っ込んできていた。

翔太郎は「うわあああああ！！」と叫び声を上げてダイビングしながらりボルギャリーを避けた。

中央が展開すると中から亜樹子たちが出てきた。

情けなく倒れている翔太郎は急に鳴り響いたスタックフォンを取り出した。

『ついでにアキちゃん達をそっちに送つといたからね、その方が安全だろう？』

「次からはもつと早く言えよ…。」

そう言うと同時に電話は切れた。

亜樹子は倒れている翔太郎を見て「何やってるの？」と聞いたが翔太郎は「なんでもねえよ。」と答え立ちあがった。

ふと亜樹子の隣を見ると謎の女性がいた

翔太郎は体に付いた埃を叩き、軽く咳払いをすると女性に話しかけ

た。

「大丈夫ですかお嬢さん、失礼ですが何故あいつらに襲われたか教えてくれませんか？」

女性は言いにくそうに「それが…。」と言葉を続けた。

「覚えてないんです。あの怪物がなんだったのか、自分が何者なのか…。」

「「はあっ!？」」

理解できない答えに翔太郎と亜樹子は同時に声を上げた。

女性の話を聞くと、目が覚めたら記憶がなく気付いた時にはアキレスに追われていたとのことであつた。

亜樹子は翔太郎に「記憶喪失かな？」と聞くと、翔太郎は「ああ、そつたろうな。」と答えた。

翔太郎は「今日はやけに記憶喪失者に会う日だな。」と感じた。

「まあ取りあえず、一旦事務所に戻った方がいいな。失礼ですが自分の名前は覚えていますか？」

翔太郎が名前を尋ねると、女性はゆっくりと口を開き覚えていた自分の名前を言った。

「水城…涼子です。」

この時はまだ考えもしなかった…。

この出会いが事件の幕開けで…。

もう一人仮面ライダーと出会うことになるってことを…。

第2話 Xライダー抹殺計画！！ 現れたティラノザウルス！？（前書き）

久々の投稿のエレメントブレイドです。

実を言うとこの作品のコラボ協力者である亜盤さんが退会しちゃったんですよ…。

世界の破壊者と始まりの戦士にも書きましたが私1人でこの作品をつづけていこうと思います。

これからもどうかよろしくお願いします。

2話目はもう1人の主役Xライダー編です。

第2話 Xライダー抹殺計画！！ 現れたティラノザウルス！？

スーツ姿の男は人気のない裏路地にやってきた。

男はとても必要とは思えない招き猫を両手で大事に持っていた。

招き猫を人気のない地下駐車場に置くと、招き猫の目が光り中から声が聞こえてきた。

『GOD 神話怪人ケンタウロウスよ、お前のすべきことは分かっているな？』

男はその声に頷き両腕を顔の前でクロスさせた。

その瞬間男の姿は、馬と人間の特性を併せ持ち4本の長い脚が特徴のGOD 神話怪人・ケンタウロウスへと変わった。

ケンタウロウスは「ブルウウン！！」と馬のような鳴き声を上げた。

「わかっております。我らGODの憎むべきXライダーの抹殺であります。」

『そうだ…。』と招き猫から声が響き渡った。

この招き猫から発せられる声はGODを支配する GOD 総司令であった。

決して怪人達に姿を見せない総司令は、毎回何かの物に自分の声が流れる通信機を埋め込み怪人達に指令を出していた。

ケンタウロウスは既に今回の指令を連絡係の戦闘作業員から聞いており知っていた。

「そうだ。…しかしお前には、もう一つ調べてもらいたいことがある。GOD 研究所を知っているな。」

GOD研究所：それはGODの技術の粋を集めて出来た研究所であった。

Xライダーに倒された怪人や、任務の失敗で破壊されたGOD神話怪人の亡きながら集まる場所でもあった。

過去の組織にも似たようなものがあると言われていた。

勿論GOD神話怪人の1人であるケンタウロウスはその研究所の事を知っていた。

だが何故今その研究所の話が出てくるのか？

ケンタウロウスはGOD総司令に「研究所に何かあったのでしょうか？」と尋ねた。

すると「そうだ。」と返ってきた。

「先日GOD研究所で謎の電波をキャッチした。しかしその後謎の人物により研究所が破壊されたのだ。」

「なんですと!!！」

ケンタウロウスは驚いたように声を上げた。

GOD研究所が破壊されるなんて…、そんな事あってはいい筈はなかった。

GOD科学者の裏切りでは？

そう考えているGOD総司令が更に続けた。

「しかも再生途中であった何体かのGOD怪人が突如消えてしまったのだ。」

何体かの再生途中の怪人は、研究所が破壊された影響で眼を覚まし脱走したというのであった。

「これはGODの威厳に関わる問題だ、Xライダーの抹殺と並行し

「この調査も調べて貰いたい。」

GOD総司令の低い声が終わると通信は切れた。それと同時に招き猫は爆発してテープレコーダーが残ったが、それも直ぐに消滅していった。

これはGODの秘密を漏らさないためであった。ケンタウロウスは通信機が消滅するのを確認すると、スーツ姿の男へと戻った。

その場から立ち去ろうとすると柱の後ろに人影が見えた。ケンタウロウスは「誰だ。」と叫んだ。すると柱の陰から白いスーツを纏った若い男性が現れた。

「お前はアポロガイスト!!」

白いスーツ姿の男性はGOD秘密警察であり「GODの殺人マシン」と異名を持つアポロガイストであった。アポロガイストはケンタウロウスに近づいていった。

「秘密警察のお前が何のようだ?」

険悪な表情でケンタウロウスはアポロガイストに聞いた。

その言葉にアポロガイストは「そう青筋を立てるな。」と言ひ話し始めた。

「落ち着け、今回の事件は秘密警察も全面協力のつもりだ、そのことを知らせに来たのだ。」

「秘密警察だと…お前の力など借りるものか!! 俺一人で解決して見せる。」

強気なケンタウロウスの発言に「ほおう。」とアポロガイストは呟

いた。

「今までそう言って任務を失敗した怪人は何体もいたがな…。」

この発言にケンタウロウスは「何だと!!」と叫んだ。

襲いかかるうとしたケンタウロウスをアポロガイストはひらりとかわし、近くに止めてあった自身のバイクへと飛び乗った。

「それならこちらは勝手にやらせてもらおう。精々足手まといにならないようにするのだな。」

そう言い残すとバイクを走らせアポロガイストは去っていった。

残されたケンタウロウスは「おのれえ、アポロガイストお。」と地団駄を踏んだ。

モトクロス訓練所

2日前から降り続いていた雨も上がり、空は気持ちいいほどの青空であった。

しかし雨の影響で辺りは水溜りや泥水でバイクを走らせるには最悪な状況になっていた。

モトクロス練習状にやってきた初老の男 立花藤兵衛 はその状況を見て眉を顰めた。

「うーん、どうする敬介? こりや止めた方がいいかもしれないぞ。」

藤兵衛は隣でバイクに跨る青年 神敬介 に尋ねた。

敬介は巨大な悪の組織GODに陰謀によって父と共に殺された。同じく瀕死の父 神啓太郎 の改造手術により改造人間として蘇った男であった。

藤兵衛の言葉に敬介は「なに言ってるんですか。」返した。

「わざわざここまで来たんですよ、やっていきましょうよ。」

敬介は笑顔でそう答えた。

藤兵衛は心配そう「大丈夫か？」と聞いた。

「大丈夫ですって、それに先輩達はこれくらいの事平気だったでしょう?。」

その言葉に藤兵衛は「よし、じゃあやるか。」と笑顔で言い、ポケットからストップウォッチを取り出した。敬介はバイクのエンジンを吹かし始めた。

「ただ怪我だけはするなよ。怪我しちゃ元も子もないからな。」

「はい、はい…わかりましたよ。」

そう笑いながら答えると敬介はバイクを走らせた。

藤兵衛は徐々に見えなくなる敬介を見つめていた。

過去4人の戦士達を見てきた藤兵衛であったが、敬介は彼らと変わらない程…もしくはそれ以上に悲しい過去を背負っていた。

父親と恋人の相次ぐ死…それは敬介に耐えられるものではなく、敬介は一時期笑顔を亡くしてしまった。

藤兵衛は敬介の事を心配していたが、敬介は彼らのためにこそGODと戦う決意をした。

その決意を見て藤兵衛は敬介が立ち直れた事を知り、他の4人に近づいてきていると感じた。

藤兵衛は「フツ」と笑った。

「さっきのあいつの笑顔…、もう大丈夫だろうな。」

そう呟くと再びストップウォッチに目を向けた。

コース中盤に差し掛かった場所で敬介はバイクを走らせていた。藤兵衛の言う通り先日からの雨のせいでコースはグチャグチャであった。

ただこれくらいの事で転倒するような敬介ではなく順調に1週目を終えようとしていた。

すると遠くの岩陰から敬介を見つめる人影があった。

それは馬と人間の中間的な姿を持つケンタウロウスであった。

ケンタウロウスは周りにいる弓と矢を持つ6人の戦闘員に命令を下した。

「いいか、神敬介を何としても狙い撃つのだ。」

ケンタウロウスの言葉に戦闘員は「ジー!!!」と返事をした。

戦闘員が持つ矢の先端には爆薬が縫っており少しでも触れたら爆発するようになっていた。

「ジリジリ」と矢を弓にセットし標準を敬介へと合わせた。

「放てえ!!!」

ケンタウロウスの声と同時に一斉に矢を発射した。

敬介は飛んでくる矢に気付かない。

敬介の辺り一帯で巨大な爆発が起こり煙が巻き上がった。

「ブルウウン！！ やったあ、神敬介は死んだあ！！」

爆発が起こった場所を見てケンタウロウスは高らかに笑いそう宣言した。

周りの戦闘作業員も「やったぞ。」と声を上げた。

すると突如「待てえ！！」と声が聞こえてきた。

ケンタウロウスは声の方向を振り返った。

「お、お前は神…敬介…まさか！？」

そこには爆発に巻き込まれた筈の神敬介が立っていた。

敬介の腰には先程までなかった、中央に赤い風車が付いている銀色のバックルに黒の帯のベルトが巻かれていた。

敬介は「はははは。」と笑った。

「あれくらいの事でやられるものか。」

「行くぞお！！」と敬介は左腕を腹まで引いて、右腕を左斜めに突き出した。

そして両手をX型に交差させ、右手でベルトの左側に装着されている赤い瞳のような模様が付いたレッドアイザーを、左手で右側に装着されている四角状のパーフェクターを掴み、頭より高く上げて叫んだ。

「セタアアプ！！」

その瞬間敬介の体に銀色を基盤とした赤いラインが入った戦闘服が

現れ、首元にXと描かれた黒の黄色い線が入ったマフラーが巻かれていた。
そして右腕に持っていたレッドアイザーが仮面となり左・右と順に顔に装着された。
最後に左腕に残ったパーフェクターを口元に装着すると辺りに光が走った。

仮面には赤い瞳と額には2つのV型の触角が付いていた。

「ライドルホイイイプ!!」

腰に巻かれたベルトに格納された棒状のXライダー専用武器であるライドルを引き抜きいた。

乗馬用鞭形態のライドルホイップで目の前をX形に斬り叫んだ。

「エックスライダー!!」

全体的に機械的な印象を持たせる姿、これこそが敬介の改造人間カイゾウゲとしての姿であり、5人目の仮面ライダー 仮面ライダーX であつた。

Xライダーは矢を持つ戦闘作業員に飛び込んだ。

「はあっ!!」

ライドルホイップを使い戦闘作業員を次々と倒していった。
倒れた戦闘作業員は液状になって溶けていった。

次々に倒れる戦闘作業員を見て痺れを切らしたケンタウロウスはXライダーへと向かってきた。

「死ねえい、Xライダー!!」

「くっ!?!」

ケンタウロウスは馬の強靱な前足でXライダーを踏みつぶそうとした。

Xライダーはライドルホイップを盾にして踏みつぶされるのを防いだ。

ケンタウロウスの巨体の体を受け止めているため身動きの取れないXライダーであったが、ケンタウロウスにはまだ両腕が残っていた。ケンタウロウスは背中に供えられた矢を取り弓を引いた。

「くたばれエー!!」

Xライダーは自分に迫って来る矢を見て「しまった!?!」と叫んだ。間一髪ライドルホイップを離し矢を避けたXライダーであったが、矢には爆薬が塗られていたらしく辺り一面で爆発が起きた。

爆発により吹き飛ばされ地面に倒れたXライダーは瞬時に立ちあがり、右腕を高く上げた。

「クルウウウザアアア!!」

その雄叫びと共に白と赤の色をし、車両の前部に搭載した2つの風車が特徴的なバイクが走ってきた。

これぞXライダーの専用バイクであり「白い弾丸」と異名を持つクルーザーであった。

「とおう!!」

Xライダーはジャンプしてクルーザーに飛び乗った。

馬の脚力を持つケンタウロウスにはクルーザーに乗りながら戦った方が良いと判断しての事であった。

Xライダーはライドルホイップを右手に持ち、クルーザーを走らせ

た。

「行くぞ!! ケンタウロウス!!」

「来オい、Xライダー!!」

ケンタウロウスは腰にある剣を引き抜いてXライダーへと向かっていった。

Xライダーとケンタウロウスは激しくぶつかり合った。

Xライダーがケンタウロウスと死闘を繰り広げている頃、藤兵衛は心配そうにストップウォッチを見ていた。

行ったきり戻らない敬介の事を心配していたのであった。

幾らなんでも遅すぎる…、まさか何かあったんじゃないだろうか？

藤兵衛はジープに乗り込み敬介を探しに行くことにした。

すると1人の男が近づいてきた。

「おい、その車を俺によこせええ…。」

男は死にそうな声で藤兵衛に言った。

行き成りの事で驚いていた藤兵衛であったが、男の胸に「GOD」と書かれている事に気付いた。

「お前はGODの仲間か!？」

声を上げる藤兵衛だったが、男は嫌そうに睨んだ。

「いいから、この車をよこせ…。」

「断る、誰がGODに渡すか!!」

男はそれを聞き、「ちっ」と軽く舌打ちをしてポケットから細長い板のような物を取り出した。
それはこの世界に存在するはずのない ガイアメモリ であった。
男はそれを藤兵衛に見せた。

「俺はあの日から神になったんだ、神に逆らうなよ。」

T - L E X

ガイアメモリのガイアウイスパーが辺りに響き渡った。
男はそれを自分の肩へ差し込んだ。

その瞬間ガイアメモリは男の体内に入っていく、男の姿を徐々に変えていった。

変化が収まると男の姿は、太古に地球を支配していたと言われる生物テイラノザウルスの頭をした ティーレックス・ドーパント 変っていた。

「グオオオオオオオオオオオ!!」

口を開けて叫ぶと辺りに衝撃波が放たれた。

吹き飛ばされそうになった藤兵衛はジープを走らせ何とかそれを回避した。

「どうなってるんだ？ 今のあいつは人間だったはず…もしかして GODの奴らの仕業なのか？」

追って来るティーレックス・ドーパントから逃げながら藤兵衛はそう呟いた。

兎に角このままでは食い殺されてしまう…。

そう考えた藤兵衛はジープに備え付けられている通信機を手にとった。

Xライダーとケンタウロウスのライドルホイップと剣がぶつかり合い、激しく火花を散らしていた。

両者体中に傷を付けており戦いの激しさを表していた。

Xライダーはケンタウロウスから一定の距離をとった。すると通信機から藤兵衛の声が聞こえてきた。

『敬介：大変だ、人間が急に恐竜になったんだ！直ぐに来てくれ！』

「おやっさん、どういう事ですか？ おやっさん！！」

藤兵衛はかなり慌てた様子でそれだけ言うと通信が切れてしまった。藤兵衛がただ事ではないとわかったXライダーはケンタウロウスに背を向けた。

「ケンタウロウス、一旦この勝負はお預けだ。」

「何だとお、待てえXライダー！！」

ケンタウロウスはXライダーを逃がさないように近付くが、Xライダーはクルーザーで空を飛んだ。

200mのジャンプ力を誇るクルーザーは短時間だが空を飛ぶ事も出来たのであった。

Xライダーはケンタウロウスを掻い潜り見事藤兵衛のところへと向かう事が出来たのであった。

Xライダーの活躍する時代に、突如として現れたドーパント…。

しかしこれはまだ事件の始まりにしか過ぎなかったものであった…。

第2話 Xライダー抹殺計画！！ 現れたティラノザウルス！？（後書き）

オリジナル怪人の紹介。

怪人名：ケンタウロウス

容姿：神話上の生物ケンタウロスがモチーフとなった怪人。

顔は馬とも人間ともいえない中間的な顔。

腕には弓を、背中には何本の矢が、腰には剣が装備されている。

使命：Xライダーの抹殺、及び研究所の破壊者の調査。

取りあえずこんな感じです。

怪人の紹介はもしや増えていくかもしれません。

それでは次回もよろしくお願ひします。

エレメントブレイドでした。

第3話 ティラノザウルスだ！！ アノマロカリスだ！！ 古代生物大決戦！！

巨大な悪の組織GODに父と共に殺された神敬介は、瀕死の父の手によって仮面ライダーXとして蘇った。

その使命は世界の平和と正義を守るため、敢然と謎のGOD機関を相手に戦うのである。

突如として人間がこの世界に存在しない筈のガイアメモリを使い、
イーレックス・ドーパントに変身した。

藤兵衛はジープを走らせ追ってくるティーレックス・ドーパントか
ら逃げていた。

道は雨の影響でぬかるんでおり非常に走らせづらかった。

しかしティーレックス・ドーパントは雨道に足をとられず変らぬス
ピードで追って来ていた。

「敬介の奴…まだ来ないのか。」

不意にそう呟いてしまった。

普段の藤兵衛ならこんな言葉を絶対に言わないが今回はわけが違っ
た。

何故なら今追って来ている恐竜の怪物は人間が変身したからであっ
た。

GODの怪人も人間に化ける事はあったが、今回はそれと違うよう
に感じた。

怪人に変身する前に機械のような細い箱を使っていた。

それが怪人に変身させたと言っているのであるのか？

そんな事を考えていると目の前に巨大な池がある事に気付いた。

藤兵衛は急いでブレーキを踏んだ。

「キキィー」と音を鳴らして池の手前でジープは止まった。

池に落ちずには澄んだが行き止まりであり、藤兵衛はティーレック
ス・ドーパントに追い詰められてしまった。

「グオオオオオオオオ！！」

大きな口を開けてティーレックス・ドーパントが藤兵衛へと向かってきた。

万事休すか!?

そう思ったときバイクのエンジン音が近づいてきた。

「クルウウザアア大回転ンン!!」

バイクのエンジン音の正体はクルーザーであった。

クルーザーは空中で一回転する荒技。クルーザー大回転をすると、そのままティーレックス・ドーパントへと体当たりした。

ティーレックス・ドーパントは後方に吹き飛んだ。

クルーザーは藤兵衛の前に止まった。

「Xライダー、無事だったのか?」

クルーザーに乗っていたのは勿論仮面ライダーXであった。

藤兵衛がそう聞くとXライダーは「GODに襲われました。」と答えた。

それで敬介が戻ってこなかったのか…、と理解した。

Xライダーは目の前で立ち上がるうとしているティーレックス・ドーパントに目を向けた。

「またGODの神話怪人か…。」

「いや違う…、GODの関係者であるの間違いはないと思うが、あれは人間だ!!」

Xライダーの言葉に藤兵衛はそう答えた。

その言葉に「なに!？」と驚いたように言った。

人間とはどういう意味なのか?

その意味を考える前に再びティーレックス・ドーパントが襲いかか

ってきた。

Xライダーはライドルを引き抜き、ティーレックス・ドーパントを受け止めた。

その際にライドルは、両側に赤い握り部分があり通常よりも長いライドルスティックとなっていた。

恐らくこの形態の方がいいと思ったのであろう。

「おやっさん、兎に角逃げてください!!!」

敵の正体がわからない以上、藤兵衛を残すのは危険だと判断しての事であった。

藤兵衛は「わかった。」と答え、ジープを走らしその場を離れていた。

Xライダーはそれを見送るとティーレックス・ドーパントに得意技Xパンチを喰らわした。

急のパンチに怯んだティーレックス・ドーパントに関入れずチョップやパンチの打撃技の連打を喰らわした。

このままいけば倒せる…、そう確信した瞬間Xライダーの背中に何かが刺さった。

「うっ…。」と背中に走る激痛に攻撃の手を休めてしまった。ティーレックス・ドーパントはその隙に「グオオオオオオ!!!」

と咆哮を上げ、Xライダーを恐竜の腕で吹き飛ばした。

吹き飛ばされたXライダーは地面に叩きつけられた。

そして起き上がりながら背中に刺さった物を引き抜いた。

「これは…歯か？」

それは生物の歯であった。

海洋生物の事を研究して神敬介には、その歯の正体がサメや甲殻類であることが分かった。

まさか！？…と後ろを振り向くと、そこには黒い瞳に水色の体をした古代の生物であるアノマロカリスを模した怪人が立っていた。それはこの世界には無いガイアメモリを使い現れた アノマロカリス・ドーパント であった。

アノマロカリス・ドーパントは口をから再び自身の歯を発射した。

Xライダーは横に回転してそれを避けた。

「もう一体の怪人だと！？」

ティラノザウルスとアノマロカリス…どちらも全滅した太古の生物を模した怪人であった。

GODが主に使うのは先程のケンタウロウスのように神話怪人であり、太古の怪人を使った事は無かった。

ならば新たな組織なのか？

先程藤兵衛の言葉もどういう意味だったのか？

だが考えている間にもアノマロカリス・ドーパントは池に身を隠し、ティーレックス・ドーパントはXライダーに迫って来ていた。

考えるよりも先に体が動き、Xライダーは高くジャンプした。

「来い、クルウウザアア！！」

Xライダーが呼ぶと停止していたクルーザーは動き出しティーレックス・ドーパントの巨大な顎に体当たりした。

辺りに「ゴト」と鈍い音が響き渡り、顎が破壊された事がわかった。痛みを悶えているティーレックス・ドーパントを見送ると、Xライダーはアノマロカリス・ドーパントを追う為に池の中に飛び込んだ。

Xライダーは元々深海開発用の改造人間であり、その体は1万メー

トルの深海ですら耐えられるほどであった。
その為水中での戦いならばどの仮面ライダーにも負けない程の力を
発揮するのであった。

「見つけたぞ！！」

Xライダーは水中に身を隠していたアノマロカリス・ドーパントを
発見して声を上げた。

アノマロカリス・ドーパントは睡中まで追ってくるとは思わず驚い
たように動き始めた。

口から発射される歯の弾丸を避けながら、ライドルスティックを向
けた。

「ライドルロオープ！！」

棒状だったライドルスティックからロープ状のライドルロープへと
変わった。

ライドルロープはアノマロカリス・ドーパントの足に結びついた。

「エレクトリックパワー！！」

ライドルロープから激しい電流が走った。

しかも水の中であるこの場で使用したためその威力は倍以上に膨れ
上がった。

初めは苦しいそうに体を動かしていたアノマロカリス・ドーパント
であったが次第に黒く焦げて動かなくなっていくた。

「とおうー！！」

Xライダーはアノマロカリス・ドーパントを縛った状態で空叩く飛

び上がった。

下ではティーレックス・ドーパントがXライダーを待ち構えていた。Xライダーは「うおおお!!!」と雄叫びをあげ、全身の力を込めてアノマロカリス・ドーパントをティーレックス・ドーパントに向けて投げ飛ばした。

大きな音を立ててアノマロカリス・ドーパントはティーレックス・ドーパントに激突し、2体とも地面に倒れた。

「ライドルスティック!!!」

ライドルロープから再びライドルスティックに形状を変えた。Xライダーは両手でそれを掴み、鉄棒のように大車輪をした。

「とおう!!!」

何回転かしてライドルスティックを離し、体を大きく広げてXの体勢をした。

「エエエークス…キイイイック!!!」

必殺技 Xキック を空中から急降下して、2体を踏み潰すかのようにならわした。

叫び声に近い雄叫びをあげ、2体同時に爆発していった。

Xライダーはライドルをしまい、数歩後ろに華麗にジャンプした。爆発が収まるとXライダーは驚く物を見た。

「人間だと…。」

先程の場所にティーレックス・ドーパントとアノマロカリス・ドーパントはいなかった。

いたのは白衣姿の2人の研究員出会った。

その時初めて「彼らは人間だ。」という藤兵衛の言葉を理解した。
Xライダーは急いで彼らに駆け寄った。

「大丈夫ですか？ 起きてください。」

Xライダーの声に1人の研究員は「うう…ん。」声を出して眼を開いた。

そして驚いたように後ろへと下がった。

「あなたは…？ 私達はGODから解放されたんですか！？」

見ると男の白衣にはGODと書いてあった。

Xライダーは「落ち着いてください。」と言い男の顔を見た。

するとその男が行方不明であった科学者であった事に気が付いた。
もう1人の男も同じ行方不明の科学者であった。

「貴方方は、GODに攫われていたんですね？」

「ああ…そうだ、私達はGOD秘密研究所で無理やり働かされていたんだ。」

男は急いでもう倒れているもう1人の男へ駆け寄り「おい、しっかりしろ。」と起こした。

男はゆっくりと目を開き「ここは…。」と聞き、男は「大丈夫だよ。」と言った。

Xライダーは2人に「何があったんですか？」と尋ねた。
すると男は思い出したように「そうだ…。」と呟いた。

「私達はその日も無理やり研究させられていたんだ。そしたら急に研究所に変な怪物が現れて私たちを襲ったんだ…。」

「そつだ間違いない、そしたら怪物から電撃が走って俺達を襲ったんだ…。そしたら怪物が変な機械を幾つも落としていったんだ…それを拾った途端意識を失つて…そつだ、あれだよ!!!」

男は数十センチ前に落ちている壊れたガイアメモリを指さした。

Xライダーはそれを拾った。

あちこちにひびが入ったガイアメモリ、片方にはAのマークが、もう片方にはTのマークが入っていた。

「これが人間を怪人に変えたのか？」

Xライダーにはその事が信じられなかった。

しかしよくよく見てみるとガイアメモリが未知の機械で出来ている事に気付いた。

一体何が起ころうとしているのか？

取りあえず…、とXライダーは彼らに向き返った。

「貴方達は、警察へ言つて無事を伝えてください。」

研究員2人は「わかりました、ありがとうございます。」と口々に礼を言い、一般道へと走つていった。

そしてタクシーを捉まえてXライダーの言う通り交番へと向かつていった。

Xライダーはそれを見送ると変身を解いて神敬介に戻りガイアメモリをポケットへとしまった。

ふいに横を見ると巨大な風車が目に入った。

あんな物この街にあつたか？

…いいやなかった。

まるで突然と現れたようであつた。

「取りあえず…あの風車に行ってみよう、そうすれば何かが分かるかもしれない。」

敬介はバイクに跨って巨大な風車へと向かっていった。

その巨大な風車こそこの世界にあってはいけない 風都タワー であった。

だがその事に敬介はまだ気づいていなかったのもであった。

その頃立花藤兵衛はジープを走らせ街へと戻って来ていた。

だがそこは馴染みのある街の筈なのに、どうも初めてのよような気がした。

「ワシもボケてきたのかな…？」

藤兵衛は首をかしげてそう呟いた。

するといい匂いが鼻に漂ってきた。

匂いの方を向くとそこにはラーメン屋の屋台が開かれていた。

「丁度小腹もすいたしな…。」と藤兵衛はジープを止めて屋台をくぐった。

「へい、らっしやい!！」

屋台の店主は景気良く客である藤兵衛を迎えた。

藤兵衛は店主に「お勧めはあるかな？」と尋ねた。

すると店主は「はあくん。」と顎に手をやり藤兵衛を見た。

「お客さん、この街は初めてだね？」

「いや…そんなはずはない、ワシはこの街に店を構えてるはずだが

…。」

藤兵衛がそう言うと、店主は「冗談でしょ？」と笑いながら言った。

「だってこの街に住んでたら“風都”名物、風麵を知らない人はいないよ。」

「風都…？」

藤兵衛に「風都」という言葉に聞き覚えがなかった。

その言葉の意味を聞こうすると、それより早く店主が藤兵衛の前に巨大なナルトが入ったドンブリを差し出した。

「これが家の名物の風麵だよ、なんだか分からないけど風都の事を知りたいならそれを食べてみればいいよ。」

藤兵衛は進められるがままにそのラーメンを啜った。

その味は驚くほど美味しく、藤兵衛は風都の事を聞くのも忘れ、風麵を夢中に口の中へと入れた。

第3話 ティラノザウルスだ！！ アノマロカリスだ！！ 古代生物大決戦！！

皆さんメリークリスマス！！

どうもエレメントブレイドです。

クリスマスイブまでには投稿しようと思いついどうにか巻せしました。

Xライダーメインの話です。

ついでに私はXではなくXライダーと呼んでいます。

このこだわりが分かる人はいますかね？

ではまた今年中に会いましょう。

第4話 暴走するH／俺たちは仮面ライダーW

鳴海探偵事務所

今回の依頼人は水城涼子…。

ドーパントじゃない化物に襲われているところ俺達が救出した。

何と本日2人目の記憶喪失者だ…。

謎の化物の正体も気になるが、まずは彼女がどういった人物なのかを調べることが先決だ。

さあ…今日もハードボイルドに…。

「何浸ってんねん!!」

完全に自分の世界に入っていた翔太郎に、亜樹子は「何やっとんねん!!」と描かれたスリッパで叩いた。

叩かれた翔太郎は依頼人の前であるにもかかわらず「何するんだあ、亜樹子オ!!」と叫んだ。

やはり何処まで行っても翔太郎は半熟^{ハードボイルド}であった。

翔太郎達はアキレスを倒した後、鳴海探偵事務所へと戻ってきた。

事務所では謎の女性 水城涼子 を向かいのソファ^{ソファー}に座らせ、事情を聴いている最中であつた。

翔太郎は涼子が見ている事に気付き「ゴホン。」と咳払いをした。

「それで、貴女は何も覚えてないわけですね？」

「はい…、何にも覚えてません…。」

涼子はそう言いながら目線を外した。

目線を外した事に不信感を感じた翔太郎であったが「まあ、いいか。」と考え、隣にいる亜樹子に耳打ちした。

「じゃあ、俺はフィリップに今の事を伝えてくる…。」
「うん、わかったよ。」

翔太郎はソファから立ち上がり、地下ガレージへと向かおうとした。

すると亜樹子は涼子の紫色のドレスが泥で汚れている事に気付いた。

「何かすごい汚れてますね。」

「ええ…昨日雨の中を走ったので…。」

亜樹子がそう尋ねると涼子はそう答えた。

翔太郎はその会話を特に気にせず地下ガレージへと降りて行った。

地下ガレージ

高速移送装甲車リボルギヤリーが収納されている地下ガレージ。

翔太郎が階段を下りていくと翔太郎の相棒である少年 フィリップがホワイトボードの前で待っていた。

「やあ翔太郎、話しは大体聞いていたよ。」

「そうか、じゃあ早いところ検索頼むわ。」

フィリップは「わかったよ。」と答え、ゆっくりと瞳を閉じた。

その瞬間フィリップの意識は地球の全てが存在すると言われる地球ほしの本棚へと移った。

地球本棚へのアクセス…それがフィリップの持つ特殊能力であった。しかし何故フィリップがこのような能力を持っているのか？ それを知るのはまだまだ先の事であった。

真白な空間に無数の本棚並んでいる地球の本棚で、フィリップは目を開いた。

すると翔太郎の声が聞こえてきた。

「最初のキーワードは…GODだ。」

「キーワードはGOD…。」

フィリップがそう呟くと本棚は一気に数を減らした。

翔太郎は「次はマツハ・アキレスだ。」と次のキーワードを教えた。

「2番目のキーワードはマツハ・アキレス…。」

残った本の中から更に数が減っていき、残った本は数十冊になった。翔太郎は最後のキーワードは翔太郎に聞かずともわかった。

「最後は水城涼子…。」

本の数がさらに減っていき最後の一冊になる。

…筈であった。

しかし奇妙な事に本の数は急に増えていった。

始めてみるこの状況にフィリップは驚きを隠せなかった。

「これは…どうなっているんだ？」

そう呟いている間にも本の数は増えていき初めて同じような状況に

なってしまった。

フィリップは咄嗟に1冊の本をとって読んでみた。

「なんだい、これは…。」

その本はとても読めるような状態ではなかった。

文字はバラバラで単語として成り立っておらず、絵や写真に関してはただ色が書かれているだけといった感じになっていた。

咄嗟に別の本を開いてみたが、それも同じような状態になっていた。するとフィリップはこうしてる間にも本の数がどんどん増えてきている事に気付いた。

本は次第に本棚から崩れるように落ちていき、フィリップに降り注いだ。

「う…うわあああああああ！！！」

本に埋もれながらこのわけのわからない状況にフィリップは頭を叩え大声で叫んでしまった。

急に叫び出したフィリップに翔太郎は「おい、どうした！！！」と叫びながらフィリップを揺さぶった。

翔太郎の声で地球の本棚から意識が戻りフィリップはゆっくりと目を開けた。

「そうしたんだ？ フィリップ。」

心配した表情で翔太郎はフィリップに聞いた。

フィリップは荒くなっていた息遣いを直しながら答えた。

「本棚が…暴走している。」

翔太郎は「暴走？」と眉を顰めた。

「本がどれも解読不能になってい、しかも本の数が急に膨れ上がったんだ、こんな現象初めてだ。」

「おい、それってどういう意味だよ？」

そう聞くとフィリップは「もしかしたら…。」と言葉を続けた。

「これは仮定だけど、地球の本棚にある本はこの地球の物だけだ、もし別の地球の本棚と融合してたとしたら…。」

「2つの地球が融合だって？ そんなことあるかよ？」

2つの地球があるやら、それが急に融合していたらなど、そんなSFチックな話を簡単に信じる事が翔太郎には出来なかった。

翔太郎はフィリップに問いかけた。

「しかしそうとでも考えないと地球の本棚の暴走は納得できない…、それにドーパント以外の怪人の事も水城涼子の事も…。」

今の発言を聞き翔太郎は「水城涼子の事も…だと？」と呟いた。

ドーパント以外の怪人の事はわかるが水城涼子のことと関係あるとは思えなかった。

フィリップはそれに関して話し始めた。

「さつき水城涼子のスカートが汚れている事をアキちゃん聞いていたよね、その時水城涼子はなんて答えたか覚えてるか？ 水城涼子は昨日の雨で…と言ったんだ、でも若菜姫のラジオでも言っ

いたがここ2日間全国で洪水確率は0パーセントなんだ。」

昨日フィリップが聞いていたラジオで「雨が降らないお出かけ日和。」と言っていた。

「それじゃあ…。」と翔太郎は呟いた。

「もし別の地球で雨が降っていたとしたら？ それなら納得が出来る…兎に角水城涼子から目を離さないほうがいい。」

そう答えるとフィリップは再び地球の本棚へと入った。

その際に「少しでも読めるように調整してみるから、話しかけないでくれ。」と言った。

「フィリップの邪魔するのもまずいな…。」と考えた翔太郎は階段を上がり扉を開けようとした。

するとそれよりも先に扉が開き、「ゴン」と翔太郎の頭に扉がぶつかってしまった。

翔太郎は頭を押さえながら入ってきた人を見た。

入ってきたのは真赤なジャケットを着た男であり、風都を救うもう1人の仮面ライダー 照井竜であった。

「照井、なに勝手に入って来てんだよ。」

頭をぶつけられたからか、翔太郎は少し怒鳴り声でそう言った。

照井はとくに悪びれた様子もなく「所長には許可はとった。」と答ええた。

「それよりも左、フィリップを借りるぞ。」

「フィリップを借りるって…、一体何があったんだ？」

照井は風都署の超常犯罪捜査課課長でもあり、「フィリップを借り

る。」と言う時は大体がドーパント事件絡みであった。

翔太郎がそう聞くと照井は胸ポケットから一枚の写真を取り出した。

「名前は桑田悟…、ガイアメモリの売人だ。」

写真から見た感じ桑田悟という男は20代後半ということが分かった。

しかしその写真を持ってきたからどうしようと言うのか？

いくら地球の本棚でも桑田の居場所までは特定できない筈であった。

そう考えていると翔太郎はある事に気付き「まさか…。」と呟いた。

「お前たちと別れた後、桑田がメモリを販売する場所を掴み、販売しているところを目撃した、現行犯で捕えようとした瞬間あいつはメモリを使ったんだ。」

1時間前

人気のない裏路地でガイアメモリの売人 桑田悟 は黒いケースに入った大量のガイアメモリを客に渡そうとしていた。

男がガイアメモリを手に取ろうとした瞬間「そこまでだ。」と声が聞こえてきた。

「風都署の超常犯罪捜査課課長の照井竜だ、桑田悟…署まで一緒に来てくれるな。」

客の男は逃げようとしたが照井の後ろにいた警官にあえなく捕まってしまった。

照井は桑田の元へ進んで行った。

「来るな…来ないでくれ…。」

桑田は手を大きく振り、照井を近づけまいとした。

しかし構わず照井は桑田に近づいて行った。

「僕は掴まりたくはない、ヒーローは捕まっちゃ駄目なんだ…。」

そう涙目になりながら訴える桑田に、照井は「何を言っている?」
と言った。

すると興奮している桑田はケースから1本のガイアメモリを取り出した。

「これさえ使えば僕だって…。」

「止める!！」

照井の制止する声を聞かずに桑田はスイッチを押し、自分の体にガイアメモリを押しこんだ。

その瞬間辺りを光が包みこんだ。

光が収まるとガイアメモリの入っていた鞆と共に桑田は消えていた。その後辺りを懸命に探したが桑田は発見できなかった。

「…成程な、それでフィリップの力が借りたってわけか。」

照井の話を通り聞いた翔太郎はそう言った。

そして「でもな…。」と言いにくそうに付け足した。

「今フィリップの地球の本棚は使えない状態なんだよ。」
「何だと？」

翔太郎は先程の謎の怪人の事や地球の本棚が暴走している事を話した。

照井は奥の方で眼を閉じてずっと立った状態のフィリップに目を向けた。

確かにフィリップは先程からずっと黙っていた、普段なら「興味深い。」などと言いつつ参加してくる筈であった。

地球の本棚が暴走しているという話が嘘ではないと感じられた。

「邪魔をしたな、また出直す…。」

「おい、待てよ照井。」

そう言い残し照井は立ち去ろうとした。

翔太郎は照井を追いかけフィリップを残し地下ガレージを後にした。

翔太郎達が事務所に戻ってみるとそこには誰もいなかった。

「なあ照井、亜樹子が何処にいるか知らねえか？」

「俺に質問するな。」

「水城涼子から眼を話さないほうがいい。」と言われたのに、まさかないとは…。

もしや亜樹子に何かあったんじゃないか…？

頭を抱えてそう心配していると翔太郎は机に置いてある置き手紙に気付いた。

「翔太郎君へ

涼子さんが何か思い出すかもしれないので風都探索に行ってきたよ！

翔太郎君も何かわかったら調べておいてね。

鳴海探偵事務所の美人所長 鳴海亜樹子より」

「亜樹子おおお！！」

手紙を読み終わると本日3回目の怒りの声を上げた翔太郎であった。

風都

翔太郎はハードボイルダーを走らせ鳴海亜樹子と水城涼子を探していた。

事務所を出る際に照井に「水城涼子って言う女性が行方不明になってないか調べてくれないか。」と頼んだ。

嫌そうな顔をしていた照井であったが「地球の本棚の暴走ほしに関係あるかもしれないんだ。」と言うと渋々「わかった。」と言ってくれた。

ハードボイルダーで街を走っているとある違和感に気付いた。

いつも見慣れた街である筈なのに、どこか違うような気がしたのであった。

翔太郎が考え事をしながら運転していると突如黄色いジープが飛び出してきた。

御互いにブレーキを踏み、何とか衝突しないで済んだ。

ジープから出てきたのは初老の男が降りてきた。

「おい、大丈夫か？」

鐘楼の男は立花藤兵衛であった。

翔太郎は「はい、大丈夫です。」と答えた。

「すまん、ちょっと考えごとをしてたもんでな。」

「いや、こつちこそすみません、俺も考え事としてたもんで…。」

御互いに頭を下げた。

その時翔太郎にはハードボイルドとは程遠いが自分の師匠である

鳴海荘吉 と感じが似ていると感じた。

そんな事していると突如「きゃあああああ！！！」という
叫び声が聞こえてきた。

翔太郎と藤兵衛はその声を聞くと、ジープとハードボイルダーに
乗り込み声のした方へと向かった。

風都港

声のした近くの港に行くと、人間ではない半漁人のような怪物が暴
れていた。

手には三又の鉾を持っており、顔の半分金色であり人間とも魚とも
いえない顔をしていた。

腰のベルトには先程のマツハ・アキレスと同じで「GOD」と描かれ
ていた。

「あいつはGODの神話怪人ネプチューンだ！！！」

翔太郎が「またGODか？」と考えていると藤兵衛がそう叫んだ。藤兵衛はネプチューンと面識はないが敬介から最初に戦った相手だと聞いた事があった。

「おやっさん、あいつの事を知っているのか？」

無意識のうちに翔太郎は藤兵衛の事を「おやっさん。」と呼んでしまった。

初対面でもあるのに関わらず急に愛称である「おやっさん。」と呼ばれたことに驚いた藤兵衛であったが、それどころじゃないため「ああ。」と頷いた。

「あいつ世界征服を企むGODの怪人なんだ。…敬介が居てくれれば…。」

今この場に敬介が居ないため戦う奴が居ない…。

そう考えていると翔太郎はWドライバーを腰に装着して、ジョーカーメモリを取り出した。

そして数歩前に出た。

「おい、お前何をする気なんだ？」

「おやっさんは逃げてくれ。」

そう言うつと翔太郎はジョーカーメモリのスイッチを押した。

JOKER

辺りにガイアウィスパーが響き渡った。

この後サイクロンメモリが転送される筈であった。

しかし一向にサイクロンメモリが転送されてこなかった。

「本当に…なにしてるんだ？」

藤兵衛がそう聞くと、翔太郎は「いやちょっと待ってくれ。」と焦りながら答えた

「おいフィリップ、聞いているのか？ おいフィリップ…！」

JOKER

JOKER

JOKER

JOKER

JOKER

ガイアウイスパーを何度も鳴らして叫んだ。
するとやっとな返事が返ってきた。

『何だい翔太郎？ 邪魔しないでくれと言っただろう。』

「またGODだ！！ 街の人が襲われてる…頼む…！」

『しょうがないな…』

フィリップは「やれやれ…。」といった表情でサイクロンメモリのスイッチを押した。

するとようやくWドライバーの右側にサイクロンメモリが転送された。

翔太郎は「おやっさん、見てくれよ。」と言いジョーカーメモリを左側に装着した。

CYCLONE

JOKER

「『変身…！』」

叫ぶと同時にWドライバーを開いた。

CYCLONE / JOKER <

翔太郎の体を旋風が包みこむと、仮面ライダーW・サイクロンジョーカーへと変身した。

藤兵衛はそれを見て驚いたように「お前…仮面ライダーだったのか？」と言った。

今まで藤兵衛が見た仮面ライダーはXライダーを含めて5人であった。

しかしこんな仮面ライダー初めて見たのであった。

「ああ、俺達は仮面ライダーWだ!!」

高らかにそう答えるとWはネプチューンへと向かっていった。

今この世界でネプチューンの決戦が始まるうとしていた。

第4話 暴走するH/俺たちは仮面ライダーW（後書き）

今年終了前に投稿完了です。

最初は翔太郎と藤兵衛の出会いです。

敬介と翔太郎は…まだまだかな？

ついでにこの話のWはディケイドと出会って無い事になっています。

でもビギンズナイトはありました。

それではまた会いましょう。

第5話 Double Strangers (前書き)

皆さん明けましておめでとございます。

今回は3千字程度で短いですがよろしくお願いします。

第5話 Double Strangers

何で僕ばかりこんな目に遭うんだよ…。

僕は正義の味方なんだ…。

それなのになんでこんなに苦しい思いをしないとならないんだよ…。

助けてよ…、ヒーローの僕を助けてよ…。

風都

亜樹子は涼子の記憶の手がかりを探るため、黙って事務所を抜けて風都探索をしていた。

風都探索をして何十分と経つが一向に涼子の記憶は戻らなかった。

そこで亜樹子は翔太郎が信頼している情報屋のウォッチャマンの元へと訪れた。

ウォッチャマンに亜樹子は涼子の事を説明し「涼子さんを見た事ない？」と聞いた。

「ええ、知らないよお。こんな美女1度見たら忘れないしさ。あつ、1枚写真撮っていい？ ブログに載せるからさ。」

返事を聞くまでもなく、ウォッチャマンは携帯電話で涼子とツーシ

ヨットを撮った。

結果としてウオッチャマンは涼子の事は知らなかった。

流石の亜樹子も「謎の多い女性だな。」と感じていると、ウオッチャマンが思い出したように「そうそう。」と話し始めた。

「実はさ、翔ちゃんに後で話そうと思っただけどさ、昨日から風都に違和感があるって人が多いらしいよ。」

それを聞いて亜樹子は「違和感ってどんなの？」と聞いてみた。

「昨日までであった場所に物がなかったり、見慣れた風景が違うように見えたりするんだって。」

それを聞いて亜樹子は先程風都探索で違和感があった事を思い出した。

違和感の正体が何かはわからなかったが、今の話を聞いてそれを理解出来た。

「もしや涼子さんの記憶喪失と関係あるんじゃない？」と亜樹子は考えてしまった。

「うん、わかったよ。翔太郎君とフィリップ君に言うておくよ、じやあねえ。」

いつまでもここにいても障害と考えると、亜樹子は涼子の手を引っ張ってウオッチャマンの元を去っていった。

ウオッチャマンは「あー！ 情報料は！？」と言ったが、既に亜樹子は見えなくなっていた。

亜樹子と涼子はその後、他の情報提供者であるサンタちゃん、クインやエリザベスにもあったがこれといった情報が得られなかった。「お腹すいたし、何処かで休もうか？」などと亜樹子が言っていると、涼子は突如立ち止った。

涼子が見ていたのは綺麗な海が映っている風都海岸のポスターであった。

それを見た瞬間涼子の脳裏に様々な光景がフラッシュバックした。

「本日から君に任務与えたい、…の潜入調査だ。」

「涼子…俺と…てくれ…。」

「よく親父の助手なんて出来るよな？」

「…、あなたには何か遭ったときのために……さんを守ってほしいの。」

「G…を決死つて裏切るではないぞ。まあ、その……だでは無理な事か？」

「何故あんな事をしたのか教えてくれ。」

「私は……さんに嘘をついてしまった…。」

「今はまだ何も…、でも信じてください、いつかあんな事があったんだ…と笑いあえる日が来るはずです…。」

「涼子さん…！」

亜樹子の呼び声に涼子は我に返った。

今のは何だったのか？

自然と涼子の息遣いは荒くなっていた。

「どうしたんですか？」

亜樹子が尋ねても涼子は何も答えなかった。

涼子は全てを振り払うように走り出した。

「ちよつと、涼子さああん！！」と叫ぶが、涼子は立ち止まらず走り去ってしまった。

「何で逃げるの？ 私聞いてなあああああい！！」

亜樹子は空に向かって叫んだ。

先程の涼子の様子は明らかに可笑しかった。

もしや何か思い出したんではないか？

しかも涼子は先程怪人に襲われていた。

1人で行って何か起こりはしないか？

最悪な事態が起こったら翔太郎に何と言われるか？

父親に顔向けできるのか？

そんな事を考えて、亜樹子は既に見えなくなった涼子を追い掛け始めた。

「涼子さああん！！ 何処行つたのお！！」

涼子を探し始めて数分経ち、気が付いたら風都タワーの近くまで来ていた。

もしかして風都タワーにいるんじゃないか？

そう考えてういると1台のバイクが近づいてきた。バイクに乗った男は息を切らしている亜樹子を見て「どうしたんですか、そんなに息を切らして？」と尋ねた。

「あ、大丈夫です。ちょっと人を探してて、風都タワーに行こうと思っ……。」

「風都タワー？ ああ、あの風車の事ですね、俺もそこに行こうと思っってたんです。」

亜樹子がそう言うと、バイクの男 神敬介 はそう答えた。

敬介のさわやかな笑顔を見て、亜樹子は「かっこいい人だね。」と感じた。

話しているうちに敬介は風都タワーを初めて訪れたということがわかり、2人で風都タワーに行くことになった。

風都タワー

風都のシンボルである巨大な風車 風都タワー。本日は平日であるためお客は疎らであった。

亜樹子と敬介は展望台へと上ってきた。

そこはガラス張りになっており街全体を見下ろす事が出来た。

敬介それを見て「凄いなあ。」と呟いた。

忘れてはいけなが、敬介がここに来た理由は今までなかった筈の風車が急に現れたからであった。

しかも先程バイクで街を走っていたとき、普段住み慣れた街に違和感があった。

その違和感は翔太郎や藤兵衛、それに亜樹子が感じたのと同じであった。

ふと敬介が横を振り向くと、亜樹子が涼子を探していた。

しかし涼子を見つけることは出来ず、がっくりと肩を落としている
亜樹子を見て敬介が近づいていった。

「探してる人は見つからなかったのかい？」

そう聞くと亜樹子は「はい。」と答えた。

困っている人を見捨てられない性格の敬介は「俺も探すの手伝うよ。」
と言い、「それで…。」と続けた。

「その人はどういう人なんだ？」

「はい、女性の方で、名前は…。」

亜樹子がそこまで言うとうわああああああ！！と叫び声
が聞こえてきた。

声の方向を見ると、男がガラスを指さして驚いていた。

ガラスの外では緑色の体毛を纏い、鋭い爪をもつ鳥　バード・ドー
パント　が飛んでいた。

バード・ドーパントは鳥のような奇声を上げながらガラスを破り突
つ込んできた。

敬介は飛んでくるガラスから亜樹子を守った。

先程の恐竜や三葉虫のような怪人か？

そう考えていると亜樹子が驚いたように「あれ…ドーパントだよ！
！」と言った。

「亜樹子ちゃんはその怪人を知っているのかい？」

敬介がそう尋ねると、亜樹子は「はい。」と頷いた。

ドーパントについて答えようとすると、バード・ドーパントは翼を
羽ばたかせて暴風を起こした。

後ろで「パリーン」と何枚ものガラスが割れる音が聞こえてきた。

亜樹子は必死に近くの置物にしがみついた。
しかしあまりにも強い風にそれを離してしまった。

「きゃあああああああ！！」

「亜樹子ちゃん！！」

後ろのガラスは既に割れており、亜樹子は外へと放り出され真直ぐと地面へと落ちていった。

敬介は亜樹子を追って展望台から飛び降りた。

既に腰にはベルトが出現しており、装着されていたパーフェクターとレッドアイザーを手に取った。

「セタアアプ！！」

そう叫ぶと同時に敬介の体を銀色の戦闘服が包み、右手に持つレッドアイザーが仮面となり顔に装着された。

最後にパーフェクターを口元に装着し仮面ライダーXへと変身した。

Xライダーは必死に手を伸ばすが、亜樹子にはとどかなかつた。

「くっ。」と苦虫をつぶしたような声を上げ大きく叫んだ。

「クルウウウウザアアアアア！！」

バイクの爆音と共に専用バイク クルーザー が走ってきた。

クルーザーは風都タワーを器用に登りXライダーの元へとやってきた。
た。

Xライダーはクルーザーに乗り込み壁を伝って下りていった。

それにより見事亜樹子をキャッチする事が出来た。

亜樹子はお姫様抱っこされており、恐怖からずっと目を瞑っていた。

「大丈夫かい？」

いつになっても地面に叩きつけられない事に疑問を持っていたが、その声を聞き亜樹子は目を開いた。

太陽の光で影になっており亜樹子は「翔太郎君…？」と呟いた。

影となっていた姿で仮面ライダーWと勘違いしてしまったのであった。

「いや、おれは仮面ライダーX、Xライダーだ！！」

Xライダーは堂々と宣言した。

亜樹子はXライダーの声を聞き「その声って…：敬介さん！？」と驚いた。

「亜樹子ちゃんはここで待っていてくれ。」

Xライダーはクルーザーに跨りそう言うと、重力を無視するかのよう壁に登り、空を飛ぶバード・ドーパントへと向かっていった。

亜樹子はWでもアクセルでも、ましてやスカルでもない仮面ライダーを驚いたように見ていた。

「そんな4番目のライダーなんて…：私聞いてない。」

同じ頃、WもGOD神話怪人ネプチューンと戦い始めていた。

互いに未知の相手と戦う2人の仮面ライダー。

果たしてこの世界で何が起ころうとしているのか？

第5話 Double Strangers (後書き)

第5話終了です。

涼子さんの記憶のフラッシュバックは半分以上がオリジナルです。色々な設定から勝手に作ってしまいました。

なんとしてもWとXの対戦を合わせたかったので今回は短めです。

それではまたよろしくお願いします。

第6話 Kとの大決戦／港と塔での戦い

うわああああ…苦しいよお…。

体が痛いよおおお…。

なんでぼくがこんな目に…？

…そつだ、これも敵のせいなんだ…。

ヒーローの僕がこんな目に遭うわけ無いもん…。

風都港

翔太郎とフィリップはWに変身して、人々を襲うGOD神話怪人・ネプチューンに向かっていった。

その時翔太郎は再び違和感を覚えた。

風都港が風都港ではないように感じたのであった。

一体その理由は何なのか？

考えようとしたが、今は目の前にいるネプチューンをどうにするのが先である。

そう考えWはネプチューンに拳を振り上げた。

「おりゃああああ!!」

Wのパンチをまともに受けたネプチューンは「グワア!!」と声を上げて後ろに吹き飛んだ。

その隙に襲われていた人々は逃げていった。

人々が逃げてくれるのはWにとって都合のいい事であった。だが逃げる人々を見てまた違和感が襲った。

風都にあんな人はいたのか？

人口数が多い風都の住人を全員把握しているわけではない翔太郎であったが、どうも服装や顔つきに違和感があった。

そう考えていると『翔太郎。』とフィリップの声が聞こえてきた。

『気になっている事はわかる、けど今は目の前の敵に集中した方がいい…。』

フィリップにも翔太郎と同じ違和感があった。

先程から翔太郎が逃げ回る人々をずっと見ていた事から、同じ事を感じていると理解しそうだったのであった。

翔太郎は「ああ、わかってる。」と答え、ノロノロと立ち上がるネプチューンに目を向けた。

ネプチューンは立ち上がると三又の鉾を持ちWに向かってきた。

「グオオオオオオ!!」

ネプチューンは野獣の様に叫びながら鉾を振り回した。

Wはギリギリそれを回避した。

『もしかして、この怪人にはマツハアキレスとは違って、意思がな

いのか？』

ネプチューンはマツハ・アキレスとは違い意思がなかった。本能のままに戦うネプチューンを見てフィリップはその事に気が付いた。

だが本能のままに戦う相手ほど厄介であった。

ネプチューンは一向に攻撃の手を休めてくれなかった。

何とか避けるWであったが、振り下ろした鉾で地面を「バコン」と爆音と共に砕いた。

前に船舶を何隻も沈めた事があるネプチューンであり、その力は巨大であった。

砕けた地面を見て「なんちゅう、怪力だよ。」とWが呟いていると、その隙を狙ってネプチューンは口から泡を吐いた。

間一髪避けたWであったが、泡は右足へと当たってしまった。

泡が当たった右足は「ジュワアア」と音を立てながら煙が出ていた。

ネプチューンの吐いた泡は溶解液であった。

Wの体は未知の素材で作られているため、解けはしないが激しい痛みに襲われて立て膝になってしまった。

立て膝になったWに止めを刺そうとネプチューンは鉾を突き刺そうとした。

『翔太郎！ ヒートメタルにメモリチェンジだ！』

「ああ、わかってらあ。」

そう答えWドライバーからサイクロンメモリとジョーカーメモリを抜き、赤色の灼熱の記憶を宿した ヒートメモリ と銀色の闘士の記憶を宿した メタルメモリ を代わりに差し込んだ。

電子音が鳴り響くと右半身は赤色、左半身は銀色の、灼熱の闘士
ヒートメタル にメモリチェンジした。
ネプチューンがWの背中に鉾を振り降ろすと、「カキン」という音
が辺りに響き渡った。
それはWのメタルシャフトが鉾を防いだ音であった。

「『はあああああ!!』」
「グワア!?!」

立ち上がりながらメタルシャフトを力強く振るい、ネプチューンを
押し返した。
突然メモリチェンジしたWに藤兵衛は「色が変わった!?!」驚いてい
た。

「さあ、そろそろ決めるぜ。」

そう言うとメタルメモリをWドライバーから引き抜き、メタルシャ
フトのマキシマムスロットに差した。

METAL: MAXIMUM DRIVE

電子音が響くとメタルシャフトの両端に炎が纏った。
炎をまとったメタルシャフトを「ブンブン」と振り回し、一気にネ
プチューンへ向かって走っていった。

「『メタルブランディング!!』」

ネプチューンは「やられてたまるか!!」と言わんばかりに鉾でメ
タルシャフトを受け止めた。

2つの武器が押し合いとなった。

「『はあああああ…。』」

「グアア！！」

だが次第にネプチューンの銚に亀裂が入り、次の瞬間「バリーン」と粉々に銚が砕け散った。

「『てりやあああああああ！！』」

必殺技 メタルブランディング がネプチューンに見事炸裂し、ネプチューンは「ウオオオオ！！」と叫び声を上げて爆発した。

「終わったか。」とほっと一息つくWであったが、「ジャリジャリ」と鎖を引く音が聞こえてきた。

「アトラス小地球！！」

Wの背中に突如鉄球が炸裂した。

後ろを振り向くと、髑髏のような顔に銀色の肌、腕には巨大な鉄球を持っており、腰にはやはり「GOD」と描かれたベルトが装着されている怪人がいた。

「あいつは…鉄腕アトラス！！」

藤兵衛の言う通り、この怪人もGODの神話怪人の1人 鉄腕アトラス であった。

アトラスは巨大な鉄球を軽々と扱う怪力怪人であった。

Wは背中を抑えながらアトラスに目を向けた。

「気をつける！！ そいつは強敵だぞ！！」

その声を聞き、Wは「ああ、わかった。」と答えた。
藤兵衛は前に敬介にアトラスの弱点を聞いたはずであった、しかしそれが何処か思い出せなかった。
Wは考える藤兵衛を気にせずメタルシャフトを握り直しアトラスに向かっていった。

風都タワー

亜樹子はクルーザーに乗って展望台に登っていったXライダーを追って、非常用階段を上っていた。

エレベーターを使った方が早い、止まってしまふ可能性を考え非常用階段を使ったのであった。

何百段もあった階段を登りきった亜樹子は展望台の出入口を開けた。

「ライドルステイクー！」

「ギエエエエエエー！」

展望台ではXライダーとバード・ドーパントが激戦を繰り広げている。
その光景を見て亜樹子は驚きで「私聞いてない…。」と呟いてしまった。

Xライダーは闘いながら亜樹子を見つけた。

「亜樹子ちゃん、待っていてくれって言っただろう。」

Xライダーはそう叫んだ。

一般人がここに来るのは危険だと考えたのであった。

亜樹子に気を撮られている隙にバード・ドーパントはXライダーに火炎弾を放った。

ライドルスティックでそれを防いだXライダーであったが、バード・ドーパントは続けて翼から羽手裏剣を放った。

それをまともに喰らってしまいXライダーは外へと放り出されてしまった。

「敬介さん!!」

亜樹子はXライダーを眼で追いながらそう叫んだ。

先程の様子を見た限り死にはしないだろうが重傷をおうかもしれない、そう考えたのであった。

バード・ドーパントは止めを刺すべく飛行能力を使い外へと飛び出た。

「ギエエエエ!!」

外に出たバード・ドーパントは落ちていくXライダーを見る。

…筈であった。

しかし下を見てもXライダーはいなかった。

バード・ドーパントが見た物は落ちていくXライダーの専用バイク・クルーザーであった。

ならばあいつはどこにいる？

バード・ドーパントは首を振って辺りを探し始めた。

「俺はここだあ!!」

声は上から聞こえてきた。

上を見てみるとXライダーライドルスティックを大きく振り上げていた。

Xライダーは外に落下したとき、クルーザーを呼んだのであった。そしてバード・ドーパントが来るのを予想して、クルーザーを踏み台にして更に高く飛んだのであった。急の事でバード・ドーパントには避ける事が出来なかった。

「ライドル脳天割りいいいい!!」

バード・ドーパントの頭部に必殺技であるライドル脳天割りが炸裂し、「ギエエエ。」と呻き声を上げて爆発していった。その爆風を利用してXライダーは展望台へと戻った。

Xライダーの手にはBの文字が刻まれた壊れたガイアメモリが握られていた。

外の爆発後を見てみると雀が何も無かったかのように飛んでいた。バード・ドーパントの正体は雀であった。

亜樹子は戻ってきたXライダーを見て「よかった。」と胸を撫で下ろした。

すると「チーン」とエレベーター到着した音が聞こえてきた。

風都港

港ではWとアトラスが戦いを繰り広げていた。

「畜生、何て硬い体なんだ!!」

アトラスの体は硬く、メタルシャフトが全く通用しなかった。その上アトラスの怪力でWは苦戦を強いられていた。

「グオオオ!!」

「『うわあっ!?!』」

アトラスは鉄球を振り回して、力任せにWを吹き飛ばした。

「アトラス大地球!！」

アトラスは逆立ちをして地面を支えると大地が激しく揺れ始めた。これこそ怪力の持ち主であるアトラスの台地を揺るがす能力ちから。アトラス大地震 であった。

その激しい揺れにWは立つてられなくなってしまった。

「このままで負けちまう!?!」そう思っていると「バン」と銃声が響き渡った。

銃弾はアトラスの左肩に直撃しており、アトラスは力なく地面に崩れ、そのまま爆発してしまった。

「誰だ!?!」

Wはそう叫びながら銃弾が飛んできた場所に目を向けた。

「地球をも揺らす怪力怪人アトラス、だがその弱点は左肩…。どんな奴にも絶対の力など無いということか…。」

「お…お前はアポロガイスト!！」

Wの前に現れたのは、白いスーツを着込み、腕にマグナム銃を持つ青年 アポロガイスト であった。

藤兵衛は彼の姿を見て驚いたように声を上げた。

風都タワー

「おやおや、メモリを使わないでその力とは…これは面白いですね…。」

「い…井坂深紅郎…。」

エレベーターで登って来たのは白のタキシードを全身に纏った医師

井坂深紅郎 であった。

亜樹子は驚きの表情で井坂の名前を叫んだ。

第6話 Kとの大決戦／港と塔での戦い（後書き）

今回やっとボスの存在である2人を登場させる事が出来ました。

デイケイドのアポロガイスト見た瞬間、「誰だあ、こいつはあ！！」と叫んでしまいました。

あんな性格がねじ曲がったアポロガイストを私は認めません。

なのでこの小説に出てくるアポロガイストは初期のクールなイメージで書いています。

Wの世界は最初に描いた通りイエスタデイ・ドーパントを倒した後なので、その時点での強敵は井坂です。
彼には次回活躍の場を与える予定です。

それではまた次回。

第7話 決戦！！ 激戦！！ 出会った2人のライダー！？

体が熱いよお…。

苦しいいいいいよお…。

何でメモリが抜けないんだよ…。

何で…何で…何で…だよ…。

ヒーローの僕が間違ってるよおおお…。

早く悪い奴を倒して僕の苦しみを取ってもらわないと…。

風都タワー

バード・ドーパントを倒したXライダーの前に現れた男 井坂深紅
郎。

井坂はゆっくりと辺りを見回した。

「展望台^{トウ}でドーパントが暴れていると聞いたので来てみれば…、これはこれは面白い…。」

不気味に笑いながら井坂はそう言った。

Xライダーは井坂から只ならぬ雰囲気を感じて身構えた。

「何者だ!! お前は!?!」

Xライダーはそう聞くが、井坂はその質問には答えず続けた。

「一部始終を見ていましたが、メモリを使用しないでバードを上回る身体能力、それに一撃で倒すほどの破壊力…、貴方の能力少し診^みさせてもらいますよ。」

井坂はから白に縁取られたWのメモリ^{ダブリュー}を手に持ちスイッチを押した。

WEATHER

ガイアウイスパーが鳴り響くと井坂は自分の耳にメモリを差した。すると井坂の姿は白を基調した体に、天気を表す布袋・太古・龍の模様、頭の丁髷のお陰で全体的に侍のような姿に変わった。

この姿こそ、天候を操る白き悪魔 ウエザー・ドーパント であった。

「さあ、診せてください…貴方の能力を…。」

そう言うと同時にウエザー・ドーパントは手から雷撃を放った。

Xライダーは咄嗟にライドルを前に出して防いだ。

雷撃は展望台全体に飛び散り、近くにいた亜樹子の真上にも雷撃が飛び散り「うわああああ!?!」と叫び声を上げた。

このままでは亜樹子ちゃんが危ない…。
そう考えていたXライダーであったが、亜樹子に当たる前に雷撃が止まった。

「ほお…この雷撃が効かないとは…、ならばこれはどうですかね？」

雷撃が止まり安心していただけの間、Xライダー周りにのみ台風が起こった。

台風はとても勢力が強く、その上雷や突風まで吹き荒れていた。

これは例え仮面ライダーW、ましてやアクセルでさせも数分と耐えられない自信があった。

「そろそろ、お終いか…。」そう思っていた瞬間、ライドルロープがウエザー・ドーパントの腕に絡みついた。

そして台風の中から「とおうー！」と掛け声と共にXライダーが飛び出してきた。

「エックス…キックー！」

ウエザー・ドーパントを引っ張り自分に近づかせた。

そして普段の決め技のXキックより威力を抑えた、簡略版Xキックでウエザー・ドーパント頭を蹴った。

普段よりも威力がないXキックであった事が幸いし、ウエザー・ドーパントは瀕死の重傷を負うことは無く、後ろによるける程度で済んだ。

しかしウエザー・ドーパントはXキックを喰らった屈辱より、Xライダーが台風の中から脱出した事が信じられなかった。

ウエザー・ドーパントは体勢を立て直しながら「何故だ…？」と呟いた。

「何故あの中から脱出できた…？ しかも何故傷1つ無い？ あの

台風は普通の台風ではないのだぞ…。」

ウエザー・ドーパントの発生させた台風は通常よりも何十倍も強い物であり、人間ならあの中では10秒と関わらずに死んでしまうものであった。

幾ら仮面ライダーと言っても無傷というのは信じられなかった。いや、しかもXライダーのライドルロープは迷わず自分に向かってきた。

台風の中で何故自分が見ていたのか？

そう考えているとXライダーはライドルを構えながら答えた。

「俺は元々深海開発用に造られたカイゾーグ、Xライダーだ!!!」

例え深海1万メートルの重圧にも耐える事が出来る、あの程度の攻撃が効くか!!!」

Xライダーの体は深海の重圧にも耐えられるほど強靱であった。

その為ウエザー・ドーパントの台風の暗闇の中でも明るく見え、豪雨の重圧にも耐える事が出来た。

力強く宣言したXライダーであったが、ウエザー・ドーパントは「造られた。」という言葉聞いて不気味に笑い始めた。

「成程…、そういうわけでしたか。メモリ無しでの力の理由は…：そう言う事でしたか。」

ウエザー・ドーパントはXライダーの体の秘密を理解した。

亜樹子はよくわから無いようで「何？ どういうこと?」と言っていたが、それには誰も答えなかった。

「行くぞお!!! ライドルホイップ!!!」

Xライダーはライドルロープをライドルホイップに変えてウエザー・ドーパントに向かっていった。
向かって来るXライダーにウエザー・ドーパントは霰を放った。
霰は銃弾の早さで飛んでいくが、Xライダーは得意技 X斬りで次々と霰を破壊していった。

「とおう!! たあッ!!」
「くっ...」

キックやパンチ、更にライドルホイップを使った攻撃をXライダーはウエザー・ドーパントに次々と喰らわせていった。
反撃をしようともせず、更に避けようともしないウエザー・ドーパントは次々と攻撃を喰らっていった。

だが攻撃を喰らう痛み...それさえも彼にとっては興味深い事であった。

ドーパントではなく機械の体がどれほどの強さを出せるか？

この力で更にガイアメモリを使用したらどうなるか？

考えただけで興奮が止まらなかった。

「しかし...今回のところはこの程度にしておきましょうかね。私も多忙なものでね...」
「なに!？」

余りにも気楽なウエザー・ドーパントの言葉にXライダーは驚いてしまった。

今の言葉からわかったが、ウエザー・ドーパントにはまだまだ余裕があった。

先程までの攻撃もわざと受けていたといった感じであった。

ウエザー・ドーパントはXライダーから数歩下がり指を「パチン」と鳴らした。

その瞬間バード・ドーパントが起こした風とは比べ物にはならない程、強い突風×ライダーの周りに巻き起こった。

「それではさようなら、改造人間君…。」

「く…うわああああ…！」

ウェザー・ドーパントがそう言った瞬間一気に風が爆発し、×ライダーは展望台から吹き飛ばされてしまった。

亜樹子は「敬介さあああん…！」と叫ぶが、既に×ライダーは遠くに飛ばされてしまった。

その声を聞きウェザー・ドーパントは亜樹子を睨んだ。

「殺される…。」そう感じた亜樹子は恐怖で動けなくなってしまった。

「さて、戻るとしますか…。」

亜樹子の事を気にする様子もなくガイアメモリを抜き井坂へと戻った。

井坂は亜樹子の前を通り過ぎエレベーターに乗り降りて行ってしまった。

それほど井坂にとって亜樹子は捕るに足らない存在なのであった。

「た、助かった。」

安心からその場に「ペタン」と座り込みそう言った。だが安心してはいけなかった。

吹き飛ばされた×ライダーを探さないと…。

そう思っていると亜樹子の前に×ライダーの専用バイク クルーザー がやって来た。

ライトが「チカチカ」と光っており、まるで「乗れ…！」と言って

いるようであった。

「乗ればいいのかな…。」

亜樹子は恐る恐るクルーザーに乗ってみた。

するとクルーザーが爆音を鳴らして走り始め、展望台から飛び出した。

「きゃあああああああ！！ 私聞いてなああああああいいいい！！！」

展望台から地面へと落ちながら亜樹子はそう叫んだ。

クルーザーは「ドーン」と凄い音を鳴らして地面に着地すると、Xライダーを追って猛スピードで走り始めた。

ついでに亜樹子はほぼ屍状態であった。

風都港

W・ヒートメタルの前に現れた白いタキシードを身に纏った青年アポロガイスト。

アポロガイストはWを見て「仮面ライダー…か。」と呟いた。

「俺が報告を受けていたライダーは5人…、だがその5人のどれにもお前は該当していない…。」

「5人の仮面ライダー？ 5人も仮面ライダーが居たのか？」

Wの知っている仮面ライダーは自分達の他に照井と壮吉の2人しかいなかった。

5人とはどういうことなのか？

その意味を尋ねたがアポロガイストは答えようとはしなかった。

「だが俺はそのうちの4人はどうでもいい、相手は唯一人：メライダーのみだ。しかし、ネプチューンを倒したその実力：為させて貰うぞ！」

アポロガイストは両手を肩の上まで上げて顔の前で交差させた。

「アポロオオオ…チツエンジン！」

その叫び声と共にアポロガイストの体に変化していった。

黒い服に、肩に纏った純白のマント、顔には翼のような飾りが付いた赤い仮面が装着されていた。

その仮面は表情を表さない無機質な仮面で恐怖が感じられた。

腰にはベルトが巻かれていたが、それには今までの「GOD」とは描かれておらず太陽のようなマークが描かれていた。

右手には黒い二連装銃 アポロショット を、左手には太陽のような刃が付いた盾 ガイストカッター を握られていた。

これこそアポロガイストの真の姿、GODの殺人マシーン アポロガイスト であった。

「な…メモリ無しで変身しただって？」

フィリップはガイアメモリ無しで変身したアポロガイストを見て驚いた。

ガイアメモリ無しで変身するなんてありえない！！

そう考えたのであった。

しかしアポロガイストは特に気にする様子もなくアポロショットをWに向けた。

「喰らえ!!」

「おっと…危ねえ…。」

Wは横に転がって銃弾を回避した。

アポロガイストは続けて何発もWに銃弾を放った。

銃を使う遠距離の相手に、近距離での戦いを得意とするヒートメタルでは相性が悪かった。

「よっしゃ…だったらルナトリガーだ。」

Wドライバーからヒートとメタルのガイアメモリを引き抜き、黄色の幻想の記憶を宿したルナメモリと青の狙撃の記憶を宿したトリガーメモリを差した。

LUNA/TRIGGER<

電信音が鳴り響くと右半身は黄色、左半身は青色の、幻想の狙撃手

ルナトリガーへとメモリチェンジした。

それと同時にWの左腕には専用銃トリガーマグナムが握られていた。

藤兵衛はまた色が変わったWを見て「また色が変わった…、あれじゃあ半分こライダーだな。」と呟いた。

「おらあ、喰らいな!!」

トリガーマグナムから無数の黄色い光弾がアポロガイストに向かって放たれた。

アポロガイストは軽々と光弾を避けた。

しかし光弾は突如軌道を変えてアポロガイストの背中へと命中した。アポロガイストは突然の事で膝をついてしまった。

「よっしゃあ、当たったぜ。」とWはトリガーマグナムを構えながら言った。

「成程…追尾機能か…。」

これがW・ルナトリガーの特殊能力である追尾機能であった。

「だが…。」とアポロガイストは立ち上がりながら続けた。

「我がGODの技術を使えば追尾機能ぐらい簡単に造ることなど出来る。…しかし何故俺が追尾弾が使わないと思う？」

「ああ？ 何言ってるんだ。なんだかわかんねえけどこいつで決めるぜ。」

アポロガイストの言葉を聞かずにWはトリガーマグナムのマキシマムスロットに、Wドライバーから抜いたトリガーマモリを差しこんだ。

>TRIGGER…MAXIMUMDRIVE<

トリガーマグナムにエネルギーが溜まっていき、標準をアポロガイストに定めた。

だがアポロガイストは避けようとはせずその場に立ち止まった。

「…トリガーフルバースト！！」

トリガーマグナムから幾つもの青色と黄色の光弾がアポロガイストに放たれる、必殺技 トリガーフルバースト を繰り出した。

アポロガイストはアポロショットを光弾に向けた。

「追尾機能に任せていると己の射撃に隙が生じてしまう。やはり…」

信じられるのは鍛錬の末に身に付いた己を腕のみなのだ!!」

辺りに「バン、バン、バン」と何発もの銃声が響き渡った。辺りに煙が巻き上がり、煙が晴れたときWは信じられない物を目にした。

「そんな…まさか…。」

アポロガイストは全くの無傷であった。

手に持つアポロショットからは煙が出ており、何が起こったのかを表していた。

「まさか…光弾を全て撃ち落としたと言うのか…。」

アポロガイストは先程の光弾を自身のアポロショットで全て撃ち落としたのであった。

何十発もあり、しかも追尾機能まであるトリガーフルバーストを撃ち落とした事がWには信じられなかった。

驚いて動けなくなっているWをアポロガイストは見逃さなかった。

「アポロ…ガイストカタアアアアア!!」

左手に持つガイストカタターをブーメランの様にWに投げた。

ガイストカタターは見事Wに直撃して後ろに吹き飛ばされた。

「アポロショット!!」

更に続けてアポロショットから銃弾を放った。

それは追尾機能が無いにもかかわらず全てWに直撃し、Wは地面に倒れてしまった。

「何だ…こいつの強さは…。」

銃撃戦を得意とするアポロガイスト、そのアポロガイストに銃戦で挑んだ事がWの間違いであった。

Wは必死に立ち上がるうとするが体が入らなかつた。

アポロガイストはアポロショットを向けながら近づいて行った。

「やはり私の相手は唯一人か…。さらばだ仮面ライダーよ。」

「ガチャ」とアポロショットを構えた。

「このままではやられる…。」とWが考えていると、2人の目の前に「ドーン」と空から何かが落ちてきた。

何が落ちてきたのか？

Wはそれを確認すると驚いたように呟いた。

「まさか…。」

『もう1人の仮面ライダー…だって…。』

空から落ちてきたのはウェザー・ドーナントに吹き飛ばされたXライダーであった。

XライダーもWを見て驚いたように呟いた。

「先輩達とは違う…仮面ライダー…。」

今この瞬間出会わない筈の2人の仮面ライダーが出会ってしまった。

それと同時に世界は崩壊へ向かおうとしていたという事を…。

まだ誰も知るよしが無かった…。

第7話 決戦！！ 激戦！！ 出会った2人のライダー！？（後書き）

やっとWとXライダーを会わせる事が出来ました…。

幹部怪人2人には最強になってもらいました。

アポロガイストはやはりあれくらい強くないといけないと私は思います。

それではまた次回、エレメントブレイドでした。

第8話 Pの遊戯/仮面ライダー対仮面ライダー

昔テレビで見たんだよね…。

9人の正義のヒーローが悪い奴を倒す話し…。

僕もいつか正義のヒーローになるって決めたんだ…。

だからこそ悪い奴の研究所だつて襲つたんだ…。

でも、でも…なんだか凄く苦しいよおおお…。

風都港

アポロガイストと戦うWの前に現れたもう1人の仮面ライダー X
ライダー。
WとXライダーは驚いたように互いを見ていた。

「おい、どういふことだよフィリップ!? あれもGODと関係があるのかよ?」

『わからない…。ただベルトがダブルドライバーでもロストドライバーでも無い…。あれは僕たちとは全く別の仮面ライダーだ。』

目の前の仮面ライダーのベルトはW達を知る物とは全く違かった。その事からXライダーがWとは根本的に違う仮面ライダーと事がわかった。

もしや新手な敵かもしれない…。

そう考えWは咄嗟に身構えた。

「何なんだ…？ 今の喋り方はまるで2人で話しているようだった…。 一体どういうことなんだ？」

Xライダーは立ち上がりながらそう呟いた。

目の前にいる仮面ライダーは1人の筈であった。

しかしそこから聞こえてくる声は2つであり、目の前に2人仮面ライダーが居るかのよう思えてしまった。

念のためXライダーも身構えた。

WとXライダーは互いに睨み合った。

「おおい！！ Xライダー！！ それに半分こライダー！！ 何してるんだ、目の前にはアポロガイストが居るんだぞ！！」

離れた場所から見ていた藤兵衛が2人の仮面ライダーの様子を見て大声で叫んだ。

藤兵衛はWと出会って数分しか経っていないが、Wの事を信頼する事が出来た。

そして当然Xライダーが敵ではないと知っている藤兵衛は彼らが戦う必要はないと考えていたのであった。

WとXライダーは藤兵衛の声を聞いて同時に叫んだ。

「わかった、おやっさん！！」

「わかったぜ、おやっさん！！」

互いに藤兵衛の事を「おやさっん。」と呼んだ事に、2人の仮面ライダー顔を見合わせて「フツ」と笑った。

そして前にいるアポロガイストへと向き返った。

アポロガイストは2人を見て指を「パチン」と鳴らした。

その瞬間周りから「ジー!!!」と掛け声と共に何十体ものGOD戦闘工員がWとXライダーを囲むように現れた。

「Xライダー、それにもう1人の仮面ライダー、今日のところは勝負はお預けだ…。悪いがそいつらの相手をしといてくれ。」

アポロガイストはそう言うのと青年の姿へと戻り、近くに停めてあったバイクに跨った。

「Xライダー、次に会う時がキサマの最後の時だ。」

そう言い残すバイクを走らせ何処へと去っていった。

Xライダーは「待て!!!」と叫び追い掛けようとするが、GOD戦闘工員が立ちはだかりそれを防いだ。

先にこいつらを倒さなければ…。

そう考え、Xライダーはベルトからライドルを引き抜いた。

「ライドルスティック!!!」

ライドルスティックを器用に駆使して戦闘工員を蹴散らしていった。

WもトリガーマグナムでGOD戦闘工員を次々と倒していった。戦闘工員を倒していくうちに2人は自然と背中合わせになった。

「俺は仮面ライダーX、Xライダー。」

XライダーはWの事を見ないで自分の名前を告げた。

Wその名前に一瞬驚いたが、直ぐに自分達の名を返した。

「俺／僕 達は…仮面ライダーWだ。」

XとW…両者アルファベットの名前を持つ仮面ライダー。もしやこの出会いは偶然ではなく、運命かもしれない…。奇妙な運命を感じながらWとXライダーは再び戦闘工員へと向かっていった。

「よっしゃ、フィリップ決め…うぐ!？」

そう言い掛けた途端に翔太郎は奇妙な呻き声を上げた。するとWはトリガーマグナムを戦闘工員ではなくXライダーへと向けた。

『おい、どうしたんだい？ 翔太郎?』

フィリップの問いに翔太郎は何も答えず、トリガーマグナムの引き金を引いた。

トリガーマグナムから発せられた光弾はXライダーへと向かっていった。

「なに!？」

突然のWの攻撃に気付いたXライダーはジャンプして光弾を避けた。光弾は近くにいた戦闘工員へと当たった。

「どういうことだ？ W!!」

行き成りのWの攻撃にXライダーはそう聞いた。だが翔太郎は何も答えようとはしなかった。

「Xライダー、今僕は自由に体を動かす事が出来ない、僕の意識も時期消えてしまいそうだ。」

フィリップはXライダーに向かって話し始めた。

翔太郎同様フィリップの意識も薄れかけていたのであった。

「これは…恐らく…パペティ…ドーパントの仕業だ…奴は近くに…
る筈…、このままだと…僕達は君を襲ってしまう…その時は僕たち
を倒す気で来る…ん…だ…。」

言い終わると同時にWの赤く発光していた瞳が、光を失い黒くなっ
た。
^{ドーパント}
怪人に操られていると理解したXライダーはライドルスティックを
構え、Wを迎え撃つ体制になった。

「『……』」

HEAT/METAL

Wドライバーとルナメモリとトリガーメモリを引き抜き、代わりに
ヒートメモリとメタルメモリを差し込み、ヒートメタルへとメモリ
チェンジした。

メタルシャフトを左手に掴み、Wへと向かって行った。

その際に邪魔をする戦闘作業員は全て蹴散らしていった。

「『……！』」
「くっ…！？」

Wはメタルシャフトを振り降ろしたが、Xライダーはライドルステ
ィックで防いだ。

予想以上に力の強い攻撃に、Xライダーは抑えるのがやっとであった。

Wは握っていた両手の右手を放し、赤き右拳に炎を纏った。

「『……!!』」

「うおっ!?!」

炎を纏った右拳でXライダーを殴った。

Xライダーは後ろに吹き飛ばされてしまった。

Wはそれを確認するとヒートメモリを引き抜いて、ルナメモリを取り出した。

LUNA/METAL

右半身が赤から黄色へと変わったり、ルナメタルにハーフチェンジした。

メタルシャフトは鞭のようしなやかになり、Xライダーへと伸びていった。

「くっ…ライドルロオオプ!!」

ライドルステイクをライドルロープへと変えて、向かってくるメタルシャフト目掛けて振った。

メタルシャフトとライドルロープは「バチーン」と音を起てて空中でぶつかり合った。

Wはメタルシャフトを戻してもう一度喰らわそうとした。

Xライダーはその隙にWへと向かって走っていった。

「ライドルロングポール!!」

ライドルロープから10メートルまで伸びる事が出来る棒状のライドルロングポールへと変えた。
距離を詰めずに攻撃するのにはこれが一番最適だと考えての事であった。

「ライドル3点突き!!」

頭・左半身・右半身へと連続して繰り出す必殺技　ライドル3点突き　を繰り出した。

それを喰らってWは後ろによろけた。

体勢を立て直したWは、ルナメモリとメタルメモリを抜き別のメモリをWドライバーに差した。

HEAT/TRIGGER

Wはルナメタルから、灼熱の狙撃手ヒートトリガーへとメモリチェンジした。

「行くぞお!!」

「『……』」

XライダーとWは互いに向かっていった。

離れた場所で見っていた藤兵衛は「どうということなんだ…?」と呟いた。

仮面ライダー同士が戦ってはいけない…。

今まで1番近くで仮面ライダーを見ていた藤兵衛はそう考えていた。

「どうにかしないといけないなあ…、でもどうすれば…。」

そう呟いていると、「ブルウウン」とバイクの爆音が聞こえてきた。藤兵衛はそのエンジン音に聞き覚えがあった。

「この音は…Xライダーのクルーザーだ!!」

エンジン音がする方を向き返った。

走って来ていたのは白いバイク　クルーザー　であった。

だがクルーザーに少女が乗っているのが見えて「誰だ?」と藤兵衛は眉を顰めた。

「誰かあああ止めてえええ!!!」

バイクに乗った少女…ではなく女性　鳴海亜樹子　は絶叫していた。展望台から飛び降りた後もクルーザーは猛スピードで走っていた。何度も風圧で吹き飛ばされそうになった亜樹子は今の様にずっと叫んでいたのであった。

クルーザーは藤兵衛の近くに来ると自然と停止した。

亜樹子は「助かったあ…。」と安堵の息を吐いた。

藤兵衛は亜樹子に駆け寄った。

「おい、大丈夫か?」

「え…あ、うん、うん、大丈夫、大丈夫。」

まだ少し混乱しているようで呟くように答えた。

藤兵衛は亜樹子が何故クルーザーに乗っているのか聞き始めた。

「おい、何でクルーザーに乗っているんだ?　それはXライダーのバイクだろ。」

「あ、そう、実を言うと風都タワーでビューンってドーパントが出

てきて敬介さんがXライダーでそれを倒したんだけど、そしてら井坂が出てきてバーンってドーンってやってたらビューンってXライダーが吹き飛ばされて…、そしたら今度はバイクが私の前に来て…。」

「ああ、わかった、わかったから…要はXライダーに助けられたってわけだろう。」

亜樹子の説明を聞いてもよくわからず、兎に角Xライダーに助けられてここまで来たということは理解した。

敬介の名前を口にした亜樹子は「あつ、そうだ。」と思い出したように話し始めた。

「そう言えば敬介さんはどうなったの？ このバイクが敬介さんの元に連れてってくれるって思ったんだけど？」

周りに敬介が居ない事から亜樹子は藤兵衛にそう聞いた。

もしこの場に敬介が居なければ、先程の怖い思いは全て無駄になってしまう…。

亜樹子にとってそれだけは嫌であった。

藤兵衛は言いにくそうに口を開いた。

「敬す…いやXライダーなら戦っているよ、…いきなり半分こライダーが襲ってきてな…。」

「え…半分こ仮面ライダーって…？」

藤兵衛はゆっくりと指を差した。

その方向を見てみると、少し離れた場所でXXライダーとWが戦っていた。

亜樹子はその光景を見て「そんな…。」と呟いた。

「私聞いてない…、翔太郎君とフィリップ君が敬介さんを襲うなんて…。」

驚いたように言う亜樹子であったが、藤兵衛は半分こライダーの変身者であると思われる名前を聞いて眉を顰めた。そして亜樹子に自己紹介をして話し始めた。

「ワシは立花藤兵衛だ。それで嬢さんはあの半分こライダーを知ってるのか？」

「うん。私は鳴海亜樹子で、鳴海探偵事務所の所長だよ。」

「所長つて…中学生なのに所長をやっているのか？」

「だれが、美人中学生やねん！！ 私は20や！！」

亜樹子は「これでも20歳はたむちや！！」書かれたスリッパで藤兵衛を叩いた。

とても20歳には見えない亜樹子に藤兵衛は「20歳…。」と驚いた。

「それよりも、あのライダーは何なんだ？」

「あれは2人で1人の仮面ライダー、仮面ライダーWだよ。でも何で、翔太郎く~~~~ん！！ フィリップく~~~~ん！！」

亜樹子の呼び声にWは何も答えず、Xライダーに攻撃し続けた。

それはまるで誰かに操られているかのようであった。

急に襲ってきた事…それに操られるように戦う事…。

この2つの事に亜樹子は覚えがあった。

つい昨日も翔太郎がイエスタデイ・ドーパントに昨日と同じ行動をさせられた事があった。

だが今回のそれとは違う…、だが前に見た事があった。

そう今のWの様に人形のように戦う…。

「あああああああ！！ 思い出したあああああ！！」

亜樹子は大声で叫んだ。

隣にいた藤兵衛は思わず耳を塞いでしまった。

「なにを思い出したんだ？」と藤兵衛が聞くと、亜樹子は首にぶら下げていたポーチからある物を取り出した。

それは事務所から勝手に持ち出した橙色の蝸牛型のゴーグル デンデンセンサー であった。

亜樹子はゴーグルにして甲羅の部分から覗いてみた。

「あ、おじさん、おじさん、これ見て！！」

「おじさんって…、ワシはまだまだ若いぞ。」

などと言いながら藤兵衛はデンデンセンサーを覗いてみた。

するとWの体の至る個所に糸が付いているのが見えた。

その糸を辿っていくと電信柱の陰に、大道芸人の様な格好をしたドーパント パペティアー・ドーパント がいた。

Wが急にXライダーを操った原因はパペティアー・ドーパントが操っていたからであった。

藤兵衛はデンデンセンサーを亜樹子に返した。

「あれが仮面ライダーWを操っていたのか…。」

「そうだよ、早く何とかしないと…。」

早く何とかしなければWがXライダーを、もしくはXライダーがWを倒してしまいそうだった。

どうすればいいんだ？

そう考えていた藤兵衛の眼に映ったのはWの専用バイク ハードボイルダー であった。

考えるよりも早く藤兵衛はハードボイルダーに跨った。

「おじさん、急になにするの？」

「決まってるだろ、ライダーを助けるんだ！！」

行き成りハードボイルダーに跨った藤兵衛に亜樹子が戸惑いながら聞くと、藤兵衛はアクセルを回した。

すると力強いエンジン音が聞こえてきた。

藤兵衛は「中々いいバイクじゃないか」。と褒めた後、ハードボイルダーを走らせた。

ハードボイルダーは真直ぐにパペティアー・ドーパントに向かっていった。

「うおおおおお！！」

「……ッ!？」

藤兵衛はパペティアー・ドーパントに思いつきり轢いた。

戦闘能力が高くは無いパペティアー・ドーパントはハードボイルダーに轢かれて、豪快に吹き飛んだ。

その際Wを支配していた糸が切れた。

それと同時にWの瞳が再び赤く発光した。

「…あ、俺は何をしていたんだ？ ……って何でヒートトリガーになってるんだ？」

『やはり…パペティアー・ドーパントだったか。迷惑掛けたねXライダー。』

翔太郎は理由がわからないように、フィリップは安心したように言った。

Xライダーは安心したようにWに近寄った。

「いや、大丈夫だ。元に戻ってよかった…後はあいつだけのようだ。」

Xライダーが睨んだ先を見ると、そこには倒れたパペティアー・ド
ーパントがいた。

翔太郎はそれを見て操られていたということを理解した。

「悪いなXライダー、止めは俺達が刺させてもらっぜ。」
『よくも僕達を操ってくれたね。』

HEAT∴MAXIMUMDRIVE

トリガーマグナムのマキシマムスロットにヒートメモリを差しこん
だ。

電信音が響き渡ると同時にトリガーマグナムを炎が包みこんだ。
パペティアー・ドーパントは急いで立ち上がって逃げようとした。
だがWは逃がしはしなかった。

「トリガアアアア…エクスポオオオジョン!!!」

トリガーマグナムから火炎放射が放たれた。

それは真直ぐにパペティアー・ドーパントに着激し、灼熱の業火を
浴びてパペティアー・ドーパントは苦しそうに呻き爆発した。

爆発が収まると壊れたPのガイアメモリと、既に命が無い戦闘工作
員が倒れていた。

『成程…メモリが暴走していたのか…。道理で僕達を完全に操って
いたというわけか。』

フィリップがそう言うのとWドライバーを閉じた。
すると風が起こり変身が解け、翔太郎へと戻った。
敬介もそれと同時に変身を解いた。

「2人で合体して変身していたと思っていたけど…1人だったのか。」

「いや…1人じゃねえよ、もう1人は事務所にいるよ。」

敬介が不思議そうにそう聞くと翔太郎はそう答えた。

すると「おーい!!」と言う声が聞こえてきた。

それは藤兵衛と亜樹子であった。

藤兵衛は先程ハードボイルダーを乗り回して無茶な行動をした為体中に傷が付いていた。

敬介と翔太郎は彼らを見て「フツ。」と笑った。

「俺は神敬介…、君は？」

「俺は左翔太郎だ…。」

2人は自己紹介し合うと藤兵衛と亜樹子に向かって歩いて行った。

第8話 Pの遊戯/仮面ライダー対仮面ライダー（後書き）

そろそろ毎回一番最初に書いてる首謀犯を登場させなければ…。

今回はXライダー隊Wです。

戦隊VS戦隊のようにお互いの事を知らずに戦わせようと思いましたが、最終的にはメガレンジャー対カーレンジャーのようにどちらかが操られて戦うという風にしました。

次回は恐らく戦闘無しです。

それでは。

第9話 2つの地球が融合!? 生きていた水城涼子!!

正義のヒーローと言えば、この街には仮面ライダーって名前のヒーローがいるらしい…。

ヒーローの僕を差し置いて…。

何時か絶対仮面ライダーを倒して真のヒーローになってやるけどまずはこの痛みをどうにかしないと…。

取りあえず風都で評判の探偵事務所にでも行ってみようかな…。

園咲家屋敷

風都1の富豪一家であり、巨大な屋敷に住む 園咲。

園咲家当主 園咲流兵衛 は、風都博物館の館長をしており、暇なときは家族に手料理を振る舞う笑顔を絶やさない人物であった。

だが園咲家には裏の顔があった。

それは園咲家こそが、ガイアメモリを風都に流通している主犯…秘密結社 ミュージウム という事であった。

ミュージアムの目的、行動は今のところ一切不明。

唯一つわかっている事は流兵衛が日頃自らの家族の事を「地球に選ばれた家族。」と言っている事だけであった。

屋敷の巨大なリビングで流兵衛は娘達と共に、一流のパーティシエ達に作らせたショートケーキを食べていた。

長女 園咲冴子 はケーキに一切手を出さず苛立ったようにノートパソコンを打ち、次女 園咲若菜 は姉の向かい側に座り笑顔で母をほうばっていた。

そんな対照的な姉妹を見て流兵衛は笑いながらケーキを食べていた。ケーキもそろそろ食べ終わりそうになった瞬間、リビングの扉が開き白いスーツ姿の男 井坂深紅郎 が戻って来た。

元は井坂内科病院の院長であったが左翔太郎や照井竜に追われ、ガイアメモリの事で親交が深かった園咲家に居候していたのであった。

「おや、井坂君も戻ったのか。よかつたら君も一緒にどうだい？」

「ええ、頂きましようか。丁度小腹が減っていましたね。」

流兵衛がそう聞くと、井坂は顔色一つ変えずにそう答え、冴子の隣の席に座った。

井坂の前にも流兵衛達が食べていた物と同じケーキが置かれた。それを口に運びながら井坂が話し始めた。

「ところで…冴子さんは何をやっているのですか？ 私には余程緊急な事態に見えるのですがね。」

そう聞くと冴子は「売人に15本のガイアメモリを持ち逃げされたんです。」と何処か恥ずかしそうに答えた。

何故冴子は恥ずかしそうに答えたのか？

それは冴子が井坂に恋心を持っていてからであった。

だが井坂は恋などには関心が無く、冴子の事など目的のための手段としか見ていなかった。

井坂が冴子に興味が湧くのはもう少し先の話であった。

「そうですね…しかし売人が売るのはどれも下級なメモリばかり、そこまで血眼になって捜す必要は無いんじゃないでしょうかねえ。」

メモリの売人が持つガイアメモリは能力が低い物ばかりであった。それは能力が高いガイアメモリは園咲家が直接手渡すからであった。大損になる事は間違いないが、そこまで必死になる意味がわからなかった。

すると流兵衛が「はっはははは…。」と笑いながら話し始めた。

「消えた15本のメモリ…、その中に手違いで奇跡の1本が混じってしまったね。どうしても回収したいんだよ。」

奇跡のメモリ…。

それは一体何だろうか？

井坂がそう考えていると向かいに座る若菜が聞いた。

「お父様、奇跡のメモリってなんなのですか？」

「うむ。それはね、偶然誕生した物だね。別の地球の記憶を宿した正しく奇跡の…Pのメモリなんだよ。」

別世界の記憶を宿したメモリ…。

井坂にはそれに覚えがあった。

先程の仮面ライダーは自らの事を「造られた。」と言っていたが、とてもじゃないがこの地球では改造人間を造る技術など無かった。だがもしかやそれが奇跡のメモリの能力でやって来た別世界の仮面ライダーだとしたら…。

井坂は「ニヤツ」と笑った。

「すみませんが…、その話もう少し詳しく聞かせて貰いませんか？」
ナプキンで口元を拭きながらそう聞いた。

鳴海探偵事務所

敬介と翔太郎、それに亜樹子と藤兵衛は自らの事を説明するため、
風都港から鳴海探偵事務所へと戻って来た。

「かもめビリヤード場」と書かれた看板が掲げられた古びた玉屋、
看板の上では風見鶏と風車が風を受けて回っていた。

藤兵衛はそれを見て「中々いい雰囲気の仕事所じゃないか。」と褒
めた。

翔太郎は事務所の扉を開けた。

「ここが俺達の事む…ってなんじゃこりゃああああああああああ
あああああああ！！！」

「なに叫んでんの翔太郎く…て、私聞いてなあああああああああ
あああああああ！！！」

事務所の中を見た瞬間、翔太郎と亜樹子は絶叫した。

いつも使っている事務机やキーボード、それにソファが…いや事
務所全体が無くなっていたのであった。

代わりに珈琲カウンターや大きなモトクロス選手の写真が貼られた
…まるで喫茶店の様になっていた。

「これは…ワシの店だよ。」

それは藤兵衛が経営する「喫茶店COL」の物であった。

鳴海探偵事務所の中身だけが喫茶店C O Lになってしまったのであった。

「一体どういう原理だよ…。」

翔太郎は手を顔に当てそう思ってしまった。

すると「ガチャ」と店の奥の扉が開いてフィリップが出てきた。

「お帰り…2人とも、それにXライダーにおやっさんだったね。僕はフィリップとでも呼んでくれ」

何事も無いかのようにフィリップは自己紹介をした。

亜樹子はフィリップに駆け寄った。

「大変なんだってフィリップ君、事務所が喫茶店になってるんだって！！」

フィリップを激しく揺さぶって亜樹子はそう言った。

「亜樹子ちゃん落ち着いて…。僕もそのくらい知ってるよ…そしてこれも恐らく僕達が出会った事が原因ってこともね…。」

敬介を見ながらフィリップはそう答えた。

それを聞いた敬介はフィリップへと近寄って右腕を差しだした。

「俺はXライダー、神敬介だ。君がもう1人の仮面ライダーWだね、よろしく。」

「よろしく、敬介。」

フィリップは敬介の腕を握って握手をした。

数分後

数分後藤兵衛は翔太郎達を奥のソファへと案内した。

翔太郎とフィリップ、それに亜樹子は一列にソファに座り、敬介は向かい側に座った。

藤兵衛は珈琲を皆に淹れてきた。

「ありがとうございます。」と翔太郎は言い珈琲を飲んでみた。それは照井の淹れた物とは比べ物にはならない位美味しかった。珈琲を配り終えた藤兵衛は敬介の隣に座った。

「さて、それじゃあ僕達から始めよう。翔太郎ドライバーとメモリを出してくれ。」

「あ…ああ、わかった。」

翔太郎は胸ポケットからWドライバーに黒・灰・青色のジョーカーメモリ・メタルメモリ・トリガーメモリを取り出した。

フィリップも緑・赤・黄色のサイクロンメモリ・ヒートメモリ・ルナメモリを取り出し、全てを机の上に置いた。

敬介はそれを見て先程倒したドーパントから出てきた、壊れた3本のガイアメモリを取り出した。

「これは俺が倒した怪人達から出てきたものだが…それと似ている…。」

怪人達から出てきた物と翔太郎とフィリップが持つガイアメモリは何処か似ていた。

フィリップはそれに答えるかのように話し始めた。

「この街は風都、エコを推進する街と言われている。一見平和な街だけど、この街には人間をドーパントと呼ばれる超人に変える機械

…ガイアメモリが出回っている。僕と翔太郎は特殊なガイアメモリをドライバーに差し込む事で2人で1人の仮面ライダー…Wへと変身して、街を汚すドーパントと戦っていたんだ。」

「2人で1人って…だから半分この色だったのか…。」

フィリップのWドライバーとガイアメモリを使った説明で納得する敬介と藤兵衛。

しかしこんな小さな物で人間が怪人や仮面ライダーに変身するということに、「こんな物で変身するのか…。」と驚きを感じていた。そして藤兵衛はある事に気付いた。

「するってつと…お前等の体は普通の人間なのか？」

藤兵衛のその質問に翔太郎は「何言ってるんだよ。」と言った。

「普通の人間じゃない体って…もしかして昔テレビで見た009みたいに改造人間ってでもいうのかよ。」

子供のとき9人の改造人間が世界を救うという漫画を翔太郎は考えてしまった。

そんな改造人間なんてアニメや漫画の話…。

翔太郎だけでなくフィリップや亜樹子でさえもそう考えていた。

だが藤兵衛の中では「仮面ライダー」改造人間」であった。

今まで出会った4人の仮面ライダーも、体全体がもしくはその一部が改造されていた。

だからこそだからこそ目の前の仮面ライダー達が改造人間じゃないということに驚いてしまったのだ。

藤兵衛は「不味い事を聞いてしまった…。」という風に敬介を見た。敬介は「大丈夫だよ。」という風に笑うと、翔太郎達の方を見た。

「次は俺達の番だな。俺は世界征服を企む巨大な悪の組織GODを相手に仮面ライダーXとして戦っていた。だがGODの送り出す神話怪人と戦っていた俺の前に現れたのは人間が変身した怪人だった。それを調べているうちにこの…風都と呼ばれる街に辿り着いた。」

この説明には、敬介の改造人間の事が一切出ていなかった。

これは余計な心配をさせたくないという敬介の優しさからであった。それに気付いた藤兵衛は「それでいい…。」と考え、改造人間の事については何も言わなかった。

翔太郎は敬介の説明を聞いて「俺達もそんな感じだったなあ。」と頷いた。

「確かマツハ・アキレスって言う怪人が現れた、そこからGODの怪人と戦うことになったんだよな…。」

そう言いながら翔太郎は何か大事な事を忘れている事に気付いた。それが何か考えていると、隣のフィリップが「そうか…。」呟いた。

「もしや君達の地球では最近雨が降っていなかったかい？」

「ああ…、確か降ってたよな。なあ敬介。」

「ええ、2日前からずっと雨は降っていました。」

藤兵衛と敬介の答えを聞いて、フィリップはあることを確信して話し始めた。

「翔太郎、覚えているかい？ 前にアキちゃんがスカートが汚れるというのを指摘した事を、この地球では全国で雨が降っていないかったが、別の地球ではやはり雨が降っていたんだ。つまりやはり地球の本棚の暴走は2つの地球が融合して情報がパンクしているのが原因だったんだ。」

「2つの地球が融合？ 一体何の話なんだ？」

訳がわからないように首をかしげる藤兵衛であった。

翔太郎とフリリップは世界が融合しようとしている事や地球の本棚の事を敬介と藤兵衛に説明した。

地球の事が全て書いてある地球の本棚や、2つの地球が融合しているなどと、どれも信じられるような話ではなかった。

しかし2人の仮面ライダーが出会ったこの現状を見ると、それを信じるしかなかった。

説明をしているうちに翔太郎は先程まで忘れていたある事を思い出した。

「あああああああ！ 思い出したあああああ！ あれだよ
亜樹子、依頼人はどうしたんだ！」

翔太郎が忘れていた事…。

それはマツハ・アキレスに追われていた女性の事であった。

GODやもう1人の仮面ライダーの事でその事をすっかり忘れていたのであった。

翔太郎がそう聞くと亜樹子は言いくそくに話し始めた。

「いやあ…ごめん…実を言うとな…はぐれちゃったんだ…。」

それを聞いて「はあああああ！」と翔太郎は叫んだ。

亜樹子は「本当にごめん！！」と手を合わせて謝った。

依頼人とはぐれてしまうなんて…。

事件の力ぎを握るかもしれないというのに…。

そう考えていると敬介が「依頼人って…。」と話してきた。

「さっき亜樹子ちゃんが探していた人の事かい？」

そう聞くと亜樹子は「そう。」と答えた。

「実を言うと、その依頼人の女性はGODの怪人に襲われてたんだよ。」

「そうなのか…。」

GODに追われる女性…、それはどういう人物なのか？

敬介がそう考えていると「ガチャ」と音と共に事務所の扉が開いた。入って来たのは照井竜であった。

喫茶店に変わっている事務所を照井は驚いたように見ていた。

「模様替えでもしたのか？」

「そんなんじゃないよ。それより何の用だ？ あっ、もしかして調べて貰った事についてか？」

翔太郎がそう聞くと照井は「俺に質問するな…。」と言いつつ放った。もはやこれは照井の口癖になっていた。

照井は奥にいた藤兵衛と敬介を見て「依頼人か？」と聞いた。

「いや違うんだ、実を言うと色々あってな…。」

「そうか、それよりもま左が言っていた女性のことだが搜索願はできていなかった。」

「だろうな…。」

別の地球からの住人であれば、この地球で搜索願が出ている筈がなかった。

翔太郎はその事に付いて説明しようとする。照井は「だが…。」と続けた。

「代わりに迷子になっていた本人を連れてきた、よく喋る子供と帽子を被った古臭い探偵と言っていたからな。多分間違いない…。」「古臭い…探偵…って。」「

照井は「来ていいぞ。」と迷子になっていた依頼人の女性を呼んだ。すると紫色のドレスを着た女性 水城涼子 が入って来た。

「あつ、よかつた見つかつたんだ。」と亜樹子が言おうとすると、「ガシャアン」と何かが割れる音がそれを遮った。割れた物…それは敬介のティーカップであった。

「涼子さん…な…のか?」「

涼子はそれを聞いて敬介の顔を見た。その瞬間再びフラッシュバックが襲った。

「本日から君に任務与えたい、GODの潜入調査だ。」「

「涼子、俺と結婚してくれてくれ…。」「

「よく親父の助手なんて出来るよな?」「

「霧子、あなたには何か遭ったときのために敬介さんを守ってほしいの。」「

「GODを決死って裏切るではないぞ。まあ、その機械の体では無理な事か?」「

「何故あんな事をしたのか教えてくれ。」「

「私は敬介さんに嘘をついてしまった…。」

「今はまだ何も…、でも信じてください、いつかあんな事があったんだ…と笑いあえる日が来るはずです…。」

「さようなら敬介さん…。」

その瞬間涼子は全てを思い出した。

涼子の息遣いは荒くなっており、消えてしまいそうなくらい小さな声で呟いた。

「敬介…さん…。」

この時から事件はクライマックスを迎えようとしていた。

だがその事に誰も気づいていないのであった…。

第9話 2つの地球が融合!? 生きていた水城涼子!! (後書き)

1日遅れの投稿です。

昨日は謎のスランプに陥ってしまい投稿できませんでした。

今回は戦闘無しです。

園崎家を登場させら他のがせめての償いです…。

全ての記憶を思い出した涼子…ここからはもうクライマックスに向かっています。

話数は短くて後5話です。

それではエレメントブレイドでした。

第10話 Tの葛藤/仮面ライダーの仮面 Part 1

鳴海探偵事務所

照井が連れてきた女性 水城涼子。

敬介を見た涼子は全てを思い出した。

自分が何故ここにいるのかを…。

自分がここにはいけない存在だという事を…。

「涼子… 一体どうして…。」

椅子から立ち上がり敬介は涼子に近寄ろうとした。

だが涼子は「いや…、いや…。」と何度も呟き敬介を拒絶した。

「来ないで… 来ないで… 来ないでええええ!!」

恐怖から叫び声を上げると、涼子は事務所から出て行ってしまった。

敬介は「待つてくれ!!」と言い涼子を追って事務所から出た。

事務所を出てみると既に涼子の姿はどこにも無かった。

裏路地を使い何処かに逃げてしまったのであった。

敬介は涼子を追う為自身のバイクに跨り、急いで走らせた。

もしあの涼子が本人としたなら行く場所は分かっていた。

「何故なんだ涼子? 何故生きているんだ…?」

バイクを走らせながら敬介はそう呟き、バイクのスピードを上げた。

事務所に残された翔太郎は驚いたように今の光景を見ていた。

「おい、おやつさん…一体どういうことなんだよ？」

今の敬介と涼子の態度はどう見て尋常ではなかった。

何故彼らはそんなに焦っていたのか？

一体2人はどういう関係なのか？

翔太郎がそう聞くと藤兵衛は静かに語り始めた。

「翔太郎：お前はさっき改造人間なんて漫画の話だって言ったよな。

違う…：敬介の体はな、脳味噌の一部分を覗いて全部機械の…：改造人間なんだよ…。」

「そんな…嘘だろ…おやつさん？」

その言葉を信じられず翔太郎はそう尋ねた。

だが藤兵衛は「本当だ…。」と言うように首を横に振った。

「敬介はなGODに父親と一緒に殺されたんだ。だが父親は彼を改造人間…：仮面ライダーXとして甦らせた。それがどんなに苦しい人生になるかと…：父親には敬介を見殺しにする事が出来なかったんだ…：そして彼らがGODに殺される要因を造ったのは…：婚約者だった水城涼子だったんだ。」

「それって水城涼子が神敬介を裏切ったってことなのかい？」

フィリップがそう聞くと藤兵衛は黙って頷いた。

本当はこの事を誰にも話したくはなかった。

敬介が父親と一緒に殺されたなど…。

敬介が改造人間として甦ってしまった事など…。

出来ることなど誰にも話したくはなかった。

誰にも敬介の悲しみの仮面を教えたくはなかった。
エックスライダー

翔太郎は先程の言葉に後悔を感じていた。

本人を前にして「改造人間なんて冗談だろ…。」と言ってしまった
なんて…。

もし過去に戻れるならその時の自分をぶん殴ってやりたかった。

そう考えていると亜樹子の「嘘だよね…。」と泣きそうな声が聞こえてきた。

「体が機械なんて…だって敬介さんは人間よりも優しい人だったもん…。」

初めて出会ったときから見知らずの自分を助けるためだけに敬介は戦ってくれた。

それにたまに見せた優しい笑顔も人間そのもの…いや人間よりも人間らしかった。

泣き崩れそうになった亜樹子をフィリップは支えた。

「だからさつき、敬介は涼子さんを見て驚いていたのか…自分を裏切った女性が何でこんな場所にいるんだって…。」

「いいや違う…。」

翔太郎の言葉を否定すると藤兵衛は言いにくそうに全てを話し始めた。

「水城涼子が裏切ったのには理由があったんだ。彼女は国際刑事警察機構ポルだったんだ。敬介を裏切ったのも全て命令だったんだ…GODに潜入するためのな。だがGODとてそんな女性を行き成り信用できる筈がない。彼女も…肉体を改造されたんだ…GODを裏切ら

せないためにな…。」

「ということは彼女も改造人間なのか…。」

扉の前にいた照井がそう聞いた。

照井は藤兵衛達が何者なのかはわからないが、翔太郎やフィリップの態度を、それに話の内容を聞けば一大事である事がわかった。

裏切ったとはいえ元婚約者同士が改造人間になったのだ、照井は「皮肉な話だな…。」と言った。

「ああ皮肉な話だろ？ でもな…彼女にとって敬介の復活は計算外だったんだよ…。まさかGODと戦う戦士になるとは想像もできなかったんだよ…。そのせいだろうか…。涼子は何度もピンチに陥った敬介を救ってくれた。そして…そして…水城涼子は敬介を守ったのがGODにばれて…命を落とした…。」

最後の言葉はその場にいる全員を驚かせた。

藤兵衛の話を聞く限り、涼子はもうこの世にいてはいけない存在という事であった。

何故死んだ人間がこの場にいるのか？

死んだ人間がこの場にいるなんてありえない事であった。

「ワシのも何故涼子が甦ったのかはわからない…。だが父親の死と恋人の裏切りから立ち直ったばかりの敬介の前に現れるとはな…。出来る事ならあいつにそんな苦しみを味あわせたくはなかった…。」

藤兵衛の眼もとには薄らと涙が溜まっていた。

それは過去4人の仮面ライダーを見てきたからこそ流せる涙であった。

翔太郎は机に置いてあったWドライバーとガイアメモリをしまい立ちあがった。

「フィリップ行くぜ…。」

そう言うと隣のフィリップは「フツ。」と笑ってガイアメモリをしまい立ち上がった。

翔太郎は藤兵衛に話し始めた。

「行こうぜおやっさん、2人を探しにな…。」

「僕もこの事件には興味があったんだ…、一緒に調べるとしよう。」

2人で1人の仮面ライダーの答えはもう出ていた。

それは情に流されやすい半熟の翔太郎だからこそその答えかもしれない。
ハーフボイルド

フィリップもそんな彼を知っているからこそ伝えなくても彼の決意がわかったのであった。

彼らの出した答え…それは風都を、そして水城涼子を救う事であった。

藤兵衛は2人を見て「ありがとうな…。」と礼を言い立ち上がった。

「そんじゃ、少し行ってくる。照井、暫くの間亜樹子をよろしく頼んでくれないか？」

未だに泣いている亜樹子を見ながら照井にそう頼んだ。

照井は仕方がないと言った感じに「わかった。」と答えた。

「よし…行くとするか。」

帽子を被り直して翔太郎がそう言うと、フィリップも藤兵衛は事務所を出ていった。

後に残った照井は亜樹子の隣に座った。

そして亜樹子を励ませすように言った。

「大丈夫だ、左達を信じろ…。」

照井のその言葉に亜樹子は「うん…うん…。」と何度も頷いた。そして亜樹子は自身の頭をそつと照井の肩に乗せた。嫌がる素振りも見せず、照井は何も言わなかった。

事務所を出ると翔太郎はハードボイルダーに乗り込もうとした。だが急いでいた為前にいた男に気付かずぶつかってしまった。

「うおっおつと。」

「うわああああ。」

翔太郎は後ろに吹き飛ばされてしまった。

ぶつかってしまった男は何とも情けない声を上げて転んでいた。

翔太郎はぶつけてしまった尻を抑えながら立ち上がった。

「痛た…、ああすまねえな、急いでいたもんで…大丈夫か？」

翔太郎が男に手を差し伸べると、男は「うわあああああああああ…。」と叫び始めた。

「痛いよあ…わざとだな。わざとヒーローの僕を倒すためだな…。」

「はあ…？ 何言ってるんだ？」

行き成り意味わからない事を言う男に、翔太郎は不思議そうにそう聞いた。

男の顔をよく見てみると何処かで見覚えがあった。

何処で見たのか？

少しの間そう考えたが、すぐに男の正体を思い出した。

「お前は…確か照井が探していたメモリの売人…桑田悟…。」

男の正体は照井が持つてきた写真の人物 桑田悟 であつた。

桑田は「ひいひい…来るなああ！！」と右腕を大きく振つた。

すると桑田の右腕が人間ではなく黄色と青の巨大な腕…ドーパントの腕である事に気付いた。

「体の一部が…ドーパントだつて？」

「おい、体の一部つてそんな事も可能なのか？ その…ガイアメモリつてのは？」

不思議そうに言うフリリップに、藤兵衛はそう聞いた。

フリリップは「そんなはずはない…。」と答えた。

「前にインビジブル・ドーパントが人間態のまま能力を発揮した事があつた。でもあれは改造されたメモリだつた。だからこそあんな能力を発揮した筈なんだ…。」

「て、事はこいつも井坂の仕業なのか？」

後ろに引いた翔太郎が聞いた。

前にインビジブル・ドーパントは井坂が改造した為起こつた現象であつた。

ならばこれもそれと同じなのか？

そう考えていると、桑田が泣きそうな声で話し始めた。

「僕は正義のヒーローなんだ…、だから警察にも捕まっちゃいけないんだ、だからメモリを使つたんだ…。でもこのメモリを使った途

端、僕は変な研究所にいたんだ。…そこではね化物を造っていたんだ…ヒーローとしては見逃せないだろう…。でもこのメモリには戦闘能力は無かったんだ…だからもう1本メモリを使ったんだよ……したらメモリが抜けなくなってる…。」

変な研究所…それはGOD研究所であった。

彼があるメモリを使い辿り着いた先はっそれはXライダーの地球であった。

全ての事の原因となっている桑田であるが、その事を翔太郎達はまだ知らなかった。

今の話を聞いてフィリップは驚いたように「メモリを2本使ったのかい？」と聞いた。

桑田は「そうだよ…。」と答えた。

「メモリは本来1本でも超人的な能力を^{ちから}発揮する物。2本を同時に使ったら互いに影響しあい、何かしらの副作用が出てても可笑しくは無い…。恐らく今回のメモリが抜けなくなったのも、体の1部が常にドーパントというのもそれが原因だろう…。」

「そうだよ!! だから助けてくれって言いに来たのに…お前等も僕を犯人呼ばわりするの。…やっぱりお前等は敵だな正義の強さを見せてやる…。」

桑田はそう言うと「うおおおおお!!」と大声で叫んだ。

その瞬間ガイアメモリを差した瞬間のようにガイアウィスパーが鳴り響いた。

PARALLEL…THUNDER

桑田の体が光に包まれその姿を変えていった。

青色の体に巨大なアメフトの様な緑色の鎧を纏い、巨大な両肩には

右にPの文字、左にはTの文字が刻まれていた。強靱な足を持ちその巨体を支えるのも納得さえ、顔はドレッドヘアの様な髪に黒いサングラスの様なものが装着されていた。ドーパントの体からは電撃が走っていた。

「何ちゆうドーパントだよ…。」

その外見を見た翔太郎はそう呟いた。するとフィリップは全て納得したように「そうか…。」と呟いた。

「今桑田が使ったメモリの中にパラレルと呼ばれるものがあつた、パラレルとは平行という意味…恐らく平行世界へ行く為のメモリだつたんだ。しかしメモリの暴走の為世界が融合するといった結果になつたんだ。」

「てことは、メモリブレイクさえすれば全て解決つてわけか…。だつたら行くぜフィリップ。」

翔太郎は腰にWドライバーを装着し、ジョーカーメモリを取り出した。

フィリップは「おやっさん、僕の体を頼むよ。」と言いサイクロンメモリを手に持った。

「『変身!』!』」

CYCLONE / JOKER

Wドライバーにメモリを装着すると風が正太郎を包み込み、2人は仮面ライダーW・サイクロンジョーカーへと変身した。

それと同時にフィリップの体が倒れ、藤兵衛は驚いたようにフィリップの体を支えた。

「おい、フィリップ大丈夫か？ 一体どうしたんだ？」

既に意識の無いフィリップの体へと藤兵衛は何度も語りかけた。するとWの中にいるフィリップが答えた。

『おやっさん、僕はこっちだよ…。悪いけど暫くの間そっちの体を見ていてくれ。』

「成程…2人で1人って言うのはそういう意味だったのか…。」

藤兵衛は納得したようにそう言った。

Wは平行世界と雷の記憶を宿したドーパント パラレルサンダー・ドーパント（以下Pサンダー・ドーパント） に向かって走り出した。

「そうか…お前が仮面ライダーだったのか…。ヒーローの僕を差し置いてヒーローを名乗るなんて生意気なんだよ…！」

Pサンダー・ドーパントは腕から青白い電撃を放った。

Wは瞬時のところで電撃を避けて、Pサンダー・ドーパントに拳を放った。

だがPサンダー・ドーパントの強靭な体には全く通用していなかった。

「うわあああああ…！」

「うおっおおおお！？」

強靭な腕でWを掴み投げ飛ばした。

地面に激突したWは背中を抑えながら立ち上がった。

「やべえぞフィリップ、こいつは一気にマキシマムで決めるぜ！」
「…わかったよ、今の場合はそれが一番有効だろう。」

そう決めるとWドライバーからジョーカーメモリを抜き右腰のマキシマムスロットへと差し込んだ。

JOKER: MAXIMUM DRIVE

電信音が鳴り響くとWの体は風に包まれ宙に浮いていった。

一定の高さまで行くと、両足をPサンダー・ドーパントに向けて急降下していった。

「ジョーカーエクストリイイム！！！」

空中で右半身と左半身に分裂してそれぞれキックの体勢に入り、必殺技 ジョーカーエクストリーム をPサンダー・ドーパントに放った。

ジョーカーエクストリームは見事Pサンダー・ドーパントに炸裂した。

だがPサンダー・ドーパントはその強靱な鎧で2つのキックを受け止めていた。

「な…そんな…」

「まともには喰らって効いていないだつて…。」

Pサンダー・ドーパントはWの足を掴み再び地面に投げ飛ばした。だがWは前の様に立ち上がる力は無かった。

肉体的なダメージよりも必殺技を破られたという精神的なダメージの方が大きかったのであった。

「僕を邪魔する仮面ライダーなんて…消えちゃえばいいんだああああああ！！！」

膨大な威力の雷撃がWに向かって放たれた。

避ける気力の無いWはそれをまともに喰らってしまった。

「『うわああああああああ！！！！』」

体中に電激を浴びているうちにWの…いいや、左翔太郎の意識は消えていった。

Wは負けたのであった。

第10話 Tの葛藤／仮面ライダーの仮面 Part 1（後書き）

書いているうちにとても長くなる事に気付き、今回の話は2分割にしました。

いずれ桑田悟、及びパラレルメモリとサンダーメモリの詳細を書きたいと思います。

それとどうでもいい事ですが只今熱が出ています…。

いつ投稿できるかわからないので出来るうちに投稿しようとして土曜日にしました。

それでは皆さん風邪には気をつけてください。

エレメントブレイドでした。

第11話 Tの葛藤/仮面ライダーの仮面 Part 2

「ヒューン」と顔に当たる冷たい風で翔太郎は目を覚ました。隣を見てみると藤兵衛がハンドルを握っていた。

どうやら自分が藤兵衛のジープに乗っているという事がわかった。隣からは聞きなれたバイクの音が聞こえてきた。

見てみるとフリリップがハードボイルダーを走らせていた。何故自分がここにいるのか？

それは忘れず筈がなかった。

翔太郎は…いいや仮面ライダーWは負けたのであった。

肉体的な面もそうだが必殺技が効かなかったというショックも大きかった。

翔太郎はそう考え帽子を被り直すと、藤兵衛が起きた翔太郎に気付き声をかけてきた。

「お、やっと眼を覚ましたのか？」

「ああ、心配掛けてすまなかった。もう大丈夫…イタたた…。」

「無理するな、今は休んでおけ。どうせすぐに体を動かすことになる。」

藤兵衛の「直ぐに動かすことになる。」とはどう意味なのか？

そう考えた翔太郎であったが、今はそんな事よりもっと大事な話を聞く事があった。

「おやっさん、桑田悟…いやドーパンとはどうなったんだ？ もしかして事務所にいた亜樹子たちを襲ったんじゃない？」

敗北して意識を失っていた翔太郎にはあの後Pサンダー・ドーパントがどうなったのかはわからなかった。

照井が居たから大丈夫だと思いが、亜樹子に何かあったら2度と壮吉つさには顔向けできない。

そう考え聞いたのだ。

藤兵衛は焦る翔太郎に「落ち着け。」と言った。

「お前が気を失った後…あいつはお前に止めを刺そうとしてきたんだ…。」

藤兵衛はゆっくりと何があつたのか話始めた。

数十分前・鳴海探偵事務所前

強烈な電撃を浴びて翔太郎は気を失ってしまった。

それと同時にWの体から風が吹き変身が強制的に解除されてしまった。

藤兵衛が支えていたフィリップの体が意識を取り戻した。

「お、意識を取り戻したのか？」

意識が戻ったフィリップを見て藤兵衛がそう聞くと、フィリップは「僕は大丈夫だ。」と答えた。

「でも翔太郎が…。」

翔太郎の体はPサンダー・ドーパントの前で倒れていた。

早く助けなければ翔太郎が危ない…。

そう考え動き出そうとしたフィリップであったが、Pサンダー・ドーパントはフィリップと藤兵衛の前に電撃を放ち救出を阻止した。

「誰にも邪魔させない…。だって…仮面ライダーさえいなくなれば…僕が…僕が…真のヒーローだ…。」

止めを刺すべくPサUNDER・ドーパントはゆっくりと翔太郎へと近づいて行った。

藤兵衛は「起きるんだあ、翔太郎！」と叫んだが、翔太郎は目を覚まさなかった。

翔太郎が殺される…。

そう思った瞬間、PサUNDER・ドーパントに体当たりする物体があった。

それは青い機械の甲虫 ビートルフォン であった。

「あれはビートルフォン…。という事は…照井。」

ビートルフォンが飛んできた方向を見てみると、事務所の前には照井竜がいた。

照井は倒れた翔太郎を見た後、フィリップに目を向けた。

「フィリップ…今のうちに左をどかせ。」

「あ…ああ、藤兵衛さんも手伝ってくれ。」

藤兵衛は「ああ、わかった。」と返事をして、照井に言われた通り倒れた翔太郎を移動させた。

照井は翔太郎を移動させたのを見ると、腕を上げてビートルフォンを自分の手に呼びもどした。

それと同時にビートルフォンは携帯電話の形に変わった。

照井は携帯電話をしまうと、バイクのハンドルを模したベルト アクセルドライバー を取り出し腰に装着した。

そして加速の記憶を宿した赤いガイアメモリ アクセルメモリ を

握った。

「変…身ツン!!!」

ACCELE

中央部のガイアメモリスロットにアクセルメモリを挿しこみ、アクセルドライバーの右ハンドルを回した。

その瞬間「ブウウウン、ブウウウン」とバイクのエンジン音が鳴り響き照井の体を電流と熱気が包みその姿を変えた。

バイクを模した真赤な重量級の体ボディーに背中には2つタイヤが装着されていた。

ヘルメットのような仮面が特徴的な円状の瞳を青く発光させた。

手には専用の大剣 エンジンブレード が握られており、それを宙を切り裂くように大きく振った。

「さあ…振り切るぜ。」

風都で戦う加速の戦士 仮面ライダーアクセル は静かにそう宣言した。

藤兵衛は照井の変身を見て「あいつも仮面ライダーだったのか…。」と呟いた。

「照井、そいつは桑田悟が2本のメモリを使用して生まれたドーパントだ。しかもメモリは暴走していて圧倒的な破壊力をもっているから気を付けるんだ!!!」

フィリップがそう言うとアクセルは「なに…、桑田悟だと…。」と呟いた。

自分が探していた人物が目の前にいる…、これはアクセルにとって

都合がよかった。

今自分Pサンダー・ドーパントを倒せば、逃走中の犯人も捕まえられ一石二鳥だからだ。

しかしWを倒した相手でもあり、油断は禁物であった。

「あれえ…もう1人仮面ライダーはいるんだあ…、それじゃあ、お前も倒さないとねえ…。」

「倒すだと…？ 笑わせるな、倒されるのはお前だ。」

アクセルはエンジンブレードを握りPサンダー・ドーパントへと向かっていった。

「ガキイーン」とエンジンブレードとPサンダー・ドーパントの腕がぶつかり合った。

「ふん、はああっ!!」

アクセルは腕に力を込めエンジンブレードを振り切り、見事Pサンダー・ドーパントの鎧を斬り付けた。

だがPサンダー・ドーパントの頑丈な鎧には傷1つ付いていなかった。

「僕がヒーロオオオだああああ!!」

叫びながらPサンダー・ドーパントは巨大な腕を振りアクセルを殴りつけた。

咄嗟にエンジンブレードを盾にしたが後ろへ吹き飛ばされてしまうほどの衝撃であり「くっ…。」と声を漏らしてしまった。

「これで終わりにするよ…。」

PサUNDER・ドーパントの右腕に電撃が溜まっていった。それを見たアクセルは銀色のガイアメモリ エンジンメモリ を取り出し、エンジンブレードのメモリスロットに挿しこんだ。

ENGINE::STEAM

「はあっ!」

エンジンブレードから高熱の蒸気が噴出された。

突然の蒸気にPサUNDER・ドーパントは電撃を放つのを止め、腕で蒸気を掃った。

蒸気が晴れると目の前にいた筈のアクセルが居なくなっていた。

「あいつ…何処に行ったんだ…。」と辺りを探すPサUNDER・ドーパントであったが、すぐにアクセルの声が聞こえてきた。

「俺は…ここだ!」

アクセルはPサUNDER・ドーパントの眼の前でしゃがんでいた。

PサUNDER・ドーパントはそれに気付き蹴り払おうとするが、それよりも先に下からエンジンブレードが顎に向かって突き出された。流石にこの攻撃を受けたPサUNDER・ドーパントは後ろに後退してしまった。

アクセルはその隙を見逃さずアクセルドライバーの左ハンドルを数度回した。

ACCELER::MAXIMUMDRIVE

「絶望が…お前のゴールだ!」

必殺技を決めるべくPサUNDER・ドーパントへと向かって走ってい

った。

この一撃で決める…。

そう思った瞬間突如アクセルの周りに突風が吹き荒れた。

それによりマキシマムドライブは強制解除され、アクセルは後ろに吹き飛ばされてしまった。

Pサンダー・ドーパントも行き成りの突風に驚いていた。

「これは普通の風じゃない…まるで竜巻だ。…こんな竜巻を起こせる奴は1人…。」

フィリップは突風タツマキに吹き飛ばされないようにしながらそう呟いた。

この竜巻を起こした人物はゆっくりとPサンダー・ドーパントの前に歩いてきた。

「すみませんねえ…。貴重なメモリを使った彼を殺られては困るんですよ…。」

白き天候の悪魔 ウェザー・ドーパントは 是静かにそう告げた。

ウェザー・ドーパントを見た瞬間アクセルは憎たらしそうに「井坂…深紅郎!!」と呟いた。

アクセル 照井竜 にとつて、ウェザー・ドーパント 井坂深紅郎 は自分の家族を殺した張本人であり殺しても殺したらない存在であつた。

ウェザー・ドーパントを殺す…。

その為に仮面ライダーアクセルの力を手に入れたのだ。

アクセルは先程吹き飛ばされたエンジンブレードを拾うと、井坂に向かつていった。

「井坂ああああ!!」

ELECTRIC

エンジンブレードの刀身に電撃が纏い、ウエザー・ドーパントに振り降ろした。

「すみませんね。今は貴方と遊んでる暇は無いんですよ…。」

ウエザー・ドーパントはエンジンブレードを片手で弾くと、アクセルに再び突風を放った。

吹き飛ばされたアクセルは地面に叩きつけられてしまい、変身が解けてしまった。

ウエザー・ドーパントはアクセルを気にせずPサンダー・ドーパントへと近寄った。

「何だ…お前は…僕を助けてくれたのか？」

行き成りの事で驚いていたが、ウエザー・ドーパントはそれに答えずPサンダー・ドーパントの腕を掴んだ。

「2本のメモリの同時使用…。ううん、これはいい研究材料サンプルですね。」

そう言うとウエザー・ドーパントとPサンダー・ドーパントの周りに突風が吹き荒れた。

突風は2人を包んで行き、突風が消滅すると既に2人の姿は無かった。

照井はそれを見て「チツ…。」と舌打ちした。

フィリップと藤兵衛は照井の側へと駆け寄った。

「大丈夫か？ お前…。」

「俺に質問するな…。」

照井は藤兵衛にそう返事をした。

その返事に藤兵衛は怒ったように「何だあ、こいつは…。」と言った。

そのやり取りを気にせずフィリップは「助かったよ。」とお礼をした。

「事務所を出て直ぐにあいつに出くわしてね。…照井が来てくれな
いと大変なことになっていたよ。」

照井はそれを聞くと「事務所を出てすぐだと…？」と呟いた。

「嘘を言うなお前達が事務所を出てからもう2時間近く経っている
んだぞ…。俺はお前達が調査を終えて戻って来たと思ったんだが…。」

「

照井は翔太郎達が出ていってから2時間の間ずっと事務所で待つて
いた。

そろそろ戻って来てもいい頃だと思っていいたら事務所の外で物音が
し、事務所から出てきたのであった。

それを聞いた藤兵衛達は「そんな馬鹿な…。」と驚いた。

自分達が出てからまだ20分も経っていない筈であった。

しかし照井は「2時間経った。」と言っていた。

もしかこれは…。

フィリップはある仮設を話し始めた。

「もしか…^{パラレル}平行世界のメモリが暴走して2つの世界が融合し始めた。
それによって時間という概念が無くなり、個人が感じる時間がバラ
バラになってしまったのではないだろうか…。」

パラレルメモリの暴走…それに伴ない個々に感じる時間まで変化してしまった。

そうとしか考えられなかった。

「これはそう急に手を打たないといけないね…。」

フィリップは静かにそう呟いた。

藤兵衛はあれから起こった出来事を全て翔太郎に話し終えた。

それを聞いた翔太郎は「時間がバラバラ何て嘘だろ…？」と聞いた。

藤兵衛は何も言わずに翔太郎に腕時計を渡した。

翔太郎はそれを見てみると、長身と短針、それに秒針が物凄い早さで回転していた。

「フィリップの言うことに間違いは無いとワシは思っている。…照井という奴もそれを信じて、亜樹子ちゃんと一緒に桑田つてやつを探している…。」

あの後照井は事件の重さを感じて亜樹子と一緒に調査を始めた。

…といっても亜樹子が勝手に付いて行ったのだが…。

「なら…俺達も桑田を探してるってわけか。迷惑掛けちゃったなあやっさん。もう後は大丈夫だ。」

自分も今すぐに桑田を探し事件を解決しなくては…。

それに涼子を助けるとも約束したのだ…。

こんな所で休んではなれない…。

そう考え翔太郎は藤兵衛にお礼を言い「ジープを止めてくれ。」と続けた。

だが藤兵衛は「何言ってるんだ。」とそれを制した。

「どうやってあの怪人に勝つっていうんだ？ お前達は必殺技も破られてしまったんだぞ…。」

「そ、それは…。」

忘れもしない…。

全力で放った必殺技が直撃したにも拘らず傷一つ付けなかった事を…。

「だけど…戦わないって分けにはいかないだろう！！ 俺達は風都を守る仮面ライダーなんだぜ。」

仮面ライダーは風都の守護神であった。

街の人の希望の象徴なのであった。

それなのに逃げるわけにはいかない…。

そう考えていたのであった。

藤兵衛はそれを聞いて「安心しろ…。」と優しく告げた。

「心配しなくともお前達が戦うんだ。ワシは…それを手助けしてやるだけだ…。」

藤兵衛の瞳には決意が込められていた。

その瞳を見てしまった翔太郎はこれ以上何もいう事が出来なかった。恐らくフィリップが先程から何も言わないのも、藤兵衛から似たような事を言われたからであろう。

「わかった…、おやつさんを信じる…。」

翔太郎がそう言うと藤兵衛は「ああ、任せろ。」と答えた。

風都・風力無人発電所

エコの街というだけあり風都で使用する電気の半分以上は風力で賄っていた。

巨大な風車と「バチバチ」と電気を蓄積させているコイルが目印の風都・風力無人発電所。

藤兵衛はその前でジープを止めて翔太郎とフィリップを発電所の前につれてきた。

発電所の周りには柵が立っており、「危険立入禁止」と書かれた看板がたっていた。

3人はそれを無視して柵の中へと入っていった。

「さあ…まずは仮面ライダーに変身するんだ。」

「変身って…一体何をやる気なんだい？」

フィリップがそう聞くと藤兵衛は「特訓だ…。」と答えた。

「あいつの電撃に対抗するには、ある程度電撃に態勢を付けておく必要がある…。その為にあのテラスコイルを折るんだ…。」

発電所の真上にあるコイルを指差した。

コイルは電流が溜まっており「ビチビチ」と音がしており、青白い電撃が見えた。

藤兵衛の説明はそれで終わりではなく、最後に特訓の目的を告げた。

「新必殺技…ライダーキックでな。」

翔太郎は「ライダーキックだって…。」と呟いた。
それは自分達が出すキック技ジョーカーエクストリームと…いいや
唯の飛び蹴りとどこが違うというのであるうか？
翔太郎とフィリップはそう考えてしまった。
それに気付いた藤兵衛はゆっくりと話し始めた。

「お前達が出した両足での必殺キック…それが悪いと言わない。で
も…あれは仮面ライダーの性能に頼った必殺技の様にワシは見え
た…。」

藤兵衛の言う通りジョーカーエクストリームだけでなくWの全ての必
殺技はガイアメモリとWドライバーちからの能力で引き出す必殺技であっ
た。

それ以外にもガイアメモリは感情の強さで威力を発揮するが、Pサ
ンダー・ドーパントにそれが効かなかった。

そんな今だからこそ性能に頼らない…仮面ライダーの決意の必殺技
ライダーキックが必要なのであった。

「ワシはな…敬介を含めて4人の仮面ライダーの特訓に付き合った
事があった。あいつらはな必殺技が破られる度に新たな必殺技を開
発していった。」

藤兵衛は懐かしそうに話し始めた。

4人の仮面ライダーは血の滲むような特訓の末、一度敗れた相手も
倒してきた。

「お前達も仮面ライダーなんだ、ライダーの性能の更にも上に行く事
が出来るとワシは信じている…。絶対に今の新必殺技…仮面ライダ
ーの象徴とも呼べる必殺技…ライダーキックをものにできると思う。」

…だがそれはワシの思い過ごしだったのか？」

藤兵衛の話聞いた翔太郎の決心は既に付いておりジョーカーメモリを取り出した。

フィリップも「やれやれ…。」言ったようにサイクロンメモリを取り出した。

2人はWドライバーを腰に装着し、サイクロンメモリとジョーカーメモリを差し仮面ライダーW・サイクロンジョーカーへと変身した。

「おやつさん…あのコイルをキック…いやライダーキックで破壊すればいいんだな？」

「ああ…、唯のキックじゃないぞ…。お前達の場合は基本の体となる翔太郎の左足に全身の力を込めるんだ。フィリップも左足だけに力を込めるんだぞ…。」

「わかったぜ…。」

「わかったよ…。」

そう答えるとWはコイルに向かってジャンプし左足を突きだし、右足を曲げ…ライダーキックの体勢になった。

「『ライダーアアアア…キイイイイック！』」

Wはそう叫び電気が蓄積されているコイルをキックした。

だがコイルには傷1つ付かず、逆にコイルの何百満ボルトという電流がWの全身に走った。

「『うわああああ…。』』と叫び声を上げてWは地面に叩き落とされてしまった。

それと同時にWの変身が解けた。

翔太郎の体には傷跡と焦げ跡が付いていた。

「大丈夫かい？ 翔太郎？」

倒れている翔太郎に近づき心配したように言うフィリップであった。この特訓で傷つくのはWの本体である翔太郎なのであった。必殺技を完成させる前に翔太郎が倒れてしまう……。そう考えていると藤兵衛は2人の側へと近寄ってきた。

「立つんだ、翔太郎！！ 時間が無いんだぞ、こっちは30分も経っていないが向こうで何時間経っているか分からない。何としても必殺技を完成させるんだ！！」

傷ついた翔太郎に厳しくそう言う藤兵衛をフィリップは睨んだ。

この藤兵衛はこんなに残酷な男なのか？

フィリップはそう考えてしまい「無理だ！！」と言い放った。

「やっぱり、無理なんだ！！ 例えば機械が限界を超える事が出来ると思っっているのかい？」

「出来る！！」

機械が限界を超えられないと考えていたフィリップだが、藤兵衛は出来るかと力強く返し。

「さっきも言った通り敬介の体は機械だ、それにな他のライダー達も機械の…改造人間だったんだ…。それなのに奴らは機械の限界を超え新たな必殺技を編み出したんだぞ。」

藤兵衛は翔太郎とフィリップのそれぞれの肩に手を置いた。

「今は敬介がいる…。だけどな…この地球を守るのはお前達だろう！ 街の人の希望になるんだろ！！ だったらライダーは負けちゃいけないだろう！！ 厳しい事を言うかもしれないが…やるしかないんだ…。」

藤兵衛の瞳には涙が溜まっていた。

それを見た翔太郎は傷ついた体を起こし「わかってるよ、おやつさん。」と答えた。

「フィリップ…俺達も仮面ライダーだろう…。だったら他の仮面ライダーの様に限界を超えられるはずだろう？」

「ああ…わかったよ。翔太郎がそこまで言うならやってみるよ…。」

2人は再び仮面ライダーW・サイクロンジョーカーへと変身した。

そして再びライダーキックの体勢に入り、コイルへと向かっていった。

藤兵衛はWの姿を見て昔の事を思い出した。

1号ライダーや2号ライダーの時の事、ライダーV3の事…それにXライダーの特訓の時の事を…。

藤兵衛は「フッ。」と小さく笑った。

「頑張れ…2人供…お前たちなら絶対に出来る筈だ…。それに必ず仮面ライダーの仮面を…正義の系譜を継げるはずだ…。」

彼らを信じているからこそ藤兵衛はこんな辛く苦しい事をやらせたのだ。

何故なら立花藤兵衛は仮面ライダーの先生であり…父親であるから…。

1時間後

地面には大の字に倒れる翔太郎の姿があった。

体中に傷と火傷があり「はあ、はあ……。」と息を切らしていた。

その隣ではボロボロに折れた後でも蓄積された電気を「バチバチ」と鳴らしているコイルがあった。

フィリップは肩を貸して翔太郎を起こした。

「出来たぜ……ライダーキック……。」

眼の前にいる藤兵衛に翔太郎はそう宣言した。

藤兵衛は「よくやったな。」と優しく微笑み2人を称えた。

第11話 Tの葛藤/仮面ライダーの仮面 Part 2 (後書き)

アクセルが大活躍の11話でした。

やはりライダーと言えばライダーキック、ジョーカーエクストリームは嫌いではありませんが…やっぱりライダーキックでしょう。

Atozでごくぶつうにライダーキックを放つジョーカーを見て、「これは誰かが教えたのでは…。」と考え藤兵衛さんから教えてもらうということになりました。

次回はXライダーです。

それではまた会いましょう。

第12話 涼子の真実！！ 決意のX2段キック！！

誰も通らないような暗い裏路地。

そこにウエザー・ドーパントとPサンダー・ドーパントが突風と共に現れた。

ウエザー・ドーパントは掴んでいたPサンダー・ドーパントの腕を離し、ガイアメモリを抜き井坂深紅郎と戻った。

「お前は何なんだよ…？ 僕の味方なのか…？」

Pサンダー・ドーパントは井坂が敵か味方か分からず怯えたようにそう聞いた。

するとそれを聞いた井坂は「安心してください。」と答えた。

「私はガイアメモリを専門としている医者です。貴方の体を見てあげようと思ひましてね…。」

Pサンダー・ドーパントは「本当なのか？」と聞いた。

何故医者が急に現れたのかは分からないが、自分は体に差した2本のガイアメモリが抜けないという危機的状况に陥っていた。

そんな状況でガイアメモリ専門の医者が現れたとならば正に地獄で仏であった。

Pサンダー・ドーパントはその変身を解き桑田悟へと戻った。

だが右腕は青いドーパントの腕のままであり、更には足と顔半分までがドーパントの状態になっていた。

「助けてくれえよ。僕は…凄…凄…苦しんだよ…。」

助けを求めるように井坂へとしがみ付いた。

井坂は自分にしがみ付いた右腕：Pサンダー・ドーパントの腕を握り興味深そうに見始めた。

「人でもドーパントでも無い中間的な状態……。これは素晴らしい……。奇跡のPのメモリだからこそ出来る事なのかもしれませんが、これはとても興味深い……。」

井坂は園咲家で流兵衛からPのメモリ：パラレルメモリについて説明してもらった。

パラレルメモリとは本来なら平行世界へと飛び立つ為のメモリ。しかしパラレルメモリはそれ以外の能力は全く無く、本当に平行世界へと行く為のメモリであるという事であった。

だが桑田はコネクタを介せずパラレルメモリを使い、あるうかことにパラレルメモリを抜かずにサンダーのメモリを使ってしまった。その為パラレルメモリは暴走し、サンダーメモリと影響を出し合ってしまった。

その結果が互いの地球が1つになろうとしているこの状況であった。井坂は既にパラレルメモリが暴走している事には気付いていた。

「暴走知った結果が2つの地球を融合させ時間まで無くしてしまうとは……。恐らくいまこの風都まちは2つの地球の中間が造り出した未知の空間になっているんでしょうねえ……。」

フィリップさえも気付いていなかったが、いま風都は風都であって風都ではなかった。

今風都は存在してはいけないうちな空間となっていたのであった。それこそが翔太郎や敬介が感じた違和感の正体であった。

「この状態が続いて行くとどうなるんでしょうねえ……。」

思わず口に出してしまった。

もしこのままの状態が加速したらどうなるのか？

更にガイアメモリを追加したらどうなるのか？

内から湧き出る好奇心が抑えられなかった。

「ゴクツ」と唾を飲み込むと井坂はある事を話し始めた

「貴方の苦しみは仮面ライダーを倒すことで解放されますよ…。」

「ほ、本当か!？」

井坂は「ええ、本当ですとも…。」と不気味に笑いながら答えた。

これは桑田の「仮面ライダーを倒してヒーローになりたい。」という願望を利用した嘘であった。

先程の戦いを見れば仮面ライダーに恨みを持っているという事は手に取るようにわかった。

そこからこの嘘を使ったのだ。

「もちろん貴方がやられるとは思いませんが、仮面ライダーは侮れません。どうです？ 更にメモリを追加してみてもは。」

井坂は桑田に数本のメモリを渡した。

それは桑田が落としたガイアメモリであった。

数本は研究員が持つていつてしまったり、何かの生物が使用してしまったりしたが、これは井坂が見つけた物であった。

GOD研究所で落としたが筈だが、地球が融合している影響か？

これらは園咲家の庭で偶然見つけたものであった。

桑田はそれらのガイアメモリを手を取った。

「で、でも…。これを差したら僕の体が…。」

「心配いりません。仮面ライダーを倒せば元通りになりますよ…きつとね。」

ガイアメモリを使うのを戸惑う桑田に井坂はそう答えた。その言葉で桑田の中で「仮面ライダーを倒し、正義のヒーローになる。」という決心が付いた。

桑田は「わかったよ。」と答えた。

「僕は仮面ライダーを倒すよ…絶対に…。」

そう答えた瞬間桑田の後ろに謎の空間が笑われた。

桑田はその中に吸い込まれるように入ってしまった。

後には裏路地には井坂しか残っていなかった。

「成程、この地球なら自由に移動できるというわけですか。」

そう呟くとPサンダー・ドーパントのさらなる能力を見るため、井坂は桑田を追い掛けた。

風都海岸

敬介はバイクを走らせ風都海岸に到着した。

波立つ青い海から「ザザア」と快い音が聞こえてきた。

例え別の地球であつても海は変わらないんだな、と考えてしまった。

そして海岸を見渡すと、紫色のドレスを着た女性が目に入った。

それは紛れもなく水城涼子であった。

涼子はただ「ジツ」と海を見ていた。

敬介はバイクから降りるとゆっくり涼子に近づいて行き、その隣に立った。

「昔は嫌な事があるとよく2人で海を見に行つたもんだな。」

まだ2人が恋人同士であつたとき、敬介が海好きという事もあり、嫌な事が起こる度に海に来て慰め合つていた。

今回も、もしあの水城涼子が本人ならば海にいる筈…。

そう考えて敬介は海に来たのであつた。

そしてやはり涼子は海にいた。

これで目の前にいる水城涼子が本人であるという事がわかつた。

だが涼子は敬介の言葉に何も答えなかつた。

「涼子…いや、涼子さん…。」

呼び捨てで呼ぼうとした敬介であつたが、直ぐに言いなおした。

これは昔のようには戻れないということを実感しているからかもしれない…。

「あれから色々あつたよ…。人間じゃないって罵られたこともあつたし、何度も死にそうになつた時もあった…。あの日から俺の人生は一変しちゃつたからな…。」

仮面ライダーになつてからの敬介の人生は苦難の連続であつた。

水城涼子が裏切つたあの日から、敬介は普通の人間としての人生を失くしてしまつたのであつた。

「だけど…その事を恨んではないよ。逆に今はGODを倒し世界に平和を取り戻すのが俺の使命だと思つている…。」

敬介の言葉に嘘は無かつた。

最初は涼子を憎み、人を恨んだが、今はそんな気持ちは微塵もなかつた。

敬介は「それで…。」と言葉を続けた。

「教えてくれないか？ 何で涼子さんが生きているんだ。俺は確かに君がこの世を絶つものを見ていた筈だ…。」

あの時確かに、涼子は敬介の前でGODの裏切り者として処分された筈であった。

ならば何故この場にいるのか？

それを尋ねると、重く口を閉ざしていた涼子は話し始めた。

「私は…あの時確かにGODの裏切り者として、体内爆弾で命が絶えました。でも…GODにとっては全身改造を受けた私は、他の物と同じ怪人に過ぎなかつたんです。だからこそXライダー打倒のために復活手術を受けて甦つてしまつたんです。」

GODはXライダー打倒のために水城涼子を復活させようとしていたのであった。

元恋人同士とあらばXライダーも油断する筈…。

そう考えていたのであった。

「本来は脳改造手術も受けて敬介さんの事…いいえ、昔の事を思い出せなくなっていた筈なんです。でもあの時突然謎の人物が研究所に襲つてきたんです。研究所は滅茶苦茶にされ何体もの怪人が脱走してしまいました。幸いにも無事だった私は手術の途中だった為に記憶を失い、自分が誰かもわからず逃げ回っていたんです…。それで…翔太郎さんに助けられて…。」

涼子は全てを敬介に話した。

自分が蘇つた真実も…。

あの晩起こつた悪夢も…。

そして翔太郎とフィリップに助けられたことも…。それを聞いた敬介は悲しそうに「涼子さん…。」と呟いた。

「ねえ敬介さん。あの時は本当にごめんなさい…。命令だったとはいえ貴方達親子を巻き添えにしてしまつて…。」

涼子はインターポール国際刑事警察機構の命令を逆らえず、結果として神親子を殺す原因となつてしまつた。

その事を謝罪すると敬介は「もう、いいんです…。」と答えた。

「さつきも言つた通り、俺は今の改造人間からたに満足している…。だから謝らないでください。」

力強い言葉でそう答えた。

それを聞いた涼子は「ありがとう…。」と言い、その場を去ろうとした。

敬介は急いで涼子の腕を掴み「何処に行くんですか？」と聞いた。

「敬介さん、私達はもう昔のようにには戻れないの…。それにGODは脱走した私を探しているはずです…。ここにいたら貴方に迷惑をかけてしまう。」

もう敬介にはもう迷惑を掛けたくはなかつた…。

その事から急いで敬介の前から立ち去ろうとしたのであった。だが敬介は首を横に振り「そんな事は無い。」と答えた。

「迷惑なんてかかるものか…。それに…昔の様にはいかななくても一緒に生きていける筈だ…。」

昔のように恋人同士というのは無理かもしれない。

それでも同じ改造人間として一緒に生きていける筈だ…。
そう考えたのであった。

涼子は「敬介さん…。」と泣きそうになりながら呟いた。
裏切り者の自分を受け入れてくれるという事が嬉しかったのであつた。

敬介の方を振り返り、その言葉の返事を伝えようとすると不気味な笑い声が響き渡った。

「ブルウウウン、ブルウウウウン！！ 話は聞かせてもらったぞ、神敬介、それに裏切り者の死に損ない水城涼子！！」

声の方を見てみると浜辺の向こうには馬の下半身と人間の上半身を併せ持ち、体には銀色の鎧を纏いGODと描かれたベルト巻いた、GOD神話怪人のケンタウロウスが立っていた。

ケンタウロウスはXライダーが勝負を放棄して、藤兵衛のところへと向かった後からずっとXライダーを追っていた。

そして遂にここで発見する事が出来た。

しかも一緒にいる水城涼子はGOD研究所を襲った犯人の顔を見た事がある様子であった。

これでXライダーを始末し、研究所を襲った犯人を見つけ出せば、憎き室長にひと泡吹かせる事が出来る…。

そう考えたケンタウロウスは「殺れえええ！！」と命令を下した。

すると「ジー、ジー！！」の掛け声とともにケンタウロウスの横に弓と矢を持った戦闘工員が現れた。

戦闘工員たちは矢の標準を敬介に合わせていた。

涼子は自分のせいでこうなってしまった…、と考えてしまい「敬介さん…。」と呟いた。

だが敬介は慌てる様子も見せず、腰にベルトを出現させ、ゆっくりとパーフェクターとレッドアイザーに手をやった。

「涼子さん…いや涼子…。俺は次こそ君を守って見せる…。」

決意の言葉を涼子に言うと、敬介は右手にレッドアイザーを左手にパーフェクターを握り頭より高く上げた。

「セタアアプ!!!」

その叫び声と共に敬介の体を光が包んだ。

その光はケンタウロウスでさえ思わず目を瞑ってしまう程であった。光が収まるとそこには敬介の姿は無かった。

銀色のスーツを身に纏い、黒マフラーを靡かせる戦士が立っていた。

「仮面ライダー…X…。」

涼子は目の前に立つ戦士の名前を思わず呟いてしまった。

仮面ライダーX…Xライダーはベルトにライドルを引き抜いた。

「エックスライダーアアア!!!」

手に持つライドルホイップで目の前をX型に斬り力強く名乗りを上げた。

その力強い声に戦闘作業員たちは一瞬怯んでしまった。

「ええええい、怯むなあああ！！ Xライダーを殺せええ！！」
「くくくジー！！」

ケンタウロウスの命令に従い、戦闘作業員たちは矢を引き放った。
Xライダーは迫って来る矢に動じず、手に持つライドルホイップで
矢を全て切り落とした。

「行くぞおお！！」

そう叫ぶとXライダー戦闘作業員に向かっていった。

「ライドルスティック！！ とあっ！！」

「ジー！？」

ライドルホイップをライドルスティックに変えると戦闘作業員を次
々と蹴散らしていった。

戦闘作業員程度ではXライダーに敵う筈がなかった。

ケンタウロウスは弓と矢とは別のもう一つの専用武器である斧を手
に持ちXライダーに向かっていった。

「死ねねええい、Xライダーアアア！！」

「くっ！？」

降り降ろされる斧をライドルスティックで受け止めた。

身動きが取れない状態であったが、ケンタウロウスは前足でXライ
ダーを蹴り飛ばした。

Xライダーは地面に倒れたが直ぐに立ち上がり「なんてパワーだ…。
」と驚いた。

「驚いたかXライダー？ 俺は今までの神話怪人とは違う。今日がキサマの命日となるのだあ！！」

ケンタウロウスは再びXライダーに向かってきた。

Xライダーはライドルスティックを握り直し、向かい入れる態勢に入った。

「カキーン、カキーン」と何度もライドルスティックと斧がぶつかりあった。

一向にXライダーに斧が当たらなくケンタウロウスに焦りが見えてきた。

Xライダーはその隙を突き得意技 Xパンチ を浴びせた。

ケンタウロウスは後ろによろけてしまった。

「今だ… エックスキイック！！」

簡略版Xキックをケンタウロウスに喰らわした。

ケンタウロウスの鎧には「ピシッ」と亀裂が入った。

「くっ… やるなあXライダー。だがこんなものでは俺は倒せんぞお！！」

ケンタウロウスは斧を捨て、馬である強靱な足を使い迫って来た。

Xライダーは以前のようにライドルスティックで止めるが、あの時よりも力が増しておりライドルスティックでは抑えきれず地面に倒れてしまった。

ケンタウロウスは倒れたXライダーに容赦なくキックの連打を浴びせた。

誰が見てもXライダーの絶望的状况であったが、Xライダーの瞳は勝利を確信していた。

Xライダーはライドルスティックを握り直し先端をケンタウロウス

顎に向けた。

「ライドルロングポール!!」

そう叫ぶとライドルの形態が変わり、ライドルは10メートルに伸びケンタウロウスの顎に見事直撃した。

ケンタウロウスは宙に吹き飛んだ。

Xライダーケンタウロウスを追って高くジャンプした。

「エエエエックス…。」

ライドルを使い空中で何度も大車輪をすると、ケンタウロウスに向かってキックの体勢で突っ込んだ。

「2段キイック!!」

1発目のキックは顔に、2発目のキックは鎧を纏った腹に喰らわした。

キックを受けた鎧は音を立てて崩れ落ち、さらけ出された原に見事キックが着激した。

この技こそ対マツハ・アキレスの際に藤兵衛と共に編み出された必殺技 X2段キックであった。

その技を受けたケンタウロウスは地面に真つ逆さまに落ち、フラフラと立ち上がった。

「我が偉大なるGODに栄光あれええ…!!」

そう叫ぶと力尽きたように倒れ、爆発していった。

Xライダーの完全勝利であった。

「おおい、Xライダーアアア！！」

それと同時に自分を呼ぶ声がした。声の方を振り向くと、ジープに乗った藤兵衛とフィリップ、それにハードボイルダーに跨る翔太郎がいた。

特訓を終えた彼らは敬介と涼子を探してこの場にやって来たのであった。

Xライダーは「おやつさん！！」と手を振った。

勝利に浸っていたXライダーは気付いていなかったが、涼子は自分に近づいてくる存在に気付いた。

「あ、あの男性は…。」

忘れる筈がなかった。

その男こそGOD研究所を襲い、今回の事件の黒幕であったからであつた。

事件の黒幕 桑田悟 はPサンダー・ドーパントになっている右腕をXライダーに向けた。

「仮面ライダーを倒せば…僕がヒーローだああ！！」

右腕から強烈な電撃が放たれた。

それに気付いたXライダーであつたが、今からでは避けられない。殺られる…。

そう思つた瞬間涼子が自分の前に出た。

「ウワアアア…キヤアアアアア！！」

電撃はXライダーを庇い前に出た涼子に直撃してした。

電撃が収まると涼子は崩れ落ちるようにその場に倒れていった。

翔太郎とフィリップ、それに藤兵衛は驚いたようにそれを見ていた。

「涼子おおおおお!!」

Xライダーは倒れていく涼子の名前を叫んだ。

第12話 涼子の真実！！ 決意のX2段キック！！（後書き）

これで12話終了です。

ケンタウロウスさんは…オリジナル怪人でありながらこれで終了です。

2話と12話しか出さないオリジナル怪人って…。

今回はアクセル& の再生怪人との戦いです。

それではまた会いましょう。

第13話 共闘するR / お前の罪を数えろ

風都繁華街

風都では神話怪人と戦闘作業員、それにドーパントが突然現れ人々を襲っていた。

あまりのも行き成りの事に住民たちはパニックになっており、「きやああああ！」と悲鳴を上げながら逃げ回っていた

怪人から人々を守るため、風都署の超常犯罪捜査課の刑事が警察官を指揮をし人々を守っていた。

刑事や警察は拳銃で応戦するが、銃など怪人に効くわけもなく怪人達は彼らに構わず暴れていた。

「駄目ですよおこれ！！ こんな時に課長は何やってるんですかあ！！」

超常犯罪捜査課にの刑事 真倉俊 は拳銃を構えながらそう嘆いた。隣では同じく刑事である 刃野幹夫 は「ほ、本当だよなあ。」と言いながら、頭部は巨大な角を生やしたライオン、胴体は山羊、尻尾は大蛇という文字道理の神話怪人^{キマイラ}合成獣の前に立っていた。

…何故か拳銃持たずに。

「何だ、や、やるのか？ 言っとくけどあれだぞ。お、俺のナックルパンチが火を拭くぞ…。」

腰もガクガクになりながらそう言った。

誰がどう見ても勝てない事は目に見えていたが突っ込みを入れる人物がこの場にはいなかった。

…彼女を除いては…。

「めっちゃくちやへっぴり腰やんけ!!」

突然現れた亜樹子は「少しは真面目にやれや!!」と書かれたスリツパで刃野の頭を叩いた。

亜樹子の行き成り登場で驚いていた刃野であったが、次の瞬間キマイラが真赤なバイクに轢き飛ばされた。バイクにの男はヘルメットを外した。

「この場は俺がやる。お前達は他の警察官と一緒に住民の避難を頼む…。」

バイクの男 照井竜 は、バイクから降りながら刃野と真倉にそう命令した。

2人は「わかりましたあ。」と返事をして、他の警察官と共に住民の避難を始めた。

照井は彼らが居なくなるのを見ると、亜樹子を自分の側に近寄った。

「所長…安全な場所に隠れてろ…。」

「うん、わかったよ。」

亜樹子はそう返事をする物陰に隠れた。

それを確認すると、照井は辺りを見回し怪人の数を見た。

怪人達は戦闘工員や再生神話怪人、それにドーパントなど遭わせて30体以上はいた。

それを見ると「一気に決める…。」と言い、アクセルドライバーを腰に装着した。

「変…身っん!!」

ACCELE

アクセルメモリを差しこみ、アクセルドライバーの右ハンドルを回した。

バイクのエンジン音が鳴り止むと同時に照井の姿は、仮面ライダーアクセルへと変わっていた。

「振り切るぜ…。」

そう宣言するとエンジンブレードを握りキマイラへと向かっていった。

「仮面ライダーかぁ。前の奴とは姿は違うが、今度こそ地獄に送ってやる。」

キマイラはマツハ・アキレスと同じで意思のある再生怪人であった。アクセルが向かってくる事に気付いたキマイラは口から炎を吐いた。その炎は1万度という高熱であり、流石のアクセルでも当たったら一溜まりもなかった。

咄嗟に身の危険を感じたアクセルはその炎を避けた。

地面に当たった炎はその高熱で道路をドロドロに溶かしていた。

避けなければどうなっていたか…。

そう恐怖を感じてしまった。

近距離ではやられると悟ったアクセルはエンジンメモリをエンジンブレードに差し込んだ。

ENGINE…JET

「はぁっ…!」

エンジンブレードからミサイルの様にエネルギー弾が発射された。それは見事キマイラに直撃し、キマイラは後ろに倒れてしまった。次で決める…。

そう考えた瞬間、背中に強烈な痛みが走り、アクセルは吹き飛ばされてしまった。

立ち上がりながら後ろを確認すると、過去風都を襲った鼠色の球体型のバイオレンス・ドーパントが立っていた。

更に隣には赤い鬘と鬼の様な顔が特徴的な神話怪人・ヘラクレスが盾と棘の付いた棍棒を持ちながら構えていた。

どちらも力自慢の怪人であった。

「2体掛りか…。道理で効くはずだ…。」

そう呟きながら体を起こした。

それと同時にキマイラ迫って来た、接近戦も得意としているようでその動きに対応するので精一杯であった。

更にはバイオレンス・ドーパントとヘラクレスの攻撃までもが襲いかかって来た。

アクセルは次第に追い詰められてしまう。

「竜君、頑張つて!!！」

そんなアクセルを亜樹子は物陰に隠れながら応援していた。

すると次に再び叫び声が聞こえてきた。

「死ねえい」

「貴方が死になさいよ!!！」

「この野蛮人があ!!！」

亜樹子はその方向を見てみると、怪人ではなく警官や住人達がスコ

ツプやほうき、果ては包丁や拳銃といった武器を持ち人間同士で戦い…いや、殺し合っていた。

「何これ…私聞いてない…。」

怪人達の猛攻に追い詰められるアクセル…。

一向に減らない怪人達…。

そして人間同士が殺し合っている…。

この状況に亜樹子は頭が一杯であり、後ろから包丁を持った男には気付いていなかった。

「お前も死んでしまええええ!!！」

「うわあ…きゃああああ!!！」

亜樹子は頭を押さえてしゃがみ込み悲鳴を上げた。殺されてしまう…。

そう感じた瞬間男は別の男に殴られてその場に倒れこんでしまった。亜樹子を助けた青いスーツを着た男は「大丈夫かい。」と手を差し伸べた。

「ありがとうございます…。」と亜樹子はその男の手を握り立ち上がった。

「この男は神話怪人パニックの音色で殺人鬼になってしまったんだ…。ほら、耳を澄ませば聞こえるだろう…。」

亜樹子はスーツの男に言われる通り耳を澄ませてみた。すると微かにだがフルートの様な音色が聞こえた。

「この距離なら音を聞いても害は無い。そしてパニックは人達が暴れまわる近く…あそこにいるんだ。」

スーツの男はあるビルを指さした。

ビルの屋上では男の言う通り巨大な2つの角と、青い悪魔の顔に赤い体の神話怪人・パニツクが楽器を拭いていた。

だったら早く止めないと…。

そう思った亜樹子であったが、アクセルは3人の怪人に苦戦を強いられており、自分が行った所でどうなるというのか？

第一屋上まで行くのに時間がかかってしまう…。

そう考えているとスーツの男は緑色のバイクから青い仮面を取り出し、怪人達に向かっていった。

それに気付いた肩から布を被っている1つ目の神話怪人・キクロプスが近づいてきた。

「待てえい、キサマ何処に行くというのだ？ それとも俺に殺されるに來たのかあ？」

キクロプスが高らかに笑いながらそう言った。

亜樹子はスーツの男に「危ないよお。」というが、スーツの男は構わず近づいて行った。

「神話怪人キクロプス、過去子供達を冷凍させ来るべきGODの奴隷にしようとした、アルファ作戦の責任者。その瞳からはレーザーを発射する事が出来る…。」

「何い！？ 何故それを知っている。」

驚くキクロプスであったがスーツの男「ニヤツ」と笑い、「調べたからだ…。」と答えた。

「俺は今回の事件を異変に気付いた時からずっと調査していた。GOD研究所でお前達の資料を見つけた。資料は暗号で書かれていた

が、デストロンの科学者であつた俺にはあの程度の暗号なら直ぐに解読する事が出来た。」

「デストロンの科学者だと…？ まさかお前は！？」

キクロプスはGODの前組織であるデストロンのとある科学者を知っていた。

だがその科学者は愚かなことにプルトンロケットに乗り込み絶命したとなっていた。

その為彼がここにいるという事が信じられなかった。

するとスーツの男は「そのまさかだ…。」と答えた。

「あのとき死んだのはデストロンの科学者であつた俺だ。今の俺はもうデストロンの科学者ではない。今の俺は…。」

スーツの男は手に持つ青い仮面を被つた。

その瞬間黒い戦闘服が男の体を包んだ。

それと同時に腰に赤い帯のベルトが出現し、ベルトの4つのランプが端から順番に光つた。

銀色のブーツと手袋をしており、首には黄色のマフラーが巻かれていた。

他の仮面ライダーとは違い口元が露出した青い仮面には2本の触角、それと赤い瞳が光り輝いていた。

「仮面ライダー4号…ライダーマンだ！！」

スーツの男は元デストロンの科学者であり復讐の鬼 結城丈二であつた。

デストロンを裏切りライダーV3との出会いが彼を変え、自分の全

てを犠牲にして世界を救った4番目の仮面ライダー　ライダーマンであつた。

ライダーマンはブルトンロケット共に絶命したと思われていたが、ライダーマンは生きていた。

その姿を見た亜樹子は「また新しい仮面ライダー……。」「と驚いた。ライダーマンはキクロプスに一気に近づいた。

「パワーアーム!!!」

ライダーマンの右腕はアタッチメントと呼ばれるライダーマン唯一の機械の腕であつた。

アタッチメントは戦闘能力が低いライダーマンの力を補う為の武器であつた。

ライダーマンの声に対応するように右腕は巨大な爪状の腕　パワーアーム　が装着された。

「ヤアアアアア!!!」

「う…うぎゃあああ!!!」

キクロプスの巨大な瞳にパワーアームを喰いこませた。

弱点である瞳を破壊されたキクロプスはその場に倒れ爆発していった。

「確かに俺は戦闘能力が低い…。だが弱点を突けば怪人達おまえらを倒す事が出来る…。」

亜樹子はそれを見て「凄い…。」と呟いた。

ライダーマンは次にパニックに目をやった。

「ロープアーム!!!」

右腕がパワーアームから先端が鎌状の武器　ロープアーム　に変えた。

ロープアームの先端を屋上のパニックに合わすと、鎌状の先端が発射された。

それは文字通りロープになっており、先端と腕に装着されたロープアームはロープで繋がっていた。

先端は屋上のパニックの腕に見事絡みついた。パニックはそれに気付きライダーマンを見た。

「その距離から落ちたら幾らお前でも一溜まりもないだろう？」

「…!？」

ロープを一気に引きパニックを屋上から落とした。

屋上から真つ逆様に落ちたパニックは、地面に激突し爆発していった。

「あれ…？　俺達何をしてたんだろう？」

「うわあっ!？　何で私包丁なんて…。」

「と、とにかくみなさん、避難してください。」

パニックに操られていた人々は正気に戻ると、警官の指示に従い逃げていった。

ライダーマンはそれを見るとアクセルに向かって走っていった。

「スウィングアーム!!」

アタッチメントは次に丸い棘が付いた鉄球　スウィングアーム　へと変化した。

それを鎖鎌の分銅の要領で「ブンブン」と振り回すと、アクセルを

襲うキマイラへと投げた。

キマイラ突然の攻撃によるけってしまった。

他の2体も突然の事に驚いていた。

アクセルはその隙を見逃さなかった。

ENGINE: MAXIMUMDRIVE

「絶望が：お前達のゴールだ！！」

エンジンブレードで周囲を大きくA字型に切り裂いた。

それはキマイラ、ヘラクレス、バイオレンス・ドーパント、それに辺りにいた戦闘作業員やドーパント・神話怪人までも巻き込み切り裂いた。

これがアクセルの必殺技 ダイナミックA^{エクス}であった。

怪人達は一齐に爆発していき一気にその数を減らしていった。だがまだ怪人達を全滅させてはいない。

ライダーマンはアクセルと背中合わせになった。

「助かった。お前が：所長が言っていたXライダーか？」

「いいや、違う。俺はライダーマン：Xライダーの先輩だよ。」

それを聞いたアクセルは「そうか：。」と呟いた。

アクセルに神話怪人・牛男ミノタウロスが襲いかかって来た。

だがアクセルは動じずエンジンブレードでミノタウロスを切り裂いた。

ライダーマンはスウィングアームを駆使して、戦闘作業員を次々と倒していった。

「この場が片付いたら一緒にXライダーの元まで行こう。この空間では運が悪ければ全てが終わってしまう：。」

「この空間では…？ 何の事か分からないが…まずはこいつらを片付けるという事はわかった。」

アクセルとライダーマン…どちらかが「行くぞ…。」と言うと2人の仮面ライダーは同時に怪人達に向かっていった。

今ここに一時は復讐を誓いあった仮面ライダー同士が揃ったのであった。

風都海岸

ケンタウロウスを倒したXライダーだが、突如現れた桑田悟。桑田はXライダーを殺そうと電撃を放つが、水城涼子がそれを庇ったのであった。

「涼子おおお！！！」

Xライダーはしゃがみ込み倒れた涼子の体を支えた。

涼子は「け、敬介…さん…。」と弱々しく呟いた。

その眼は既に焦点を捕えておらず敬介を見ていなかった。

それに徐々に弱くなっていく呼吸…。

この感覚をXライダーは知っていた。

これは人が死ぬ前兆であった。

「涼子…何で…何で…？」

何で俺を庇ったんだ…。

そう言おうとしたが言葉が出なかった。

次は絶対に守ると決めたのに…。

油断していた俺が悪かったんだ…。

そう自分を責めていた×ライダーであったがそれに気づいた涼子は小さな声で話し始めた。

「敬介…さ…ん。あ、貴方はし、死んじゃ駄目…よ。だって…か、か、仮面…ダ…イダアはゴ…ドと戦うん…でしよう？」

涼子は手探りで×ライダーを探し、その仮面の頬の部分に自分の手を当てた。

涼子は今できる必死の笑顔をつくっていた。

翔太郎とフィリップ、それに藤兵衛が敬介の隣にやって来た。

だが×ライダー以外は何も言おうとしなかった…いや、何も言う事が出来なかった。

「ねえ…敬介さん。」

「もう、喋るな！！ それ以上喋ると…。」

そう言い掛けたが涼子は首を横に振った。

自分が長く持たないとは分かっていた。

だからこそ伝えなくてはいけない事があった。

「あの…男性ひとがけ、研…き、究所を襲ったの…。か、彼がこのじ、事件の黒幕…。」

次の瞬間涼子は口から大量の血を吐いた。

×ライダーは「もういい、喋らないでくれっ！！」と叫んだ。

だが涼子は穏やかに微笑んだ…それは死期が近づいた人物が出す笑みであった。

「ね、ねえ…け、敬介さん…い…つかあんな日があった…たんだなあ…って笑いあえる日が…き、きたでしよ…う…。」

「涼子？ 涼子おおおおおおおおおおお！！！！」

そう言い残すとXライダーの仮面に振れていた腕は地面に落ち、力尽きたように何も喋らなくなった。

Xライダーの悲しみの叫びは波の音を消し去る程であった。

「はははははははは、別の奴殺しちゃった…でもそいつも仮面ライダーの仲間だ機械だったんだよねえ…死んで当然かあ…。」

嘲笑う桑田。

その言葉を聞いたXライダーは涼子をそつと地面に置きゆっくりと立ち上がった。

「おやっさん…涼子を頼みます…。せめて今度こそちゃんと弔って上げたい…。」

「わかった…。」

藤兵衛は力強く頷き涼子をおぶった。

桑田は狂ったように笑い続けていた。

「弔う？ 機械の女性をお？ はははははははは、笑っちゃうねえ、でも、まあ正義のヒーローの僕に殺されたなら本望かもねえ！！！！」

敬介はその言葉を聞きライドルを引き抜こうとした。

だがそれを遮る言葉があった。

「お前は正義のヒーローなんかじゃねえ！！　メモリに魂を…人間としての誇りを売っちまった悪魔だ！！」

それは翔太郎であった。

桑田はその言葉を聞いて「悪魔あだとおお？」と怒ったように呟いた。

「取り消せえ！！　僕は悪魔じゃない、正義のヒーローだ！！」
「取り消さねえ、誰が何と言おうが悪魔だ。」

桑田の言葉にも動じず翔太郎は「悪魔」と言う言葉を取り消さなかった。

長年正義のヒーローを夢見ていた桑田にとってはこの言葉が許せなかった。

「本当の正義のヒーローってのはな。何もかも犠牲にして愛と正義のために戦う男だろ、例えば大切な人を失ってもな…。お前は独善しか見れなかった唯の悪魔だ！！」

この言葉は翔太郎が自分に言い聞かせていた言葉かもしれない…。彼も恩人とも呼べる大切な人を失っているからであった。

「お前みたいなのは俺が倒すぜ…。」

「翔太郎、そこは俺じゃなくて…俺達にするべきじゃないかな？」

「ああ…そうだったな。…俺達で終わりにしようぜ、この事件を…。」

2人の腰には既にWドライバーが装着されていた

そして翔太郎とフィリップはそれぞれのガイアメモリを握っており、

それをWドライバーに差し込んだ。

CYCLONE JOKER

「変身!!」

CYCLONE / JOKER

翔太郎の体を旋風が包み込み、それと逆にフィリップは意識を失い倒れたがその体を藤兵衛が支えた。

旋風が収まると、黒と緑の風都の守護者：仮面ライダーWサイクロンジョーカーが立っていた。

Wはゆっくりと左腕を桑田に向けた。

「さあ…お前の罪を数えろ!!」

Wがそう宣言すると同時に、この事件の最終決戦が幕を上げたのであった。

第13話 共闘するR / お前の罪を数える (後書き)

2日連続投稿はきつかった…。

今回は共闘するライダー達です。

アクセルはライダーV3にしようか最後まで迷ってたんです…。

ただ風見と一文字はTV本編で、本郷…というか1号ライダーは映画で…。

で…ライダーマンは…今作で、みたいな感じですよ。

ライダーマンが強いのは再登場のお約束と言う事で…。

そして…おのれえデイケイドオオオオオ!!

貴様の影響で翔太郎にまで影響を与えてしまった。

…兎に角次回は最終決戦ですよ。

恐らく後2話で終わりですよ…。

第14話 決めろ！！ 2人のX！！ 決着のライダーキック！！

涼子を殺し、嘲笑う桑田にWが言い放った言葉…。

それを聞いた桑田は頭を抱え、苦しそうに「わからない…わからない…。」と何度も呟いていた。

「僕は悪魔じゃない…罪なんて無い…、僕は…正義のヒーローなんだあああああ…！」

PARALLEL…THUNDER

叫び声と同時に桑田の姿はPサUNDER・ドーパントへと変わった。感情の高まりから、その姿は全身が真赤になり体中から「ジュー」と煙が出ていた。

だがこれで終わりではない。PサUNDER・ドーパントの腕には6本のガイアメモリが握られていた。

「僕はお前たちを倒して苦しみから解放されて…真の正義のヒーローになるんだ…。」

『まさか、更に6本のメモリを使用しようとしているのか？ 止める、それ以上のメモリの使用は危険だ…！』

フィリップはPサUNDER・ドーパントの行動に気付きそう注意を促した。

だがその言葉はPサUNDER・ドーパントには届かない…。

「これで…更なる力を…ヒーローの力を…手に入れる…。」

S P I D E R

M A G M A

I C E A G E

T R I C E R A T O P S

B E A S T

A R M S

スパイダー・マグマ・アイスエッジ・トライセラトプス・ビースト・アームズ…。

それぞれ能力が異なる6本のガイアメモリを全て自らの腕や体に差し込んだ。

その瞬間Pサンダー・ドーパントの体が光り輝いた。

「ああ…力が…力が漲るよおお…。」

辺りを突風が吹き荒れた。

2人の仮面ライダーは突風に吹き飛ばされずに踏ん張っていたが、涼子とフィリップを背負っている藤兵衛は何とか地面にしがみ付きこらえていたが、今にも吹き飛ばされそうになっていた。

もう駄目だ、藤兵衛が吹き飛ばされてしまう…。

そう思った瞬間風は止んだ。

だが目の前では巨大な異形の怪物が待ち受けていた。

「カメンライダーアアアア… コロスウウウウ… ヒーロオオオオノ
ボクガアアアア！」

下半身は蜘蛛に酷似しており、上半身は人に近く、先程Xライダー
と対峙したケンタウロウスと形は酷似していた。

だが酷似しているのは形だけ…。

姿は全く別の… 体内にあったパレレルとサンダー… 2つメモリが新
たな6本のガイアメモリと結合し暴走した姿であった。

全長20メートルはあり、赤をベースに青や黄色、それに黒と様々
な模様が入った巨大な体…。

上半身に生えるのは、差したガイアメモリのドーパントとの腕が1
本ずつ… 計8体分のドーパントの腕が右と左で4本ずつ…。

下半身には腕と同じようにドーパントの足がそれぞれ2本ずつ… 計
16本…。

悪魔の様な顔に何十個もの瞳を持っており、その瞳は「ギロツ」と
全て仮面ライダーを捕えてあった…。

何百本も牙が生えた口からは「ハアアアア」と巨大な呼吸音の後
に、獣の様な叫び声を上げた…。

この怪物に名前などは無い…。

だがあえて名付けるとするならば、桑田の正義の念の暴走から生ま
れた… ^{ジャステイス}歪んだ正義・ドーパントと名付けよう。

ジャステイス・ドーパントにもはや自我などは無かった。

この怪物にある物は、仮面ライダーへの憎悪と正義への憧れだけで
あった。

ジャステイス・ドーパントは巨大なその腕で仮面ライダーを潰そう
とばかりに降り下ろした。

間一髪で避けたXライダーとWであったが、砂浜の深々と挟れてお
りその力の強さを証明していた。

「ああ…大丈夫だぜ。助かったぜ…。」

そう礼を言うと、2人の仮面ライダーは目の前の怪物を見上げた。ジャスティス・ドーパント

『今の火炎弾の攻撃はマグマメモリの能力…恐らく8本全てのメモリの能力を使えると考えた方がいいだろう…。』

「と言う事は…一筋縄ではいかないということか…。」

フィリップの言葉にXライダーがそう答えた。

この怪物にどうやって勝てばいいのか？

そう考えていると翔太郎が「でも…。」と喋り始めた。

「倒さなきゃならねえ…そうだろ？ フィリップ、敬介。」

どんなに相手が強大だとしても仮面ライダーは逃げてはいけない…。人類の自由と平和を守るために戦わなければいけないのであった。

『ああ、勿論…言っただろうこの事件を終わらせるってね…。』

初めにフィリップがそう答え、Xライダーは小さく頷いた。

そしてXライダーはライドルスティックを構えた。

「行くぞお！！ 翔太郎、フィリップ！！」

その掛け声と同時に2人の仮面ライダーはジャスティス・ドーパントへと向かっていった。

自分に向かってくる仮面ライダーに気付いたジャスティス・ドーパントはトライセラトックス・ドーパントの腕から光弾を発射した。

目の前に打ち出された光弾を対処するのに手一杯のWであったが、
Xライダーはそれを避けていき一気にジャスティス・ドーパントへ
と近づいた。

「ライドルロングポール!!」

Xライダーはライドルロングポールを使い棒高跳びの要領で大きく
ジャンプした。

ジャスティスドーパントの丁度頭の部分まで来るとライドルロング
ポールをライドルホイップへと変えた。

「ライドルホイップ!! とりゃあああ!!」

ジャスティス・ドーパントの額にX型に切り刻む技 X斬り を喰
らわせた。

それをまともに喰らったジャスティス・ドーパントは体を大きく動
かし苦しみがいていた。

「グオアアアアアアアア…グワアアアアアア!!」

「な…うっ!!」

ジャスティス・ドーパントの8本の内の1本の腕がXライダーを掴
んだ。

しかもそれはアイスエイジ・ドーパントの腕、腕からは超低温の冷
気が出ておりXライダーの体が徐々に凍り始めた。

凍ったところを破壊しようとジャスティス・ドーパントは腕に力を
込めた、するとXライダーから「ピキピキ」という音が聞こえてき
た。

必死に抜けようと抵抗するが体が凍っているため身動きが取れない
…、このままでは粉々に破壊されてしまう…。

TRIGGER…MAXIMUMDRIVE

「トリガー…エクスポージョン!!」

そう思った瞬間Xライダーに…いや厳密にはアイスエイジドライバーの腕に火炎放射が放たれた。

火炎放射が発射された方向を見ると、ヒートトリガーにメモリチェンジしたWが、飛行機能を持つハードタービュラーに乗りながらトリガーマグナムを構えていた。

その炎はアイスエイジ・ドーパントの腕を溶かし、しかもXライダーの凍結まで解く事が出来た。

ジャステイス・ドーパントは急の攻撃に、思わずXライダーを離してしまった。

予想以上のダメージを受けてしまったXライダーは力無く地面に激突しようとしていた。

Wはハードタービュラーを動かしXライダーの腕を掴み落下を阻止した。

「助かった…でも少しやりすぎじゃなかったか？」

「そこは大目に見てくれ、あの状況ではああするのが一番適切だった。」

軽く微笑みあうとジャステイス・ドーパントに目を向けた。

見ると先程溶かした筈のアイスエイジ・ドーパントの腕が再生し始めていた。

「おいおい…再生能力なんてありかよ…。」

翔太郎がそう呟いた。

果たして目の前の怪物を倒す方法なんてあるのか？
そう考えながらもXライダーとWは再びジャスティス・ドーパント
へと向かっていく…。

砂浜では藤兵衛がフィリップと涼子をジープへと寝かし、2人の仮
面ライダーの戦いを見ていた。

クルーザーに跨り戦いを挑むXライダーに、サイクロントリガーへ
とメモリチェンジして何発もの空気弾を撃ち出すW…。

しかしどれもジャスティス・ドーパントに致命傷となる様なダメー
ジは与えられてはいなかった。

「あんな怪物どうやって倒せばいいんだ…。」

藤兵衛はやり切れなさそうにそう呟いた。

見ているだけしか出来ない自分の無力さを呪っていた…。

しかし藤兵衛は気付いてはいなかった…。

自分の足元に近づこうとしている蜘蛛の存在に…。

これはジャスティス・ドーパントが出したスパイダーのメモリの能
力であり、1つ1つに強力な爆破機能が付いていた。

その蜘蛛は徐々に藤兵衛へと近づいて行く…、だが藤兵衛はまだ気
づいてはいない…。

ELECTRIC

「はあああ！！」

蜘蛛に向かって電撃が放たれた。

突然の事に「うお、なんだ!？」と驚く藤兵衛であったが周りの蜘

蛛に気付いた。

電撃が直撃した蜘蛛は動かなくなると自然と消滅していった。

「成程：電撃で動きを止めると言ったのはこういう意味だったのか。」

声の方向にはエンジンブレードを構えるアクセル、それに亜樹子がいた。

「あれは：アクセル、亜樹子ちゃん：それに：ライダーマンー！」

アクセルの隣に立つライダーマンを見て藤兵衛は嬉しそうに叫んだ。何故なら藤兵衛はライダーマン・結城丈二の復活を知らなかったからであった。

今まで死んだと思っていたライダーマンの登場に驚きよりも嬉しさの方が勝っていた。

3人は藤兵衛に近づいてきた。

「会長、迷惑掛けてすみません。」

ライダーマンが藤兵衛の事を会長と呼ぶ理由は、藤兵衛がライダー少年隊・会長の時の名残であった。

藤兵衛は「いいんだ：お前が生きていたなら。」と笑顔で答えた。

「話しは後だ：。結城、あいつを倒せばいいんだな？」

アクセルがそう聞くとライダーマンは「そうだ。」と頷いた。

風都で暴れる怪人軍団を倒した後、ライダーマンはアクセルに今の街が2つの地球が融合して生まれた亜空間であり、その現象は徐々に加速しており、このままでは2つの地球が完全に融合して消滅し

てしまうという事を説明した。

その現象を止める方法は1つ…目の前のジャスティス・ドーパントを倒す事であった。

アクセルはライダーマンの返事を聞くとアクセルドライバーのハンドル部分を両手で握り腰から外した。

それと同時に軽く飛ぶと、アクセルの体に2つのタイヤが装着されバイクの様な形へ変化した。

これこそがアクセルの高速移動形態 バイクフォーム であった。藤兵衛とライダーマンは驚いたようにそれを見ていた。

「ライダーがバイクになるとは…これは風見も真っ青だな…。」

「ええ…まったく。」

藤兵衛の言葉にライダーマンが苦笑しながら答えた。

亜樹子は戦いに向かうアクセルに「竜君、頑張ってね。」と応援した。

その言葉を聞くと「わかってる…。」と答え、「ブオオオオン」と爆音を鳴らしジャスティス・ドーパントへと向かっていった。

その途中大砲とキャタピラが特徴であるアクセル専用ビークル ガンナーA と連結し、アクセルガンナーへとなった。

この姿だと砲撃も可能であり今回の様な巨大な敵には都合がよかったのであった。

「会長、俺も援護に回ろうと思います。」

戦う仮面ライダー達を見てライダーマンがそう言うと、藤兵衛は他の仮面ライダーと同じように「よし、行って来い!!」と見送った。それを聞くとライダーマンは自身のバイク ライダーマンマシンへと跨り、エンジンを全開にしてアクセルの後へと続いて行った。藤兵衛と亜樹子は戦う戦士を見ながら、戦士達の勝利を祈った。

ジャスティス・ドーパントは4人の仮面ライダーを相手にしているにも関わらず一向に倒れる気配がなかった。

それもその筈、何故ならジャスティス・ドーパントにはどんな攻撃も通じていなかったからであった。

腕を切り刻んでも直ぐに生え、体に風穴を開けようがする再生する…そんな化物に様な能力を持っていたからであった。

サイクロントリガーのWはハードタービュラーを操縦し腹部の位置まで来た。

「畜生、武器が効果ねえなら接近戦だ。」

「ああ、行くよ翔太郎!!」

CYCLONE / JOKER

サイクロンジョーカーへとメモリチェンジすると、ハードタービュラーを踏み台にしてジャスティス・ドーパントへと飛び込んだ。

「カメンライダー…キエロオオオオオオ!!」

向かってくるWに気付いたジャスティス・ドーパントはサンダー・ドーパントの腕からWに向かって電撃を放った。

空中で身動きが取れないWは電撃をまともに喰らってしまった。

このままでは以前の様に負けてしまう…。

だが、Wは電撃を浴びても悲鳴1つ上げずに耐えていた。

「こ…こんなの、さっきの特訓に比べれば何ともねえ!! そうだろ? フィリップ。」

『ああそうだと…今の僕達にはこんな電撃効かない!!』

電撃に包まれるWは先程の藤兵衛との特訓を思い出しながらそう呟いた。

その瞬間ジープに乗せてあったフィリップの体を鳥の形をした自律型ガイアメモリ エクストリーム が取り込んだ。

エクストリームは電撃に包まれるWへと向かっていき、自然にWドライバーに装着された。

その瞬間辺り一面を激しい光が包み込んだ。

それは藤兵衛や亜樹子だけではなく、仮面ライダーさえも眼を瞑ってしまふ程であった。

X T R E M E

「『うおおおおおおお…はあっ!!』」

ジャステイス・ドーパントの電撃を払い、光と共に現れた戦士…。

基本カラーはサイクロンジョーカーの黒と緑のままであり、中央線の部分が開きクリスタル状のクリスタルサーバーが現れ、触角や手足のリングはX型に、ショルダーはW型に変化した姿…。

これこそ翔太郎とフィリップが1つになった仮面ライダーWの最強形態 サイクロンジョーカーエクストリーム であった。

その輝く姿に藤兵衛は「あれが…仮面ライダーWか…。」と呟いた。

「『プリズムビッカー!!』」

その声と同時に中央のクリスタルサーバーからX字型に配分された4つのマキシマムスロットを持つサイクロンジョーカーエクストリームの専用武器 プリズムビッカー が現れた。

Wは4本のガイアメモリをプリズムビツカーのマキシマムスロットに差し込んだ。

CYCLONE::MAXIMUMDRIVE

HEAT::MAXIMUMDRIVE

LUNA::MAXIMUMDRIVE

JOKER::MAXIMUMDRIVE

疾風・灼熱・幻想・切り札の4つの記憶が同時に渦を巻き…プリズムビツカーが虹色に輝き始めた。

光り輝くプリズムビツカーをジャステイス・ドーパントへと向けた。

「『ビツカーファイナリユニオン!! はああああ!!』」

プリズムビツカーから放たれる虹色の光がジャステイス・ドーパントの体へと炸裂した。

8本の腕で必死に防御するジャステイス・ドーパントであったが、その腕さえも破壊してしまった。

これが必殺技 ビツカーファイナリユニオン であった。

ジャステイス・ドーパントは苦しそうに「ギャアアアアアアアオオオオオオオ!!」と咆哮を上げた。

地面に着したWの側にクルーザーに跨ったXライダーが「やったか?」と言いながら近づいてきた。

Wは首を横に振り「いや…まだだ。」と答えた。

見てみるとジャステイス・ドーパントの体から破壊された腕に変わり新たな腕が生えてきた。

「あいつ…不死身かよ…。」

8体のドーパントの能力を使う上に、腕を破壊しても瞬時に再生する…。

しかも地球の本棚はエクストリームになっても崩壊したままであり、相手の弱点を検索は出来ない…。

どうすれば…。

そう考えているとライダーマンマシンに跨ったライダーマンが「いや、不死身などあり得ない。」と答えた。

「貴方は…ライダーマン!？」

Xライダーは藤兵衛の事からライダーマンの事は聞いていた。

だが藤兵衛の話ではライダーマンは死んだ事になっていた。

それなのに目の前にいるライダーマンにXライダーは驚いてしまった。

それに気付いたライダーマンであったが、今はそんな話をしている場合ではなく「話しは後だ…。」と言った。

「昔デストロンにいた頃、知らないとはいえ様々な怪人達の製造をしていた。その時どんなに力を強化しても、どんなに体を強靱にしても体を構成する機械を壊されたらそれでお終いだった。あれも生物ならば何処かに弱点となる部分はあるはずだ!!」

果たしてあの怪物の様なジャスティス・ドーパントに弱点などあるのか？

そう考えていると、フィリップが思い出したように『そうか…。』と呟いた。

『奴の体はその大半をメモリで構成している…。つまり奴の体のメ

モリを破壊すればその体は制御を失い崩壊する筈だ…。」

ガイアメモリが生み出したジャスティス・ドーパントを倒す方法は1つ、体の中にあるガイアメモリを破壊する事であった。しかしこの方法には問題がある。

それに気付いた翔太郎は「でもよお…。」と話し始めた。

「奴の体のどこにガイアメモリがあるかわかんねえんだぜ…、それなのに破壊するなんて出来るのか？」

そうであった。

この方法では適当な個所を破壊しても意味がない。

ガイアメモリがある位置をピンポイントに破壊しなければならないのであった。

だがフィリップは不敵に笑いながら「出来るよ…。」と答えた。

「メモリのある部分は虚像の肉体とは違い再生することは無い…：そして唯一再生していない部分…：それはXライダーが切り刻んでも再生する事が無かった…：頭だ…！」

その言葉に仮面ライダー達はジャスティス・ドーパントの頭に目をやった。

するとそこにはXライダーがX斬りで付けたX型の傷が残っていた。何故そこだけ傷が残っているのか？

それはその部分が再生しない部分…：ガイアメモリが集まる本体だからであった。

「あの個所に強烈な一撃を加えれば、奴を倒す事が出来る…。」

「成程な…。それならあの技で行くか？ フィリップ。」

「あの技かい？ どれほどの威力なのかぞくぞくするねえ…。」

翔太郎とフィリップはそう会話をすると、『君達は援護に回ってくれ。』と言いジャスティス・ドーパントに止めを刺すべくハードタービュラーに足を置き向かおうとした。

するとXライダーが「待つてくれ…。」とWを止めた。

「俺も行かせてくれ…。」

Xライダーは甦った婚約者 水城涼子 を一ジャスティス・ドーパントへ桑田悟々に殺されていた。

その為止めを自分の手で決めたい気持ちをWはわかり、左腕を差しだした。

「いいぜ、2人…いや3人で決めようぜ…Xライダー。」

「ああ、頼むぞW…。」

Xライダーは差し込まれたWの腕を握った。

2人の仮面ライダーはそのままジャスティス・ドーパントの頭に向かって飛び始めた。

ジャスティス・ドーパントはそれに気付き撃ち落とすべき、光弾を発射するがアクセルガンナーが自らの砲撃でそれらを撃ち落とした。

「悪いが…あいつらの邪魔をしないで貰おう…。」

アクセルは不敵にそう答え、その後もWとXライダーを援護し続けた。

ライダーマンはジャスティス・ドーパントの背中に回り、ロープアームを発射した。

ロープアームはジャスティス・ドーパントの頭に巻き付きライダーマンはライダーマンマシンのエンジンを全開にし逆方向に走り出し

た。
ジャスティス・ドーパントは強制的に頭を上にあげるような体制にならってしまった。

「く…何て力だ、引っ張っているこつちの手が引きちぎれそうだ…。
2人共決めるんだ!!」

ライダーマンはそう叫んだ。

WとXライダーは一定の距離まで飛ぶとハードタービュラーを踏み台にして高く飛んだ。

それはジャスティス・ドーパントの頭をも飛び越えるほど高く飛んでいた。

そしてそれぞれ片足を前に突き出し、急速に頭へと向かってく…。

藤兵衛は2人の仮面ライダーが何をしようとしているのか一目でわかった。

歴戦の勇士である1号ライダーと2号ライダーの放った技に酷似していたからであった。

藤兵衛は全ての力を振り絞り叫んだ。

「今だああ!!　ライダーダブルキックだああああ!!」

「エエエクス…キイイイイック!!」

「『ライダーアアアア…キイイイイック!!』」

Xライダーの必殺技 Xキック が、WサイクロンジョーカーX^エT
ストリーム R E M E の新必殺技 ライダーキック が、2人のXの必殺キック
が同時にジャスティス・ドーパントの頭に繰り出された。
ジャスティス・ドーパントは苦しそうに咆哮を上げ続けた。
咆哮が収まった時には2人の仮面ライダーが頭を突き破り、地面に
立て膝になっていた。

それと同時に後ろでジャスティス・ドーパントが爆発し、辺り一面
に巨大な爆風が吹き荒れた。

ジャスティス・ドーパントを倒し、仮面ライダーの勝利であった。

第14話 決めろ！！ 2人のX！！ 決着のライダーキック！！（後書き）

月曜日に更新になってしまった…。

私はライダーキックが好きです。

もう否定はしません。

そして大人数を相手にするならばやはり相手は巨大でなければいけない…。

と言う事で今回は巨大な敵との戦いです…。

不死身のやつはいないと書きましたがカイザークロウは不死身ですよね。

それと余談ですが4月1日の映画ジェネラルシャドウが出るそうなので…ただデルザーなら鋼鉄参謀がよかった…と思うのは私だけでしょうか？

一応次回で事件編は終わりです。

エレメントブレイドでした。

第15話 さらば2人のR/元に戻る地球

ジャステイス・ドーパントと仮面ライダーの戦いを見ている影があった。

海岸から離れたこの場所にまで届く爆音が巻き起こった。

それはジャステイス・ドーパントが仮面ライダーに敗れ爆発した音であった。

「メモリを8本使用した結果は自我の崩壊に、能力の暴走か…。」

影 ウェザー・ドーパント はそう言う、「失敗作ですねぇ…。」と続けた。

幾ら強い力を持っていてもそれをコントロール出来なければ意味がない…。

そう考えたからであった。

「そもそもあのような異形の存在への変身は異端のメモリの影響かもしれませんからね。平行世界の記憶を宿した…などと言うが、例え別世界へと行こうが、世界を融合させようが私の計画…いいえ、野望には全く関係がありませんからねえ…。」

「成程：怪人軍団の脱走や研究所を襲ったのも、そのメモリとやらの仕業という事だな。」

ウェザー・ドーパントがそう呟いていると、後ろから別の声が聞こえてきた。

声の主を確認しようとするが、それよりも早く「ガチャリ」という音が聞こえ、背中に銃の様な物を突き付けられた。

「キサマが主犯ではないらしいが、関係していることに間違いがな
いだろう。ならば、俺はGOD秘密警察としてキサマを殺さなけれ
ばならないな…。」

表情の無い無機質の赤い仮面にマントを纏った声の主 アポロガイ
スト は独り言のように呟いた。

最後に「恨むなよ…。」と言い背中に向けたアポロショットの引き
金を引こうとした。

するとウエザー・ドーパントは「くつくく…。」と不気味に笑い
だした。

「悪いですけどが私はここで死ぬわけにはいきませんからねえ。」
「…!？」

その瞬間ウエザー・ドーパントは後ろ向いた状態のまま手から雷を
放った。

アポロガイストは反射的にそれをガイストカッターで防いだが、数
歩後ろに下がってしまい立て膝になってしまった。

「無礼は心得ておりますが、急に銃を向けてきたあなたも無礼…こ
れは両成敗という事で…。それとも、まだやりますか？」

不気味な笑みをしながらウエザー・ドーパントがそう言つと暫し静
寂が訪れた。

だが直ぐに2人は「ふっ…。」と小さく笑いだした。

それが切っ掛けとなりでウエザー・ドーパントはガイアメモリを抜
き、アポロガイストは青年の姿へと変わった。

「いや止めだ。そもそも平行世界など総司令にどう説明すればいい
か分からないからな…。今回は見逃してやろう。」

「それはそれは感謝いたします。ただ、私としては貴方の体を調べてみたいという好奇心もあるんですけどね…。」

青年アポロガイストは体に纏わり付いた砂埃を胸ポケットに入っていたハンカチで払いながら「冗談だろ…。」と言った。

井坂は「さあ、どうだか…。」と不気味に笑いながら答えた。

「さらばだ…異界の怪人よ…。もう2度と会うことは無いだろうな。」

「怪人とは失礼ですね…。ですがさようなら。もし別の形で出会っていれば私たちは友人になれたかもしれませぬえ…。」

話した内容は短かったが、互いに自分達が似たような存在ということを理解した。

そしてそれぞれ別れの言葉を言い残すと、互いに後ろを向き去っていった。

風都海岸

ジャスティス・ドーパントの爆音とともにXライダーとWの周りに8本のガイアメモリが落ちてきた。

それは桑田悟が使用してガイアメモリであり、どのガイアメモリも完全に破壊されていた。

仮面ライダー達は変身を解いた。

そして照井は仰向けに倒れている桑田へと近づいた。

「桑田悟…。ガイアメモリ密売及びガイアメモリの使用の罪で現行

「犯逮捕だ…。」

照井は気絶している桑田を無理やり立たせその手に「ガチャリ」と手錠をかけた。

逮捕時間を言おうとした照井であったが、時計が未だに正しい時間が差していない事に気付き、言うのを止めた。

桑田が逮捕されるのを見てみるとフィリップは足元に落ちていた1本のガイアメモリに気付き、それを拾った。

それはパラレルメモリであった。

「それが例のパラレルメモリか…。今回はそいつのせいで散々な目に遭ったなあ。」

「確かにそうかもしれないね。ただ翔太郎、僕達が神敬介や立花藤兵衛に会えたのもこのメモリのお陰だけだね…。」

フィリップがそう言うのと翔太郎は帽子を深く被り直し、「そうだな…。」と答えた。

ふと隣を見てみると、敬介が悲しそうに静かになった海を見ていた。藤兵衛の話によれば敬介の父親がGODに殺されたのも海…。

甦った水城涼子が殺されたのも海…。

何か気の利いた言葉を言わなければ…。

そう考え翔太郎は話しかけようとしたが何と声をかけたらいいか分からなかった。

「ええと、あのお…。」と声に出して考えていると、それに気付いた敬介は「大丈夫だよ…。」と微笑みながら話し始めた。

「俺は戦い続けるよ…涼子の為に…親父との約束を守るためにね…。」

涼子は最後に敬介に仮面ライダーとしてGODと戦うことを望んで

いた。

それは彼の父親神啓太郎と同じ願いであった。

GODの野望を打ち砕く…、その誓いは敬介の目に、敬介の手に、敬介の胸に渦巻き流れているのであった。

翔太郎はそれを聞くと「そうか…。」と呟いた。

「おお〜い！！ お前達大丈夫かあ！！」

「竜くうううん、フィリップくううん、敬介さああん、ついでに翔太郎くううん！！」

藤兵衛と亜樹子が彼らの元へと駆け寄って来た。

自分が「ついで。」呼ばわりされた翔太郎は「俺はついでかよ！！」と叫んだ。

どうやら翔太郎にはまだ完熟は遠いようであった…。

ハートボイルト

「全く心配させおって、もうちょっとで2人共やられそうだったじゃないか。」

憎まれ口を叩く藤兵衛であったが、その顔は満面の笑みであった。

口ではそう言うが、それほど仮面ライダーの勝利が嬉しかったのであった。

「本当に心配したんだからねえ、もっと心配させないように戦えや！！。」

亜樹子はそう言いスリッパで翔太郎を叩いた。

翔太郎は「痛っ！！ だから何で俺ばかり叩かれるんだよ！！」と叫んだ。

そんな2人のやり取りを見て皆笑ってしまった。

すると翔太郎はある事に気付いてしまった。

それは周りの前の風景が徐々に消えかけているという事であった。最初は「疲れているのか？」と思い目を擦ってみたが、決して見間違いないではなかった。

しかも驚く事に周りの風景だけではなく敬介や藤兵衛、それに亜樹子達の体までもが徐々に消えかけていた。

「おい…どういことだ…。」

自分の体を見てみると、驚く事に自分の体も消えかけていた。

「きゃあああああ！！私の体が消えかけてる！！私聞いてなああああ！！！」

「何なんだこれは？一体どうなってるんだ？」

亜樹子や藤兵衛も異変に気付き騒ぎ始めた。

すると結城が「心配しなくていいですよ…。」と言いながら近づいてきた。

「元々今の地球はそのガイアメモリという物で2つの地球が融合して生まれた地球…。そいつが壊されたことにより地球が元通りになるうとしているんです。これは地球が元通りになるうとしている現象だ。」

「成程…。確かに今の地球は僕達の地球とも神敬介達の地球とも言えない中間的な地球だ…。そして今僕らをそれぞれの地球へと戻そうとしている…。恐らくこの現象は今この地球のあちこちで見られているだろう…。」

結城の言葉にフィリップがそう続けて言った。

2つの地球は元に戻る…。

それは事件の解決を示しており、同時にXライダーとWの別れを意

味していた…。

事件の解決は嬉しいが、別れは悲しかった…。
でも最後に湿っぽいのは嫌だ…。

そう考え亜樹子が先陣を切って話し始めた。

「じゃあね…敬介さんに藤兵衛さん、それとええ〜と…ライダーマ
ンさんも元気でね。」

「さようなら亜樹子ちゃん。」

「おお、じゃあな。ただあまり人の頭をスリッパで叩くんじゃない
ぞ。」

「ライダーマンはもう1つの名前、本名は結城丈二だよ…亜樹子ち
ゃんも元気でね。」

亜樹子は悲しそうに手を振り別れの言葉を告げた。

敬介・藤兵衛・結城はそれぞれの言葉で亜樹子に別れを告げた。

「おい、翔太郎、それにフィリップ！ あのライダーキック、や
はりお前は立派な仮面ライダーだ。これからも…頑張れよ。照井も
少しは人の話に耳を傾けるんだぞ。」

「ああ、色々とありがとうなおやっさん。」

「中々興味深い特訓内容だったよ。」

「俺に指図するな…。」

藤兵衛は2人に激励を与え、それに翔太郎とフィリップは笑顔で答
えた。

照井は相変わらずであったが…。

最後に敬介と翔太郎、それにフィリップは互いに見合っていた。

色々言いたい事はあった…。

しかし言わなくても大体理解する事が出来た…。

それは短い間だが一緒に戦った彼らだからであった。

「じゃあな×ライダー、また会えるといいな。」

「僕達の事…忘れないでくれよ…。」

「それは俺のセリフだよ…またいつか…W。」

彼らが別れの言葉を言うと同時に、その地球は完全に消えてしまった。

それと同時に融合していた地球は、1つの地球へと戻ったのであった…。

最終話・X編 X対再生怪人軍団！！ さらば仮面ライダーW

モトクロス訓練所

2日前から降り続いた雨も上がり、空は気持ちいいほどの青空であった。

そんな青空の下では2人の仮面ライダーが甦った怪人軍団と戦っていた。

1人は銀の仮面に黒マフラーの 仮面ライダーX、もう1人は死んだと思われていた口割れの仮面が特徴の4番目のライダー ライダーマン であった。

ライダーマンの助けもあり再生神話怪人軍団はどんどん倒されていた。

それを指揮している神話怪人 ケンタウロウス もXライダーによって徐々に追い詰められていった。

「これで終わりだあ、ケンタウロウス！！ とおう！！ エエエツクス…2段…キイイイック！！」

「おのれえ、Xライダー！！」

再生怪人を倒したXライダーはその場を高くジャンプし必殺技 X2段キック をケンタウロウスに炸裂させた。
X2段キックを受けたケンタウロウスは後ろに吹き飛び、最後の力を振り絞り叫んだ。

「我が偉大なるGODに栄光あれええ…！！」

そう言い残すとケンタウロウスは爆発していった。

Xライダーの元へ藤兵衛とライダーマンが近づいてきた。

「Xライダー、こいつが4番目の仮面ライダーでお前の先輩のライダーマンだ。」

藤兵衛がそう紹介すると、Xライダーとライダーマンは「よろしく。」と互いに言い握手をした。

紹介し終えた2人の仮面ライダーは変身を解いた。

藤兵衛と結城は久しぶりに出会った為、昔話に花を咲かせていた。

果て…何故ケンタウロウスが生きていたのであるのか？

再生されたのか？

いいや違った。

地球が融合する前に修正されたのであった。

2つの地球が融合した出来事は無かったことになり、それに近い出来ごとに修正されたのであった。

修正された地球ではケンタウロウスがXライダーを抹殺するために再生怪人を引き連れて襲いかかり、ピンチに陥ったXライダーを助けにライダーマンがやって来て、そして2人の仮面ライダーが協力して再生怪人軍団とケンタウロウスを倒した…という事になった。

それだけではなく地球が融合していたのが無かったことになっている為、藤兵衛や結城、街の人々からも地球が融合していた時の出来事が無くなっていた。

そう…仮面ライダーXと神敬介を除いて。

敬介は藤兵衛と結城から離れて空を見た。

地球が元に戻り、モトクロスの練習を始める前まで戻っていたが兎に角、最初は驚いた。

藤兵衛は左翔太郎やフィリップ、仮面ライダーWの事をも覚えていなかったからであった。

「ただど自分は覚えている…。」

あれは夢だったのでは…と考えてしまいそうになった。

「誰も覚えていないのに、何で俺だけ覚えていたのか…。それはこいつの仕業かもしれないな。」

「敬介はポケットからとこの地球には存在してはいけない平行世界メタモリを取り出した。」

「何故敬介が持っていたのか？」

「実を言うと敬介もその理由を知らない…。」

「気付いたら持っていたのだ。」

「これがあつたからこそ、あの出来事が夢ではないと確信が持てたのであつた。」

「今回襲いかかって来た再生怪人の中に涼子さんはいなかった。だけど俺は最後の言葉も全部覚えてる…。それに仮面ライダーWの事も…。」

地球が元に戻り修正されたという事は当然、弔ってあげたいと思っていた涼子の死体は無くなっていた。

しかも今回の再生怪人の中には涼子はいなかった…。」

「だが敬介はもう十分であった。」

「誰も覚えていないとはいえ、自分は確かに涼子の最後の言葉を聞いたのだ。」

「敬介はそれを確かに覚えていた。」

「それだけではない、亜樹子との出会いも…。」

ドーパントとの戦いも…。
仮面ライダーWとの共闘を…。
全てを覚えていた。

「それだけ覚えていれば十分だ…。」

そう言うと、敬介は手に持つパラレルメモリを強く握り潰し破壊した。

「この地球にガイアメモリなんてあつてはいけない…。仮面ライダーW…か、もう2度と会うことは無いだろうけど俺は絶対に忘れないよ…。」

敬介が誰に言うわけでもなく、青空に向かってそう言う、「おおーい、敬介！！」と藤兵衛が呼ぶ声が聞こえてきた。

「今行くよ、おやつさん。」

そう答え、藤兵衛の元へと向かっていった。

最終話・W編 Sの報告書ノさらば仮面ライダーX（前書き）

きつかった3話連続投稿…。

あとがきやオリジナルキャラ紹介は時間をおいて書きます。

最終話・W編 Sの報告書ノさらば仮面ライダーX

今回の事件を何処から説明すればいいか…。

そもそもこの事件を報告書にするべきか散々迷ったんだが、書く事に決めた。

地球が元に戻り、気付くと俺は雪絵さんを亜樹子と一緒に病院へと送り届けた帰り道だった。

隣にいた亜樹子は何も無かったように雪絵さんの事を話していた。

敬介やおやっさんの事を亜樹子に聞いてみたが、「何言ってるの?」
と言われてしまった。

どうやら亜樹子は全然覚えていないようであった…。

頭が可笑しくなりそうだった…。

あれは夢だったのか?

そう思いながら事務所に帰ると、元に戻った事務所ではフィリップが俺の帰りを待っていた。

フィリップは俺と同じで全てを覚えてる。

フィリップが言うには地球が元に戻る際に、強制的に人々の記憶を地球が融合してない記憶に修正したらしい。

フィリップの暴走していた地球の本棚も元に戻ったらしいが、どうやら今回の事件の事は載っていないらしい…。

まあ、地球が強制的に修正したなら地球の本棚に載って無い事もしようがないか…。

そう言えば照井に連絡して、覚えているか聞いてみたが…。

駄目だった、照井も覚えていなかった。

それどころか照井は「ガイアメモリの密売犯、桑田悟の取り調べで忙しい。」と言ったんだ。

照井の話を聞くと融合していた時の地球とは違く、桑田は抵抗する様子も無く捕まったんだと…。

まあ、こいつにはいつかちゃんとした正義のヒーローってやつになつてもらいたいな…。

おっと、話が反れちゃった。

今回照井が没収したメモリの中にパラレルメモリは無かったらしい…。

フィリップ曰く融合していた時と比較的に近い出来事が起こっているらしいが…。

だとしたらパラレルメモリは何処に行ったんだ？

地球の本棚にはパラレルメモリの事も記載してなく、これで完全に

パラレルメモリの行方いは完全にわからなくなっちまったな…。

だけでもしあれがあったとしても俺は破壊するだろうな…。

あんな物があつたから、あの事件が起きたんだ。

涼子さんもあんな事にはならなかっただろうし…。

それを思うと破壊するのが一番だ。

そう言えば、亜樹子達が覚えていないという事はおやっさん達も覚えていないのだろうか…。

でも俺は…いや俺達は覚えているあの事件を、敬介の事も、おやっさんの事も、ライダーキックの事も…。

全部覚えている…。

まあ、それでいいか。

そう言えば、俺は今回の事件に名前を付けることにした。

フィリップも言い名前だと言っていたしこれで決まりだな。

2つの地球でガイアメモリや改造人間など未知なるものが交差した事件…。

「ダブルストレンジス
双方の未知」…ってな。

オリジナルキャラやガイアメモリの紹介

世界設定

XライダーとWの地球がパラレルメモリの暴走によって融合してしまつた地球が舞台。

2つの地球が1つになろうとしていた為、街に違和感を感じ、それだけではなく鳴海探偵事務所の室内が喫茶店COLになるという現象が起こつた

しかしパラレルメモリは仮面ライダーの活躍により破壊され地球は元に戻る。

その際、修正作用により地球が融合した事は無かつたことになり、一部の人間を除き人々からその時の記憶が無くなつていた。

その後、それぞれの地球で融合していた時に起こつた出来事と近い出来事が起こつた。

オリジナルキャラ設定…

GOD 神話怪人ケンタウロウス

神話上の生き物ケンタウロスを模した怪人。

神話通り人間の上半身と馬の下半身を併せ持ち、体中に鎧を纏つて
いる。

腰に長剣、背中には弓と矢、それに斧と多彩な武器を使いXライダーを苦しめた。

融合している地球では、GOD研究所を破壊した犯人とXライダー

の抹殺の使命をGOD総司令より受けており、Xライダーと2度戦った。
修正された地球では、Xライダー抹殺という使命だけ受けており、再生怪人を引き連れてXライダーを襲い一時は優勢になるが、ライダーマンの登場により次第に劣勢になった。
最終的にはどちらの地球でも、X2段キックを受けて敗れた。

桑田悟

風都でガイアメモリの売買をしていた男。
照井竜に逮捕されそうになった際に、たまたま靴に入っていたパラレルメモリを使用…。
子供の時に見たヒーロー番組の影響で正義のヒーローに強い憧れをもっていた。
その為パラレルメモリで訪れたXライダーの地球で、悪の研究所と知りGOD研究所をもう1本のサンダーメモリを使用し襲う。
この行いが今回の事件を引き起こした。
修正された地球では照井にメモリの売買を摘発され、抵抗する様子も無く逮捕された。

Pサンダー・ドーパント

桑田悟が変身したドーパント。
本来はパラレル・ドーパントの筈であったが、パラレルメモリに戦闘能力が無い為に新たにサンダーメモリを使い生まれる。
青色の体に巨大なアメフトの様な緑色の鎧を纏い、巨大な両肩には右にPの文字、左にはTの文字が刻まれており、顔はドレッドヘアの様な髪に黒いサングラスの様なものが装着されている容姿。

これはキン肉マン？世のボルトマンを想像してくればわかりやすいかもかもしれません…。

2本のメモリ力を使った影響で強力な力を持ち、体中から電撃を放つ。

その力はWさえ凌駕する程であった。

ただし2本のメモリを使用した副作用で、メモリが体内から抜けなくなり、体の1部が元に戻らず、体中が蝕まれる様な苦しみが生じる。

ジャステイス・ドーパント

桑田が新たにスパイダー・マグマ・アイスエイジ・トライセラトックス・ビースト・アームズの6本のメモリ、計8本のメモリを使用して登場した歪んだ正義・ドーパント。

真赤な体に青・黄・黒とさまざま模様が入り、蜘蛛をベースとした体に8本の腕と16本の脚をもち、悪魔の様な顔に幾つもの瞳を持つ外見。

個々のメモリが暴走しており、自我を持ち合わせてはいない。

瞬間的な再生能力と8体分のメモリの能力で仮面ライダーを追い詰めたが、最後は8本のメモリが集中している頭をライダーダブルキックで破壊され、爆発し消滅した。

修正された地球では。Pサンダー・ドーパントと同様で現れる事は無かった。

ガイアメモリ

パラレルメモリ

「平行世界の記憶」を宿したPのガイアメモリ。園咲流兵衛曰く奇跡的に生まれたメモリであり、平行世界の地球へと行く能力がある。

パラレルメモリを使用して変身するパラレル・ドーパントには全くという程戦闘能力が無い。

今回の場合は暴走して2つの地球を融合させる能力に変わってしまった。

修正された地球では、神敬介の手元にあったが「この地球には必要無い。」という理由で破壊された。

サンダーメモリ

「電撃の記憶」を宿したTのガイアメモリ。

桑田がパラレルメモリと同時に使用したメモリである。

通常は体から電撃を放つサンダー・ドーパントへとなる。

あとがきと次回作予定作品紹介

いやあ、終わりました。

今回の長編も無事に終わる事が出来ました。

同じ時期に始まったある方の「仮面ライダー×仮面ライダー Z O & キバ」と互いに昭和×平成で同時コラボになっていましたが…。その時期互いに忙しくなり、気付いたらその方がサイト退会してしまいました。

互いに色々と細かな点まで決めていたので、結構ショックが大きかったです…。

本当は止めてしまおうか…。

誰も読んでないだろうなあ…。

と考えていましたが、「続きがみたい。」というある方の感想をもらい続ける事が出来ました。

反省する点は山ほどあります…。

文章が読みにくいや、内容が分かりにくい、説明が多かったり、説明不足だったり…。

本当にすみません、次回作はこの反省を生かして書きたいと思いません。

作品解説

今回の話は元々コラボ時に決めていた設定と大分異なる物になってしまいました。

ある方とコラボ時に決めていた設定は…。

- 1・今回の様な事件が別のライダーにも起こっている。
- 2・主犯格は神的な存在…。
- 3・ライダー以外（藤兵衛や亜樹子など）には正体をばらさない…。
- 4・次回作の昭和×平成の作品も決めていた…。

とまあ、大体こんな感じですよ。

それがコラボじゃ無くなりどうするか…？

水城涼子が復活することは決まっていますが、それは神的主犯格の仕業で、メモリをばらいたのも神的存在そいつの仕業…。

一旦練り直すしかない…。

そう考えパラレルメモリなんて反則的な物が生まれました

アポロガイストは、私はデイケイド版を認めません。

アポロガイストは冷静でキザな奴と私は信じています。

「おのれえ、デイケイド！！」なんてセリフ私は絶対に認めません。

桑田悟は冷静な性格にするか…。

はたまた凄い馬鹿な性格にするか…。

と色々迷った末にあの「正義のヒーローになりたい。」という性格になりました。

ただし、独善で周りは顧みないという性格です。

Pサンダー・ドーパントや、ジャスティス・ドーパントは本当にどうするか迷った末に登場です…。

というより名前に時間がかかりましたね。

ボルト・ドーパントにするとウエザー・ドーパントと能力が似ちゃいますし…。

ジャスティス・ドーパントは最後までキマイラ・ドーパントにする

か迷いました…。
もう少しネーミングセンスが欲しいです…。

仮面ライダーの象徴といえばライダーキックです。

藤兵衛さんは1番それを知っているような気がします。

なのでWにあんな無茶ぶりの特訓をさせました、そもそもV3以降は特訓すら無くなってしまいました…。

そして前作同様決め技は「ライダーダブルキック」です。

決して「ダブルライダーキック」とか言わないでくださいね、私は初期の技名しか認めません。

なるべく敬介達の性格はTVを重視して書きましたが、違和感ありまくりでしたね…。

井坂とアポロガイストは性格が難しすぎます…。

取りあえずこんな感じですかね…。

質問などがありました感想に書いてください。

次回作予定作品

さて次回作ですが以前から活動報告にも書いていた通り昭和（1号ライダー〜スーパー1）VS平成（クウガ〜W）でやると思います。昭和ライダーが主役で、平成ライダーが悪役になります。

恐らく批判は多いと思いますが、誰も書いた事が無い作品が書きたいと思いやることに決めました。

「このライダーとこのライダーの戦いが見たい!!」と思ったら感想にでも書いてください（ただしクウガとディケイドは除きます）。

今現在決まっている昭和ライダーVS平成ライダーは…

1号ライダーVSアギト

ライダーマンVS電王

ストロンガーVSブレイド

スーパー1VS響鬼

…とこんな感じですよ。

それではここまで「仮面ライダー×仮面ライダー X&W DO
uble Strangers」を読んでくれてありがとうございます。
ました。

次回作も気が向いたらよろしくお願いします。

エレメントブレイドでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0593o/>

仮面ライダー×仮面ライダー X & W - Double Stranges -

2011年5月15日13時43分発行